
魔神患者の傷痕

齊藤まいご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔神患者の傷痕

【Nコード】

N1536W

【作者名】

齊藤まいご

【あらすじ】

アガイはある日、神話性呪的発声現実化病という病にかかり、人を殺してしまう。そのことをきかっけに、黒服たちに洗脳施設イージー・マスカットへ連れて行かれる。待っていた博士は、アガイの持つ力は戦争を終わらせることができると説明するが、納得するまでもなくアガイは巻き込まれていく。

神話性現実化病

銃弾飛び交う教室で、僕は叫んだ。

みんな死んじまえ。

すると現実はずか言葉に従ってその場は血の池地獄になり、死体じゃないのは僕だけになった。

これはおかしい話だ。理論は現実に従うはずだろう。それと同じで、頭の妄想は直接現実にならないはずだ。でもなった。僕の馬鹿みたいな命令は拡散して全員に届き、みんな死んでしまった。

誰しもが考えていることが本当になればいいと思ったことがあるに決まっている。しかし、どうもそいつは考え直したほうがよさそう。

なぜって、気持ち悪いからさ。頭の中のものがそのまま生まれてしまうなんて、イタイなんてものじゃない。根本的に吐き気がする。死ぬといった相手が死んでみる。驚いて、なにかが崩壊する音が聞こえるよ。

ねえ、ここは軍隊かい？ もし仮に軍隊だとしても、今が戦争だとしても、死ぬと言われて死ぬなんて、狂っている。狂っているだけならいい。狂人にだって居場所を用意されるべきだ。でもね、狂っていて、かつ、終わっているんだ。終わってしまったら、終わってしまうしかない。

嗚咽が漏れる。漏れて漏れて、体が裏返りそうだった。

体内から出てきたどろどろの物体が血と混じって、どこかの有名な画家が絵具に欲しがりそうな色合いになった。

きっとそいつは無邪気に、こりゃあ素晴らしい、是非譲ってくれないかい、と尋ねてくるんだ。

そしたらこう返してやる。くそつたれ、全部人間からできているから、自分で作れよ。

涙があふれてくる。

こんな、こんなはずじゃなかった。

世界を恨んでいた。社会に殺意を抱いていた。学校を破壊したかった。でも、こんなはずじゃなかった。

せめて怒りと憎しみがもつと間に挟まっていると思っていた。不安と絶望が待ち受けていると予想していた。プロセスが、過程が足りない。一分間の心臓の鼓動を七つか八つ飛ばしている。

音が聞こえた。ぷうん、ぷうん。虫が来たのだろうか。もしかして絶好の場所なのか。

食料、繁殖、さんざん自分たちを殺してきた者どもへの嘲笑。目的はどれだ。虫に目的を問いたい。目的、目的。せめて目的。

かつかつかつ。虫の次は人間の足音だ。

こないでくれ。死んだらどうする。もう殺したくない。殺したのか？ みんな銃で撃たれて死んだだけかもしれない。

嘘だ。僕自身が信じていない。そんなに命中率が高かったら、とつくに戦争は終わっている。

誰かの話し声がある。おそろしい人間語だ。死体の処理、無線の連絡、僕の処遇。運命を決める言語のやりとりが行なわれている。

どうにでもしてほしい。早く過去にしてほしい。牢屋に入って、一生しゃべらず、ただ米を食べたい。

体を持ち上げられる感触がある。

反射的に抵抗した。まだ吐きたい。とつくに吐くものなんてなくなっているが、とにかく内臓でもなんでもいいから、いちから育ててもいいから、出させてください。

だけど、僕以外が僕のことを考慮してくれるには、愛も交渉もなかった。

担架に乗せられて外に連れ出される。どうせ医者のところへ行くのだろう。

いやだ。カテゴライズされるのはいやだ。分類と診断、そして断罪。医者と裁判官の世話になるのはいやだ。

白い部屋に入れられた。

病的に白い部屋。ここは病院だった。病院がすでに病的なのだ。病気が治るわけがない。

そう、病院とは病気を治す場所ではなく、病気を決定する場所なのだ。誰かがそう言っていた。

天秤で計るように僕を見ている医者 of 男。青白い肌に禿げた頭、眼鏡をかけている。大きな目玉と出っ張った腹がカエルを連想させた。

「神話性呪的発声現実化病ですね」カエルがしゃべった。げろげろ。はあ？ と律儀に尋ね返した。

「病気ですよ。あなたは病気なんですよ」

そつだろつな。あんたらに言わせれば、ジャンケンで給食の余った牛乳を取り合うのだって病気なんだ。運命性牛乳奪取病だ。

「神話性現実化病は最近流行っているんですよ。軍の実験のせいで魔力爆弾があちこちに落とされて、迷惑な話です」

流行り病のせいで教室のみんなは死んで僕は生き残った。そういうことかよ。

「生きていることを喜ぶべきでしょうね。概要しか聞かされていませんが、革命者が学校に潜んでいた以上、人間の生存そのものが奇跡です」

本当の奇跡なら、みんな助かったはずだ。

僕の頬から、つつ、と涙が流れた。

友人のサラスナは良いやつだった。良い人代表だった。いつもにこにこ笑って、争いを好まず、スポーツが得意だった。

お調子者のヒラタはいるだけで雰囲気明るくした。勉強ができなかったが、影で努力しているのを知っていた。

ガキ大將的なフクベは暴力的で、僕は嫌いだった。でも、彼が仕入れてくる性的な情報は質が高く、ひそかに期待して待っていた。

クラマサは女性として魅力的で、ふとした優しさに惹かれた。消しゴムを拾ってもらっただけでドキドキした。

全員いなくなった。過去形の馬鹿野郎。

冷やかな目でカエルがため息をついた。

「概要しか聞いていないと言いましたが、今のあなたに対して向けるべき報告は受けていますよ。……いいですか、あなたは『みんな死んじまえ』と呪いをかけたんです。みんなを殺したのは、あなたですよ」

僕は口を開かなかった。子供が都合の悪いことをやり過ぎすように、沈黙した。

「あなたの呪的能力はあの場限りの発現で、現在は失われています。また魔力を得れば復活する可能性はありますが、おそらくこれから先、思うがままに使える機会ないでしょう」

……なにが言いたい？

「変な気は起こさないように。それだけです」

お大事に、という言葉とともに僕は病院から出た。

太陽にはナチュラルメイクしか施されておらず、鬼畜に肌を焼いてくる。

突き抜ける青空があまりにも爽やかで不快だ。異常気象が噂されなくなつて久しいが、夏が暑くて熱いことはなんら変わらない。

街並みは僕が人殺しになってもボロボロのままだった。穴だらけビルの壁、傾いたコンビニエンスストア、ひしゃげたポスト。直っているものは一つもない。

人の更新と街の更新が必ずしも一致するわけではないことに、なんだかがっかりする。

……なんでここは牢屋じゃないんだ。

実のところ理由はわかっている。僕がしでかした出来事は、事件

とは名づけられないからだ。それだけだ。風邪をひいたり、看板に車をぶつけるくらいの交通事故を起こしたりするのと同じだ。すでに僕は悲しみと後悔を忘れて歩き出しているし、医者カルテを捨てているかもしれない。いずれも保存しておかなければならないなんて法律はない。

この世がいかにしているのは今に始まったことじゃなかった。不思議なのは、いかれていると思える自分だ。たぶん、大半の人々が自覚的に、状況のネジの抜け具合を説明できる。にもかかわらず同時に、慣れっこにもなっている。正気の綱を補修し続けたら、補修部分のほうが長く太くなってしまったようだった。

ザ、ザ、ザ。

地面のけずりカスを蹴る効果音。

目の前に現れた黒服の男たちについて、僕はようやく死神が重たい腰を上げたか、と思った。そろそろ活躍してもらってもいいころだ。人間は神様のフリを続けすぎた。本家本元に気張ってもらわなくちゃ、役どころがあやふやになる。

「アサイだな。我々と一緒にきてもらおうか」

アガイだよ、と訂正する。

黒服のひとりが一歩前に進み、懐から無造作に、ライターくらいの刃渡りをしたナイフを取り出した。

不安と期待で胸がふくらむ。そんな貧弱な武装でなにができるのか。そんなちっぽけな凶器でとんでもないことをやらかせるのか。

「手荒な真似はしない」

行動と言動と心理が一致しないのは今の人類によくあることだ。でもさすがにきよとした。目が演奏記号のフェルマータみたいになった。ナイフは「手荒」か「調理」の象徴ではなかったか。食材は人間以外には見当たらない。

黒服がナイフを手首に当てた。とつさに、やめろ、と言った。

僕の一言なんて、なしのつぶて。

摩擦が血液のしぶきを呼んだ。天然リストカッターを僕は初めて

見た。

どぼどぼと赤で染まる地面にフラッシュバックを起こし、腹から喉にかけて躍動がずんつとくる。

暗い祭りがどここと太鼓を叩いて、一生懸命吐き気を催そうと頑張った。空っぽだったはずだが、胃液かなにかをちよつと落とした。

血液は足元まで迫ってから、不意に挨拶するようにぴょこんとジャンプした。僕が驚いていると川に戻ってきた鮭みたいにどンドン跳ねて、僕を取り囲んだ。

なんだこれ。

「血の形をした使い魔だ。悪魔動物の一種だよ。きみが疲れていると思ってね。そいつが運んでくれる」

ついていくとは言っていない。

「そうか。言い方が悪かったな。頼んでいるわけではないのだ。きみは我々と一緒にくることが決定されている」

どこへ？

あきらかに致死量を超えた血が流れていたが、黒服は汗もかいていなかった。たぶん皮膚が鉄できている。血液悪魔は増大し、僕の爪先から腰あたりまでを覆った。ぐらんと揺らつく。

どこへ？ もう一度聞いた。

黒服の表情が変化する。無から有へ。筋肉が形作る皮肉と寂しさ。「洗脳施設イージー・マスカットだ」

暴虐老人

なんとか逃げられないものかと体を動かしてみたが、腕まで悪魔が取り付いて自動操縦状態だった。

残念ながら死神ではなかった黒服たちは僕を四輪自動車に詰め込み、イージー・マスカットとやらに運び始めた。まるで荷物扱いだ。トランクに押し込められなかっただけでも憎悪を抑えるべきなのかもしれない。

幸いにも首は稼働できたので、移動中僕はずっと外の景色を見ていた。むなしい木々と歩行者、屋根を失った家、活躍するジャンクフード・ショップ。幼いころ、こんなにちは、と挨拶すると、店員さんがにこつと笑って応えてくれたっけ。ああ、おにぎりが食べたいな、と切実に思った。

どかん、と大きな音がした。振動が伝わってくる。魔力爆弾がまたどこかに落とされたのだろう。

本当に魔力爆弾が落とされたところなんて見物できた試しはない。だから「どこか」なのだ。「誰か」とか、「どこか」とか、そういうもので世界はできている。

黒服を眺めて、死ぬ、と言ってみた。
しーん。

静けさが身に触れる。気温が一六度くらいまで低下したようだった。僕の人を傷つける言葉は彼らの強さに助けられて、ちよつとばかり空気を実感するだけの効果で済んだ。

「きみの呪的発声は効力を持ち得ない。少なくとも今は。よほどの偶然が起きない限り」

回りくどい語り口で黒服のひとりが言った。声は同じだったし、手首は隠れているし、さきほどの黒服と同じなのだろうか。僕は黒服が何人いるかも把握していなかった。いち、に、さん、たくさんだ。

偶然って？

今日の僕は質問ばかりしている気がした。もしかしていつもかもしれない。あまり自分のことを振り返らないものだから、よくわからない。

「魔力の波長がぴたりと合う爆弾が落とされれば、あるいはな。だが確率は低い。現在確認されている魔力パターンは二〇万五七八だ。爆発音を聞いたび二〇万五七八分の一に祈るのは得策ではない」

親切に教えてくれて、どうもありがとう。

二日ぶりにお礼を述べて、僕は眠った。二日前にお礼を言ったサラスナは僕が殺した。ちくしょう。

起こされると夕方になっていた。

到着先は堅牢でいちいち物々しい、ガトリングガンみたいな柵に囲まれた四角い建物だった。灰色の豆腐と説明されれば次からこの建物が思い出せるだろう。入り口はズボンのファスナーに似ていた。もう「きて」とも「こい」とも言われず、血に乗ったまま中に案内される。介護されているみたいだ。

内部はきれいで、淡めのオレンジと緑を基調としたデザインだった。掃除用具でホッケーをしたらさぞ楽しいだろうなあ、と好感を抱く。

多くの人々が往来していて、虚ろな瞳をした者から輝かしく未来を発散している者まで様々だった。そいつらは嫌いになった。僕らしい人はいなかったから。僕は僕の不在に敏感なのだ。

黒服が受付の女性と会話している。女は茶髪で巨乳でデブだった。パイをぶつけたくなる顔をしている。マニュアルどおりに攻めれば陥落できそう。まず気持ちのよい挨拶をする。僕は挨拶が苦手だからこの時点で困難だ。次に一日三つ以上ほめる。そんな愚かな行為はやる前に痙攣を起こしてしまう。最後に接吻を可能な限り早め

にかます。唇が腐るだろうが彼女はこれでモノにできる。ようするに僕は頼まれても彼女と付き合いたくはなかった。

「博士は地下にいるようだ」

黒服が黒服に伝えている。ひとり伝言ゲームのようで面白い。

地下に向かうエレベーターは、黒服と僕と血でぎゅうぎゅう詰めになった。いい加減この使い魔をどかしてもらいたくもあつたが、自分で自分を動かす感覚を忘れているような気がして怖かったので訴えるのはやめておいた。

みんな儀礼的無関心を発揮して静かだった。階数が表示されている電子板をじつと眺めている。ごほん、と誰かが咳をした。

チン、と殴りたくなる音がしてエレベーターは地下四階に止まった。

地下らしくないまぶしい廊下が続いている。滑稽なほど蛍光灯が並んでいた。黒服と血が行進し、カツコツペツチャと響く。途中、警報機の赤いボタンが「強く押す」と書かれた姿を晒していたので僕は久しぶりに腕を上げようとした。がっちり固定されているのがわかった。

やがてたどり着いた世界の果て、「第二絶対研究室」とプレートが掲げられた黄色い扉は、僕らを歓迎するように自動で開いた。と思つたら入る前に閉じた。センサーが不具合を起こしている。もう一度開いた隙に黒服が体を滑り込ませて閉じるのを阻止した。

部屋の中は書類と観葉植物にあふれて溺れそうだった。泳ぐように紙と葉を掻き分けて黒服列車が通過する。線路はどこまでもは続かず、あっさり終点まで導かれた。

「博士、例の者を連れてきました」

博士と呼ばれた人物は期待どおりの老人で、刻まれたしわにいくつコインを挟めるかを競うゲームで遊べそうだった。丸い眼鏡は知性を司る小道具に見える。腰は曲がっていないが、脚が悪いのか人を叩くのに便利なのか頑丈そうな杖をついていた。ふるふるする指先で僕を差し、目を凝らしてかろうじて確認できるくらいに唇の端

を歪ませた。

「きみがアライくん、か。待ち望んでいたよ。さあ、きみとわたしの関係をスタートさせよう。まずは座って体を休めてくれたまえ」
アガイだよ、と訂正する。あと、なんだか気持ち悪いおじいさんだな、と文句を言った。

「血液悪魔が邪魔だね」

博士の言葉に黒服がうなずき、血の使い魔が僕からはがれる。時間を巻き戻るように手首へ帰還した。

肩をぐるりと回してみる。特に問題はなかった。むしろ調子がいい。血液悪魔健康法なんてメディアで特集されていただろうか。

「さて、さて。まずは確かめたいことがある。口を開けてくれないか」

いやだ。

五分で終わる歯の検査を口を開けたくないという理由で九時間かけたこの僕が、そんな言葉に大人しく従う道理はなかった。

ところが、いやだ、の「や」と「だ」の間くらいで、僕の口には杖がねじ込まれていた。

ほごっ！僕はスローモーションで再生してほしい声をあげた。

すさまじい勢いがあつたのに喉まで貫通していないのが不思議で、杖は僕の口を開ける目的を遂げるのにちょうどよくはまっていた。

「はい、じつとしていて」

じたばたしようとするのを黒服に押さえつけられ、じつとさせられた僕は、唾液がぼたぼたとこぼれる労力に意識を集中した。じわじわ、ぼた、ぼた。人間の七割は水分でできているらしいのに、こんなに失われていいのだろうか。補給が急務に思えた。もし僕が天上人だったらこの唾液の一滴一滴が地上の恵みに違いない。ヒラタが言っていたよ、雨こそが僕らの真にあがめるべき対象なのだと。確かあのときは外でマラソンをさせられそうになっていたんだ。中止になってよかった。五キロも走ったら死んでしまふ。走らなくても死んでしまった。

「ふーむ、検査薬はどこへやったかな」

博士こと杖の魔術師、もしくは暴虐老人が、僕の口に突っ込んだ杖を持ったまま、紙束をどけてなにかを探す。

あが、があ、あぐ。

「あ、これだ」

次の瞬間、僕は口に一枚の紙をぶちこまれ、杖を引き抜かれた。が、べっ、べっ！

すぐさま吐いた。なんで一日にこれほど吐くって動作をしなくちゃいけないのか、泣きそうだった。

「おお、素晴らしい。変色具合が完璧だ」

青い紙を拾い上げて暴虐老人が感心したようにうなずく。今このじじいを叩きのめせたら、三時間ほど寿命が縮んでもいい。

「魔力痕がこれほど鮮やかに残っているのであれば、成功確率はもはや一〇〇パーセントとして差し支えない。だが、数の圧倒的不足を解消するにはひたすらに時間が必要だ。魔力爆弾が軍の管轄にあるのが問題だ。まったく、とりあえず使っておけばなんとかなるという短絡的思考が、そもその原因であることに気づかないのか」

ぶつぶつとつぶやく暴虐老人。僕は黒服にとにかく水、できれば麦茶かオレンジジュースかスポーツドリンクを持ってくるように頼んで、紙のベッドに倒れこんでいた。

「そうとなれば、さっそく行動しなければならぬ。きみ、寝ている場合じゃないぞ」

暴虐老人が僕を揺さぶった。年寄りに優しく接してきた僕の過去にさよならを告げて、彼の眼鏡を割りたかった。

しかしそれよりは先に水分が必要だ。口内の小人たちが飢餓に苦しみ、神に祈っていた。祈るとはそういうことなのだ、と唐突に理解した。

「さあ、共に戦争を終わらせようじゃないか」

たわごとをBGMにしながら、ペットボトルを持ってきた黒服に抱きつく寸前の僕がいた。

博士のお遊戯

果汁三パーセントの、結局どんな味を表現したいのかはつきりしないフルーツジュースを飲みながら、僕はずっと博士のやかましい演説を聞いていなければならなかった。不眠不休で一〇八時間は働けそうな黒服でさえ、それぞれ腰を下ろしてぼーっとしていた。

「革命者が厄介なのは死ににくいという一点にある。彼らが主に銃を使うのは正しい選択だ。奪われてもたいした痛手ではないのだからね。つまりは分相応をわきまえているとも言えよう。自らの道具で滅びる可能性が低い。肉体の延長としてちょうどいいのだな。まったくそれに比べて我々の軍ときたら、我々の、とつけるのは自戒だがね、軍ときたら、魔力患者を舌触りだけで持ちたがっている。

神話性現実化病はやつらなぞに扱える特効薬ではないのに、迷惑な話だ。いやしかしきみの発現が呪的発声でよかったよ。中には静的思考というものもあってね。これが極めて行使が困難なんだ。なぜなら思考の形態がまとまりを保つのに集中力などとわけのわからないものを必要とする。これは一般に説かれる集中じゃないよ。焦点を絞ったり、リラックスと呼ばれるものとは違う。イメージとしては金箔をはりつける感じだ。うーむ、天使が地上に降りる、のほうが近いかな」

口の中のねばつきを清涼感が上塗りしてはひいていく。波が押しではかえすようだ。海に行ったことのない僕はメディアの映像を思い出す。ザザア、ザザア。じゅわじゅわした白い線が脈動を刻む。きつとあれは遠い故郷だ。帰りたくもないのに懐かしさを召還する深き青。ゆりかごから墓場までが内包された潤質なパッケージ。

もうカラだよ。

黒服が紙コップ入りのアイスコーヒーをずっと差し出した。

いい執事になれる、と言ったら肩をすくめられた。

飲んだらそれは醤油で、白い紙の何百枚かに僕はしぶきを散らし

た。ふざけてやがる。

「そろそろ本題に入ろう。きみの魔力は手に入ったばかりに失われた。手に入ったから失われた。まあ諸行無常というやつだ。だが多くの過去とは別の話で、魔力は取り戻せる。最も重要なのは、きみの力を有効に活用できれば、戦争を終わらせることが可能。うむ、それだ。可能性が一〇〇パーセントだ」

まったく聞いていなかったよ、じじ、博士。

「じじいと呼んでくれてもかまわん」

じじいひどい目にあえ。

死ねとは言わないことにした。僕はさっきより三時間ほど大人になりつつあったし、今も一瞬のごとに生命持続記録を伸ばしているし、そもそも僕が死ねと言ったばかりにみんなが死んでしまったとしたら反省すべきなのは僕だ。一番悪いのは、どうせ僕なんだろう？

「じじいに協力してくれないか。この老いぼれがくたばる前に人類に滅んでほしくないのだよ」

どうせ世界は終わるのだから、別にいいじゃないか。

「終わるとしてもまだまだ先だ。きみはきみの子供の顔を拝んでから死になさい」

自分の遺伝の結果に面を合わせるなんて、背骨が縮むよ。

「博士、面会が要請されています」

黒服が割り込んできた。

「ああ、約束があつたのを忘れていた。通してくれたまえ」

現れたのは僕より年下の少年少女たちだった。共通の特徴として挙げられるのが、容姿に恵まれているということだ。醜い奴は嫌いだったが美形もそれはそれでむかついた。基準を己に置いた中庸信仰を雪だるま式に作ったものだから、おそらく満足できる人物なんて存在しないだろう。

「博士、いよいよ革命者どもを蹴散らす時がきました」

青春じみた障壁を肌に乗えた美少年が高らかに宣言する。吹くわけもない風を意識するがごとく、赤い長髪をふあわさふあわさせ

た。剃髪機の音を耳元で鳴らしたらどんな顔をするのか、想像するだけでわくわくした。

「時はいつでもきているよ」

はつきりした声がじじいから発せられた。時計の長針と短針が一二時で合わさったような語り口だ。そんな短い台詞で切れるなら、さっきのおしゃべりはなんだったのだろう。

「ただ、人間がすべきなのは時に動かされることではない。時を動かすことなのだ。わからないか諸君。きみらは時に支配されているのだよ」

「まだ私たちの志に反対なのですか？ 今こうしている間にも、犠牲者は増え続けています」

「革命者は無差別に襲ってこない。犠牲者はすなわち、戦争加担人だ。焦る必要はないよ」

ぎくりと僕は首をひねった。滑稽な人形が劇を始める準備運動をするように。

興奮した様子で他の奴らが喚きたてる。

「戦争加担人だって、命ですよ！？ それに敵は革命者だけじゃない。異方者だって悪魔だっているでしょう」

「博士は賢い人です。わかっていないはずがない。だからこそ父さんもあなたに私たちをまかせたんだ。革命者を放っておくのは危険なのです」

ふう、とじじいはため息をついた。仕草からして、なんだか急に常識人になったようだった。

「わたしがタケミチの代わりにきみたちの後見をしたのは、革命者を殺すためではない。若さをそのまま野垂れさせては、未来を欲する資格がないと思ったからだ。もちろん、友人への義理もある。：せめてディフェンスに徹してくれはしないか。オフenseは浪費なのだ」

「博士、私たちは待ったのです。父さんが亡くなって一年待ちました。予見された日は明日だ。もう、待てない」

「それが時間の束縛の最たるものだ。過去を信じすぎるのをやめなさい。予見は予見。従うべき命令とは違う」

僕はあくびをして、目をこすった。そういえば、しばらく眠っていない。

眠るタイミングは二度あった。病院へ移送されるときと、イージー・マスカットへくるとき。しかし眠っていない。今が三度目な気がした。三度目の正直か？

ふと黒服たちに目をやる。あれ、数が減っているような。

「明日、行きます。あなたの許しを得なくても」

きっぱり言くと、少女は立ち去った。

「……許すもなにも、自由だ。本来すべての人々が」

センチメンタルやら老いっぶりやらを全開にして、じじいはつぶやいた。年齢というやつはどうしてこう、むやみに説得力を付加するのだろう。迷惑な話だ。

「おお、マガイクン。すまなかったな、行動を急かしておいてわたしのほうが色々遅れてしまっていた」

アガイだよ、と訂正する。そんなに間違えやすい名前かい？

「彼らのことが気になるだろう。そうさな、説明を省くのはあまりに不親切。戦争を終わらすのは早いに越したことがないが、わたしが少々舌を回したところでさして変わりはないはずだ。うん、では語ろう」

全然、気にならない。語らなくてけっこう。

そうした僕の意見は、抜けた下の乳歯みたいにどこか高いところへぶん投げられ、じじいのお遊戯が再開された。

「彼らは洗脳子せんのうしと呼ばれる子供たち。この洗脳施設イージー・マスカットの設計段階から想定されていた用途の結果だ。まあ、場所が子供の脳を洗ったのではない。あくまで人だ。タケミチという研究者が、イージー・マスカットで対革命者用に作った兵器なのだ。わたしは兵器としては欠陥品だと思うし、まったく人間でしかないという結論は揺るぎないがね。タケミチはとにかく兵器であることに

こだわっていた。革命者への劣等感だよ、彼にあったのは。人間扱いしなければ人間を超えられるとでも信じ込んでいたのかもしれない」

まあ、のあたりから僕は眠った。

黒服にぱちんと頬を叩かれる。眠りを妨げられるのはイラつくが、どうやらじじいがしゃべり終えていたのでよしとした。

「退屈か、退屈だったのかね」

落ち込んだ様子のじじいにざまあみろと思いながら、退屈だった宣言をした。

「そうか……」

「博士、明日は近づいています。予見が外れる確率のほうが高い以上、警戒すべきかと」

また黒服が減っている。細胞がぶちぶちと消滅していつているような錯覚。全である黒服と個である黒服がもちもちとくつついたり離れたりを繰り返しているのか。そんなふうに思えた。たぶん勘違いだ。

ああ、と僕は聞きたいことを聞かなければ、どうにも僕にとっての事態を進められない妄執に囚われた。なので質問する。

結局、僕になんの用があるわけ。

「行動だよ。きみには行動してもらいたい。どうやら洗脳子と革命者諸々との戦いは、うむ……こういう言い方は、非常にしゃくだが……時間の問題だ。どうやったって時間の幻想を頼りにしなければ、わたしは計れないので、しかたない。魔力患者の不足も、時間が解決しよう。急ぐ理由は感情的にしかないが、しかし急いでくれたまえ。少なくともわたしが寿命を迎える前には、達成したい」

聞き飛ばしたい。早送り再生がほしい。念じて要点を絞ってくれるようお願いしてみた。

「考えられる戦争の簡潔決着は、魔力患者動員による戦争加担人の全排除だ。きみにはその中心になってもらう」

願いつて、通じるものなんだね。これからは色々願ってみるこ

とにしよう。試しに、今日の出来事は全部夢だった、と願った。なにも変わらなかった。もとから夢で、まだ覚めるには早いのかな。「魔力患者の圧倒的不足は時間が解決するだろう。だが急ごう。はやる気持ちに従って。急げば短縮可能だとわたしは思っているのです。患者の数はあと八〇〇〇人ほど足りないが、なに、今すぐきみが八〇〇〇倍強力になる可能性がないわけではない。期待しているよ」

それは期待じゃなくて、ポイ捨てて言うんだよ。

「博士、異方者たちがやってきました。革命者もいます」

とうとうひとりになった黒服が報告を述べた。

「予見より一二時間ほど早いな。そんなものだ、しよせん。洗脳子
は？」

「我々が抑えています、無理ですね。革命者と同時には」

「すまん、損な役ばかり」

「いえ。それでは」

溶けるように黒服は部屋から出て行った。残ったのは僕とじじい。紙と観葉植物。静けさ。いや、蟻が歩いてた。一匹でちよろちよると這っている。頭と胴体の大きさがほぼ同じで、複数の足をかさしゅばかさしゅば振り上げている。なにより黒い。とても黒い。比較できないほど黒い。光を九九パーセント吸収してそうだ。進んでいるのか登っているのかもわからない道をえんやこらやんやこら、ご苦労様。

「これからきみには精一杯生きてもらう。患者と魔力が揃うまで。革命者や軍に捕まっても死にはしまいが、できれば単独で生存してくれたまえ。特に軍は面倒でかなわない」

別に、死ぬつもりはないけど。

……死ぬつもりはない？ 本当に？

なんでのうのうと生きているんだ、僕は。米も食べずに。

「さあ、外へ行ってくれ。絶対共同体がよくやってくれるよ」

絶対共同体？

「黒服を着た者たちのことだ。わたしは機動力がないからここにいない。イージー・マスカットが失われるとしても、精々半分だ」

言うことを聞くと思っているのか。

「聞かなくてもいい。だがね、わたしは直感を信じているんだよ。きみはそうするだろう、とね。これは希望的観測じゃない。なぜなら、希望してないからね。きみじゃなくていいんだ。でもきみはここにいる。事実を眺めていたら、行き着く先はだいたいこのあたりだろうな、とわかるじゃないか。直感はそのショートカットだよ、よくわからない。わからない。」

じじいは、博士は、腕を広げた。不恰好な鳥。まるで人間。空間を切り裂いて異次元の彼方へ飛び立つかのようだ。

「きみはクラスメイトを殺した。理由はわからない。きっかけの殺人……呼び込んだのは状況か、それとも」

うるさい。僕が殺した。僕が殺した、で、十分じゃないか。

「わたしにとつては十分だ。きつときみは向き合わねばならないだろうね。戦争を終わらせる一助になることを祈るよ」

ばちん、と博士は手のひらを打ち鳴らした。すると紙はどろどろになって、洗濯機で攪拌された洗剤が泡へ変化していくように、床の模様に転じた。カラフルなチェス盤へ。観葉植物はごちゃごちゃと混ざって巨大化した。天井に葉がぶつかる。目まぐるしい突然と把握の攻防。部屋はスペースを膨らませ、整理整頓、子供が怒られないくらいまで片付いた良識になった。

「洗脳施設イージー・マスカットの機能だ。暗示も脳を洗う一端なのでね」

博士はすぐ近くにあった扉を開け、さあどうぞとばかりに僕をいざなった。

なぜわざわざ、こんなややこしいことを。

「常に行なわれているのだ。耐性を設定するためにね。どんどん知覚できるようになってくる。いずれ抗洗脳も体験してみたらいいだろう」

廊下は変わらなかった。変わっていないだけで安心した。

「マダイくん、幸運を」

マガイだよ。あ、間違った。アガイだよ。

なんとなく急がなければならぬような強迫観念に襲われて、僕は廊下を走った。怒る先生がいなくてよかったよ。ヒラタはいつも怒られていたんだ。

革命者との邂逅

地上は戦場になっていた。空間的障壁はないし、向こうだって徒歩も車も飛行機も使えるはずだし、どこが戦場になってもおかしくはないのだけど、市民は守られ慣れているから、お茶の間に届く分にはそれなりにショッキングな絵面だろう。

イージー・マスカットの玄関部分は半壊していた。ガレキと呼ぶに相応しい、バスケットをぱきつと割ったときに現れるようなごりやごりやとした面が作られたコンクリートの破片が、あちこちに飛び散っている。人気の健康食品にも似ていて、ちよつとつまそうだった。

ちらほらと見かける銃を構えた人たちをいったん無視して、壁に穿たれた弾痕を観察した。そういう模様だったかのように穴だらけになっている。アーティスティックな感性を刺激される仕上がりだ。「なぜ邪魔をする！ まだ完全でなくとも、やつらに遅れを取りはしない。やつらだって、私たちを恐れたから予見よりも早く仕掛けてきた！」

洗脳子が黒服になにかを訴えている。うるさい連中だ。我慢してくれたらキャンディおごるからさ、静かにしていてくれないかな。

「ごおんっ！」と爆発音。耳がきいんとなった。続いてどどどどどとどと、うつすら銃声。

見て見ぬフリは限界か。

ようやく直視していた現実から目を逸らして、新しい現実になんちにはをする。挨拶は苦手だ。でも軽くお辞儀を試してみた。

不思議なもので、死体はなかった。あつたらすぐに吐ける自信がある。もうパブロフの犬。反射に組み込まれている。今は腹の中、液体ばかりだから、吐きごたえはないだろうな。

一見したところ、頑張っているのは絶対共同体、黒服の男たちのようだった。洗脳子の前に立ちふさがりながら、内部に入り込みつ

つある襲撃者たちの銃弾を血の使い魔で受け流している。といったも、人に当たりそうなのを防いでいるくらいで、建物は順調に損傷を増やしていた。

地下にいたほうが安全なのではないだろうか。博士はどういうつもりで僕を送り出したんだ。そして僕はなぜ急いでこんなところに来たんだ。

たぶん、僕の行動にいちいち理由なんてなくて、博士もテキトーなのに違いない。なにせどいつもこいつも、気がついたら生まれてしまっているものしかないんだ。理由はあとでついてくる。

「思ったより数が多い。難しいが、我々が抑えている間に素早く抜け出せ」

いつの間にか背後に来ていた黒服が、耳元で言った。騒音とかぶさつて聞こえづらかった。静かにしてくれたら、棒つきのキャンディをおこるよ。

と、いきなり銃声が止んだ。パントマイムが始まるような寂しさ。やっぱキャンディなし。そういえば、お金がなかった。

「洗脳子に告げる。ぼくらは戦闘を求めている。停戦交渉をしにきた」

さんざん弾丸と爆発物をばらまいておいて、いけしゃあしゃあと発言した根性の持ち主は誰かと探す。すぐにノッポの男が目に入った。ちくわみたいないな体型で、雑草魂溢れる頭髪をしている。目鼻は糸で描いた落書きで、口はふつうなのがもったいなかった。服装は赤いジャケットと黒いズボン。履いている靴が金色のスニーカーだった。趣味が合うな、と思った。

「ふざけるな。これほどの攻撃を加えておいて、今さらなにを言うか！」

至極真つ当で拍手を送る相手は、洗脳子の赤い長髪だ。彼がリーダーなのだろう。赤い長髪と赤いジャケットを見比べる。どう考えたって、ジャケットの勝利だった。赤い長髪は冗談だろう。

「これは異方者の意向だ。ぼくら革命者の行動ではない。異方者は

これからも攻撃を続ける。ただ革命者は、きみたちが戦争に加担しない限り攻撃しない」

どうも面倒な関係だった。父親の甥っ子の親友が叔母さんの娘の彼氏と気の置けない仲になっていいるらしい。そんな感じの説明を受けたときの面倒さだ。

「私たちは革命者を滅ぼすために生まれた、洗脳子だ！ その使命により、おまえらをすべて殺す！」

洗脳子の宣言。黒服の脇をするりと通り、彼らは駆けた。殺すとか、そんなに簡単に言っちゃいけないんだよ。僕は自分を、年末しか掃除しない棚に上げた。

銃器が火を噴く。お手軽殺人道具は、洗脳子たちを狙い撃ちにした。いじめっこ集中砲火。ところが、当たるはずの弾をティッシュペーパーのようにひらりとかわし、絶対当たる弾はやっぱり当たるものの、仰け反る程度で済んでいた。僕は騙されているような気分になる。防弾チョッキを着ているにしては身軽でスリムで全速力が半端じゃなかった。

洗脳子と馬鹿でかい銃を手に持った筋肉質のおばさんが接触した。拳がおばさんの腹にめり込む。目玉を落っこしそうな表情。一撃でダウン。

黒服が僕の手を引っ張った。デートに連れて行かれるにしては強引だ。もちろん、僕は大人しくついて行った。ここは危険だ。危険は恐れなくちゃ。逃げなくちゃ。

ちくわが目の前に立っているのに気づいたとき、思わず首を傾げてしまった。さっきまで彼とは、猫との心の距離くらい離れていたし、握手やサインをせがまれるようなおぼえもなかったからだ。「きみは誰かな。この場において、きみだけがイレギュラーだ」

ちくわがしゃべる。あ、ちくわがしゃべっている。

僕がイレギュラー？

他の人はどうしたのだろうか。僕が地上にきたときには、けっこうシンプルな構図になっていた。洗脳子、黒服、たぶん革命者、た

ぶん異方者。何十人何百人という人がいたはずだった空間にそれだけ。あの受付のデブはどうしたのか。

「ぼくは革命者ガラハロンドル・ナックトイテ。もしやきみはみゃぎらっ！」

吹っ飛んだガラハロンドル・ナックトイテは無様に、どべろつと体で壁にスタンプした。吹っ飛ばした黒服の脚はすでに地面を蹴る力を伝えている。僕はぼーっとしていた。長い名前だなあ。

走ると僕はぜーはぜーは息を荒くして、心臓をどくどくさせて、酸素を使つて、なんにも考えなくなった。ずっとこうしていられたら、幸せなのかもしれない。幸せだとか、後悔、真実、未来、運命、常識、もうなんか色々、についてまったく思い浮かべないことができて、なおかつ普通に生きられたら、幸せなのかもしれない。そんな幸せ、くそくらえだ。ありがとう、疲れる僕。くだらなき僕。

砕けた壁から外に出ようとする。しかし黒服が唐突に消失した。ばあんつと床が弾ける。受身を取った黒服。腕を掴んで投げたガラハロンドル・ナックトイテ。

「くっ」

自由なほうの左手で体を跳ねさせ、ぐると逃れようとする黒服に、ガラハロンドル・ナックトイテ、長いからちくわ、長いちくわが、後ろ腰のホルダーに差していた拳銃を抜いて射撃した。情け容赦遊び心のない数撃。ダンダンダン。やめとけて。まずいって。僕は狼狽する。死んだらどうする。吐くぞ。

だらだらと流れた血がちくわに刃を向かわせる。血液悪魔が金属的に固くなり、ちくわの首をかつさばこうとした。革命者は平気な顔。剃り残しがないか片目を閉じて鏡の前で確認する様子だった。

悪魔の対応は、窒息だった。半液体になってちくわの顔面を覆おうとする。さすがに恐れたのか、ちくわはステップで離れた。

「絶対共同体よ。ぼくはきみらを敵に回したいわけではない。革命者と絶対共同体は敵ではない。しかしきみらはどうも、守ることに忠実すぎる。それが戦いの契機になる」

「言葉を返そう、革命者よ。おまえたちは攻めに忠実だ。我々の要請としては、待ってほしいということなのだが」

「水と油ではない。なのに、相容れないのは」

「立場だよ」

僕はこっそりお暇しようとしたのだけど、二人の熱い格闘はそれを許してくれなかった。欲情カップルより圧倒的に激しくお互いをねじ伏せようとしている。時々とばかりをくらいそうになって、僕は身動きがうまく取れなかった。

タイミングを見計らって、えいやと力を入れる。大縄跳びに挑戦する気持ち。無理無理無理。血液悪魔が三リットルほど頬をかすめていったよ。

まいった、まいった。僕はつぶやく。つぶやいただけじゃかき消される。これは誰かに届かせたかった。

まいった！　なんて不自由なんだ！

「不自由って、いやだよ。自由と同じくらいに、きらい」

ひやりと首筋を撫でる指先に、僕は戦慄した。

間違いようのない死のにおい。

僕がクラスメイトに与えた香り。

涙が、つつり、と、あごを経由して星に注がれる。どうしようもなく醜い呪いを口にした。

死にたくない。

勝手だった。正直だった。弱かった。背後にいる知らない人に、どんな見ともない真似をしても命乞いをしたかった。

「どうして殺すって、思うの？」

指先が僕の体を這う。胸に、腹に、徐々に下半身に。

ひい、とひきつれた声が出る。

犯される。

がくがく、骨と筋肉と神経が、もともと主導権の薄い意思に、ほ

とんど従わなくなった。

「震えてる……怖いのか？」

女だ。女が僕に語りかけている。首を絞めるための真綿のような声。優しく、残酷だった。

顔をつかまれる。ゆっくり両手で僕を包み込んで、あたたかさの波と吐息を寄せているうちに、潰すのだろう。

目が合った。青い瞳。透き通って、めまいがしそうだ。

僕は覚悟できない死に対して、懺悔した。

「ねえ、ファーストキスってどんな味が、するの？」

彼女の唇が僕の唇に触れて、人生をやり直したいと思った。

フィカソトリア

母親が淹れたコーヒーに、生クリームもどきを足して飲んだ。父親の釣りに付き合っ、二時間ほど無駄な時間を過ごした。

サラスナが僕を小突く。クラマサってさ、どんなものが好きなのかな？

なにがさ。どんなものって。

たとえば、花の種類とかさ。

アサガオでいいんじゃないか。

なんでおまえが決めるんだよ。

決めてしまっ、気持ちを含めてさ、贈ってしまえばいい。きつとみんな贈りものが好きだから。

ゴミを贈られていい気分の奴はいないだろう。

サラスナは笑った。彼はよく笑った。中性的な容姿に朗らかさを浮かべていた。

きいてみれば早い。僕は立ち上がった。慌ててサラスナが腕を引っ張る。ぐい、ぐい。服が伸びてしまうよ。

本人に言えるくらいなら、おまえに言ったりしない。

ひどいな。僕はクラマサ以下か。

ああ、クラマサ未満だ。当たり前だろ。馬鹿か。

僕を馬鹿にするときだつて笑顔なんだ、こいつは。

フクベが机にドンつと雑誌を広げた。いきなりだったので、眉を苛立ちに曲げてフクベをにらむ。

見るよ。新作だぜ。この女、やべえと思わねえか。

見ると言われて見ていたら、目が腐っちまうよ。

だけど僕は視線をうつすら寄せていた。深い溝が確認できる。すすると触手が天へ昇る魔法の谷間に、理性を殴り散らして吸い込まれたくなる。いや、理性の神官は本能の戦士と結託して、一緒に

鑑賞会をする。眉と鼻までもが噛みついてきそう。肌は枕を擬生化させて、溶かした砂糖を振りまいたよう。金色の蛇が腰まで絡みついて、刺激に捧げたくなつた。なぜだろう、唇と瞳は思い出せない。無の筋に辿り着く旅を終える前に、急所が剣を構えそうになるが、ぼすんと拳をフクベに突き出した。

やべえよ、てめえの無遠慮が。

まあまあ、目くじらを立てることはない。

サラスナは素直に楽しんでるようだった。ぱらぱらページをめくって、口笛を吹く。おれはこの人が好きだなあ。

ホントかよ。僕も見て、納得する。本当だろうなあ。だって、だってさ……。

真夜中、外の空気は僕を迎え入れた。コートの保温性と相殺される気温。流星群の予報は期待をあり、貧乏ゆすりを導いた。

どうして星は流れるんだろう。

質問に答えるのは、影だった。隣の樹と同じ高さで、僕と同じ太さで、父と同じ声で、友と同じ気安さで、魔法と同じ断言をする。

それが死ぬということだから。

あのとときだ。僕が死について意識したのは。呪いを獲得したのは。

ジグソーパズルのピースは半分も揃わず、僕は過去の海から陸に上がった。

茫然自失となって、唇をなぞる。かくん、どしゃ、がくり、と膝を地面についた。土下座の準備をする格好になって、魂の欠片をふらつかせた。

ああ、ああああああ、あ。

心臓が痛い。唐辛子を噛み砕いたあとの舌のようだった。坊主が必死で鐘をついている。馬鹿みたいにうるさい。最も祝福すべき騒

音、赤ん坊の泣き声に起こされた母のあやし。大丈夫、大丈夫。あなたは大丈夫。ダメだ。落ち着けない。崖に右手の五本の指だけできがみついる状態で、カウントダウンをされている。指外し妖怪が近づいてきた。小指が外される。いっぽーん。続いて薬指。にほーん。にたりと嘲笑。中指への気配、しかし人差し指。さんぽーん。耐え切れるわけもなく、闇にさらば。

すうつと肩に触れられる。びくりと臆病な動物が反応した。

「どう、だった？」

哀れな表情を作っている。その自覚のまま顔を向けた。

魅殺される青い瞳。触れ殺される白い肌。撫で殺される金の髪。聴き殺される無色の声。

人間の女。

絶望の僕。

「死にたい」

それが最初の希望だった。

「ダメだよ、死んだら。あなたには責任を取って、もらわないと」
責任？ 僕に責任なんかない。僕は無責任だ。

時間を止めていたのは、僕だけか、僕と女だけだったようだ。

気がつくと戦闘音は激しさを増している。ちくわことガラハロンドル・ナックトイテと黒服が三メートルほど跳躍して、昼食のサンドウィッチ程度の空中戦を行なった。腕と腕との交錯。ガラハロンドルはそのものを警棒のようにして、黒服は血液悪魔を有効にするための布石の鞭として使ったようだった。速度で上回るガラハロンドルと手段で上回る黒服。打ち勝ったのはガラハロンドルだったが、勝者は黒服だった。

頭をひどくぶつ叩かれ、どしゃりと格好悪く地面に落ちた黒服と、鞭を涼やかに受け、着地は見事だが血液をびしゃりと大量に浴びたガラハロンドル。降参のポーズをしたのは後者。

「肺に侵入を許しては、さすがのぼくもお手上げだ」

銃声と悲鳴が聞こえた。洗脳子が追い詰められている。特別な能力がない異方者らしき連中は軒並み昏倒していたが、数で劣るはずの革命者が洗脳子を圧倒していた。

「あと――一時間三〇分経てば貴様らなぞ……！」

負け惜しみを少年が言う。――一時間三〇分経っていない以上どうしようもないじゃないか。彼らはやはり子供に思えた。黒服は彼らのそばにもついていたが、守るというよりは無茶を止める役割を担っているように見えた。少なくとも革命者に対し積極的行動はしていない。

「彼らを殺すつもりはない。もちろん、――一時間三〇分後には定かじゃないが。ぼくらの憶測では、戦争加担人になる確率が極めて高いからな。洗脳子が完成すれば」

ガラハロンドルが肩をすくめる。立ち上がった黒服は、ぱたぱたとごみを払った。

「我々もきみを殺す意図はない。革命者は先見的だが、不撤回決定は慎重だとも理解している」

「そう、それにきみらが味方をしている以上、不利なのはこちらだ。絶対共同体を屈服させる手段は、まだ開発されていない。まあ、それゆえの絶対なのだろうな」

「洗脳子を殺されるわけにはいかない。革命者のカウンターになる。バランスを大事にしなければ、悲劇が訪れる」

もしかして膠着状態になったのか。誰も動こうとしない。いや、女が僕の頭を遠慮の砂粒もなくぽんぽんとしてきた。不可解にもほどがある。

「あたしこの人をどうにかしたいんだけど、いい？」
どうにかってなんだ。

即座に黒服とガラハロンドルが答える。

「ダメだ」

「どうというイレギュラーかの判断が先だな」

僕は意見を出す気力を持っていなかった。ただ理不尽が通り過ぎ

るのをじつと、留守番する家の中で、淋しさを誤魔化すおもちゃを一生懸命に模索する四歳児の心境を再現していた。

女が僕を捉える。しゃがんで視線を合わせ、赤子に諭すように名乗った。

「あたしはフィカソトリア・ジエクピアート。フィカって呼んで、いいよ」

フィカ。

忌まわしき名前をこぼすと、満足げに彼女はうなずいた。

「もっと呼んでよ、もっ」と

油を差し忘れて数年間を経たポンコツになって、僕はぎぎ、ぎつと首を不器用にひねった。拒否がうまくできない。

「戯れている場合じゃないぞ。その男、どうやら重要な客のようだ」ガラハロンドルがじろりと、黒服と僕を見た。今度は黒服が肩をすくめる。すかした態度が得意な連中だ。

「その女は新顔だな」

「つい最近因子に目覚めたばかりだ。ばくもよく知らん」

「人材不足らしいな」

「革命の同志であれば、選ばないさ」

ふと、黒服が動いた。一気に短距離走。右足が小さい一歩、左足が大きく前進、右足がとも大きな三歩目。詰まった間隔に、なぜか僕は息が止まった。フィカソトリアを突き飛ばし、あ、と言う間に僕を抱えて建物を飛び出した。

「待って、待って！」

フィカの声が聞こえる。むしゃくしゃするイノセント。

「会いに行くから。また、会おうね！」

一方的な約束に、黒服の肩に当たった腹が躍動するのを感じた。初めてだったんだぞ……。

遠くなっていく彼女の姿。

悔しくて、痛ましくて、涙が出てくる。僕は泣き虫だった。知らなかった。彼女が知る機会を得る要素だったことに、どうしようも

ないやるせなさがある。快樂と不快のミキサーの中で、徐々に憎悪が満ちた。虚無に地震、全能に雷。価値観や冷静のテーブルをかき乱す。

「あなたの名前を聞き忘れた！ 今度、教えてね！」

初めてだったんだぞ！

僕は絶叫した。

死体、そして眠る

調子にも高級車にも乗っているカップルから、信号待ちの機会に試練を与え略奪をし、法廷速度を守っているつもりで走っていた。気がつけばもう夜だ。それとも、まだ夜なのか。僕の場合は鈍くなっていた。

山を登っているのだろうか。建物を見かけなくなり、道路の脇にはひたすら木々草々が続く。人ごみはうんざりするのに、森に癒しを感じるのはなぜなのか。それを考えて僕は森が少し嫌いになった。こいつらも密集している点では、不快度が変わらない。

暗闇と意識がシンクロし、対向車のヘッドライトが目に入るときにわずかに揺り戻される。うつらうつらと、脳が休もうとしているのがわかった。

疲れているのは確かだ。なにより、フィカとの出会いが僕を衰弱させていた。純潔を汚され、精神を暴かれ、再会の呪いをかけられた。なにもかもが最悪直前だった。

ぐったりしながら、どこに向かっているのか尋ねる。

「魔力患者がいる家だ。我々が接触できている二人がそこにいる」戦争を終わらせるには、僕を含めてもまだ七九九七人足りないってこと？

「博士は八〇〇〇人ほどと言っただけだ。正確な数がわかってるわけではない。魔力の強さによっではもつと少なくて済む。博士の計算によれば、現在確認されている最低能力で八〇〇〇人集まれば戦争加担人をすべて消失させることができる。つまり少なくとも八〇〇〇人を超えはしないはずだ」

確認されていない人たちが最低能力以下でない限りはね。

「そうならないことを祈ろう。ちなみに軍では二七四四人の魔力患者が保護されていると我々は把握している」

協力してもらえばいい。

「世界七不思議の一つは、持つ力と比較してあまりに軍が無能過ぎることだ。説明してわかってもらえるならそうしているが、どうせ利用を画策されるだけだろうな。戦争が終わったその後も考えなくてはならない」

博士もあんたも軍が好きじゃないようだね

「異方者や悪魔がもつと話のできる者たちであれば、軍を倒す手伝いをしたな」

あんだだつて悪魔を使っている。

「悪魔も色々いる。それにこいつは我々の一部、我々自身ですらある。……そろそろつくぞ」

二人が住む家にしては上々で、八〇〇〇人を押し込めるには狭い木造一軒家だった。一言で言うなら悪くない、二言で言うなら、まあ、悪くない。そんな家だ。悪くはないがよくもない。三角の屋根は特徴がなく、山に埋没している。一応周りの植物はある程度刈られていたが、半分一体化しているようなものだった。

「明かりがついていないな」

黒服の言うとおり、家から光は発せられていない。真っ暗だ。これで人がいるとしたら、ぐっすりお休み中か殺人事件が起こっている。もしくは光が苦手な人か。

鍵はかかっていなかった。やはり殺人事件か。

泥棒のように中に入る。ぷうんと蠅が飛んでいる。うつつしくて払う。どこかへ去った。と思つたら、戻ってくる。払う。去る。またぷうん。ええい、ここに死体があるだろうから、そっちへ行けよ。

黒服はあっさり居間まで進み、電灯のスイッチを入れた。若干の震えを挟んで明かりがつく。

するとそこには、真っ赤な液体に染まった二つの人間の体があった。男と女。

あまりに予想通りの事態に、僕はむしろ驚いた。と同時に、吐き気を催さない自分を不思議に思う。

黒服が死体に近づく。脈を調べようと手を伸ばすと、
「わっ！」

死体だと思っていた人間は飛び起きて、黒服に大声を浴びせた。
眉を動かしてもせず受け止められて、静寂に抱擁される。

「あれー、びつくりすると思ったんだけどな」

腹を赤くした男がとぼけて言った。

「もつと溜めるべきだったかしら」

頭を赤くした女がテーブルにあったタオルですでに赤い液体を拭き始めている。

狂言死体は茶番をなかったことにするがごとく、迅速な片づけを遂行した。僕が鬼の軍曹だったら地球を横断してこいと怒鳴りつけていただろう。事件の解決を名探偵なしでしてしまった。しかし死体がすぐにトリックをばらすというのも、なかなか新しいかもしれない。二秒くらい新しい。

「おっと、そちらは三人目のお仲間さんかな。俺はフリーム。よろしく」

雑巾片手に白い歯をししりと見せて、男が挨拶した。その歯に泥を塗りつけてやりたかった。

「私はミミハウ」

ウインクしてきた女には、左ジャブからのハイキックを決められたら、どれだけ爽快だったろう。博士の言葉に従って、この魔力患者どもの中心になるのは、四三度のお湯に体を沈めるのに似ている気がした。早く出たい。第一印象から極悪だった。

次に黒服は信じられないことを口にする。

「アガリ、きみにはこの二人と一緒にここに住んでもらう」
馬鹿か。そしてアガイだよ。

「すばらしい！ 仲良くやっていこうじゃないか。いや、俺よりミミと仲良くしてもらっては困るけどな！」

「あら、フーとの友情に目覚められたら、私のほうが困るわ」

ははは、うふふ、と笑う元死体もどきに対し、僕はすねを蹴った。

「いたっ！ なにをするんだボーイ!?」

「もうドメスティックバイオレンスなの？ そうなの!?」

頼む、喋らないでくれ。大規模な雪崩に巻き込まれてくれ。砂漠でサボテンと同化してくれ。パラシュートなしで飛行機から落ちてくれ。時速二〇〇キロメートル以上出した車に乗って壁に衝突してくれ。

「うーん、遠回しじゃないか。俺と君の仲だろう。もっとはっきり言ってくれ」

まあなんというか、本物の死体になってくれないか。僕は他人に言った。

「やだ、もう殺し文句だなんて、ちょっと性急ね坊や」

ちゃん、と人差し指を額に当てられて、僕は苦笑いした。生まれて初めての苦笑だった。笑っちゃう、苦く、笑っちゃう。フィカよりはるかにマシだが、こんなことで初めてを消費して、横隔膜が痙攣しそうだ。

ああ、いやだ。

そう言い残し、僕は家を出た。

足元に迫る血の使い魔に気づかず、絡まれてこける。衝撃は柔らかい土で吸収されたが、鼻をぶつけてうんざりした。僕は弱っている。

「待て。おまえの気持ちはわからなくてもない」

というか、わかれよ。

相手が黒服なのか悪魔なのかどうでもいいまま舌打ちした。

「我々が用意できる潜伏場所は多くない。ここが一番安全だ」
僕にとって危険なんだ。

「落ち着け。深呼吸だ。とりあえず今日はここで眠れ。さすがに睡眠中は煩わされないはずだ。体力を回復しなければ行動は起こせない」

足と腕を掴まれて、狩られた豚のように連れ戻された。

「おう、おかえりアギイ」

「アギイ、布団ひいておいたからね」

アガイだよ。力なく伝える。本当に疲れているんだ。さっきのはなかったことになっているみたいで、ご機嫌な鼻歌が聞こえた。

黒服はどこかへ行ってしまった。自分だけこの場からいなくなるとは卑怯だ。僕はもう逃げる気力と体力を失ってしまった。がくりと燃え尽きる一ラウンド前だ。

布団を見る。三セットあった。けしてふかふかではない、下等でもない、布団布団した布団がある。問題はつながっている形で並べられていることだ。端と端が合せられ、連結させられている。このキングサイズになった布団にひとり寝ていいということだろうか。「アギイは疲れているみたいだから、俺たちも早めに休むとしようか！」

「そうねフー。これから家族同然の付き合いになるんですもの。親睦を深めるに越したことはないわね」

いそいそと着替えもせず、二人は布団に座った。僕から見て右にフリーム、左にミニハウ。中央の布団を空けて、さあどうぞとばかりに手で示している。

なぜだ。

頭痛がしてくる。眠気以外にも脳みそが闘うものが増え、もうどうでもよくなつてふらふらと布団に倒れこんだ。

「なあなあ、好きな子とかいるのか？」

「そっちは先に自分から言わないといけないわ」

「じゃあ俺が教えたら、アギイも教えるよ。……俺は三組のミニハウちゃんが好きなんだよ」

「えっ。フリームくん……」

「ああっ、き、聞いていたのかいミニハウちゃん？」

蠅より蚊より就寝時にそばにいてほしくないやつらが、ここにいます。寝相の悪いフリをして裏拳をお見舞いし、無理やり静かにさせた。腕力はないほうだったが、こいつらは暴力に弱いようだった。

が、すぐに復活する。

「そっち、行ってもいい？」

「え、でも、みんなに気づかれちゃうよう」

どうして僕を間に挟んで演劇をやるんだ……。

一時間ほどのちに、ぼこぼこの二人と困憊の僕は気絶するように眠った。

起床、そして死体

起床すると吐瀉物が淡白に添い寝しており、ガンガン頭を打ち鳴らす時計よりも鮮やかに今日の自分を憑依させられた。気持ち悪さが決定的に違うが、朝食前にグレープフルーツジュースを飲むかのようにだった。

死体は僕の右と左に一体ずつ、王家の棺桶のごとくそこにあった。僕に備わった死体発見機能、トラウマは正常に作動したらしい。わざわざ律儀に吐かなくてもいいのに、厄介な体になってしまったものだ。

フリームの胸に突き立てられた剣は、銀の装飾が癖毛のように施された、宗教的俗刃だった。おみやげ物として売っていそうな安っぽさを感じる。およそ人を殺せそうな品位はないが、実際に殺傷している以上僕の感性のほうが誤っている。

口をもあんと開けて、出来のいい蠟人形みたいに固まっていた彼は、僕を驚かそうとしているのかもしれないが、止まっている脈を確かめても動き出さなかった。反省して溜めを大きくしているのだろうか。

もう一方のミミハウは、喉をかき切られていた。刃物は見当たらない。先にミミハウを殺し、フリームにごしゅ。犯行の順序は想像できた。残された凶器は、指紋を検出しろとの挑戦状とも考えられる。

彼女は手をフリームのほうへ伸ばそうとしていたなごりがあったが、僕の布団の横幅によって作られた距離には全然届いていなかった。もちろん僕は、その手が僕に向けられたものだとはまったく思わなかった。

さて、残念ながら僕は名探偵ではないし、犯人はこの中にいない。あるいは僕の寝相が破滅的に悪くてこうなった可能性もあるが、監視カメラや剣の心当たりがない以上、事件は迷宮入りの様相を呈し

ている。

立ち上がって背骨を開放するように腕を広げる。余裕があるわけでもなかったが、朝起きたばかりというのはそうするべきものである気がした。

耳元にふつと息を吹きかけられ、ぞぞぞと悪寒が走る。

背後にはトカゲ男がいて、僕は下半身を脱力させた。

犯人はおまえか？ もしくはおまえだ。この中にいなかったはずだが、いるものだね。世界は僕よりも早く進んで、いつだって置いてけぼりにされてしまう。

化け物は僕より二回りは大きい体格を窮屈そうにさせながら、威嚇と意外な愛嬌をたたえた瞳で僕を見ていた。うろうつとした表皮は高価なバッグになりそうだ。爪は一撃で僕の胃腸から微生物を召還できそうな鋭さ。

ファイティングポーズも構えられずに僕はずりずりと尻を擦らせて後退した。トカゲの丸焼きを食べていたら多少は耐性ができていただろうか。

どうしてこう脅威が襲ってくるんだ。

毒づきながら、きしゃあつと鳴いた化け物が近づく前に瞬発力の限り反転、クラウチングくずれっばいスタート、ずるべたんといきそうな不安定ダッシュ。

玄関まで数秒だったが、体感時間もやはり数秒だった。永遠に浸るのは難しい。焦りで汗がぶわりと全身を覆い始める。それがひどく今更に思えた。適応している、とも言える。

どかん。魔力爆弾が落ちる音がする。

玄関のドアノブをひねり体当たり、して外に転げる。ふつつつと荒い息遣い。本気か。爬虫類はもつと仕留めるときにだけ本気出せよ。追ってくるときはなしだろ。

爪がズボンに引っかった。

振り向きざま、僕は偶然に頼る。二〇万五七八分の一の確率。消える！

トカゲの舌がちろちろと見えた。それが化け物の最後だった。空気がとぼっかり僕の願いが成就する。

嘘だろ？

いなくなつたトカゲ男に申し訳ないくらいの奇跡を起こし、一生分の運を使つたか、これまでの運のなさでチャラか、悩みながら冷えた地面に大の字で寝そべつた。太陽の光を浴びて朝を確信する。

「なにをしている」

大変だつたのさ。

黒服を見上げる。ビニール袋を持つて、後光が差していた。仏には程遠いが、ふわふわとろとろのオムレツが食べなくなる光景だった。

ああ、そうだ。あいつら死んだよ。

一応の報告をする。見たほうが早いし、黒服が心構えをする必要があるとは思えなかつたが、義務があるような気がした。義務。なんて親しみの湧かない言葉だろう。これからは無視することにした。トイレに閉じ込めて上からバケツで水をぶっかける。上履きを隠そう。机にはビッチと落書きを。

「死んだ？ ああ、そうか」

あつさり返事をして黒服は家に入っていく。僕は地面のベッドでもう一眠りしてもいい気分だった。

しばらくして、くぐもつた「わっ！」という声が聞こえる。

……まさかな。

信じたものを信じる決意を固めて、恒星の恵みを享受しようと目を閉じたら、家を蜂の巣にする銃声が響いた。

ダダダガガとマシンガンだかなんだか知らないが、火器さんが役割を果たそうと頑張っている。フレフレと応援団長バズーカも放たれた。ちゅぎゃん。一瞬で木造一軒家は壊滅打撃を受ける。

帽子を押さえるみたいに頭を抱え、衝撃をやり過ごした。

止んだら今度はさっきのトカゲによく似たやつ、影がソリッドになつたようなやつ、ムキムキの犬、が跡地に飛び込んでいった。そ

んなに急いでも、待っているのは焼けたにおいだけじゃないかい。そうでもなかったようで、返り討ちにあつた連中、おや、犬だけだ。きゃんきゃんと逃げ帰ってきた。

英雄か殺人マシーンか、焼土から現れたる黒服は、フリームとミミハウを血の使い魔で持ちながら、悪魔どもを串刺しにしていた。やっているほうもやられているほうも悪魔なのでややこしい。

ムキムキの犬は悪魔なのか判断がつかない。ただのやばそうな犬であつても驚きはしない。ところで僕に犬の矛先が向けられたようであらずい。

ポチはよだれを垂らして僕に駆ける。迷惑千万僕も生きれば犬に当たるわけだが、実際に当たる前に軌道が変わつた。空中演舞、一回転半ひねりを加えて大地にバウンドする。

横からワンワンを蹴つたフィカソトリアの登場に僕は斜線じみた表情を浮かべた。

「また、会えたね」

にこつと笑う彼女に僕は射程の足りない唾を投げた。

……どうしてここに。

「うーん鼻を、使つて？」

僕はあらゆる意味で問うたのだが、フィカソトリアは方法だけ答えた。少なからずショックを受ける。僕はそんなにくさいのか。シヤツに顔半分を突っ込む。昨日風呂に入っていないのは確かだし、あれがそれでああなのかもしれないのも事実だ。しかし人間に嗅ぎつけられるなんて、いいのか。大丈夫か。

「あたし革命者、だから」

こちらの動揺を察したのか、フォローされた。だけどそれだけの説明で納得できるのであれば、テストで赤点を取つたりしない。生きていることに疑問を抱かない。奴隷か支配者が議論にならない。真夜中に急に走り出さない。最後のはやってない。

「革命者は同盟を破棄するのか！」

ありつたけの賭け金をつぎ込んだかのようなでかい声が、さきほ

どの銃声の先から聞こえた。

「そういうわけじゃ、ありませーん」

相手に対してまったく配慮しないふつうの調子でフィカソトリアが言った。たぶん、聞こえていない。

「あと三〇秒以内に返答がない場合、敵対したとみなす！」

その制限時間はどこから出てきたのだろう。その因果関係と恣意性を考える。カップラーメンはできるまでに三分だ。三〇秒だと六分の一しかできない。カップラーメン六分の一。昼食のメニューに載せるには貧弱。あまりに胃袋を満たす訴求力が薄い。広告には、あなたはこれで満たせますか、と無垢な目をしたタンクトップボロボロ短パンの子供が手のひらを差し出している。満たせませんとポスターをびりびりにしたところで、フィカソトリアが跳躍した。

「面倒、だなあ」

僕と襲撃者の間に降り立ったフィカソトリアの言葉を拾う。

「えー、これは、あたし独自の行動、であります。革命者全体の意思ではなくて、同盟は関係ない、のです」

「そんないい加減な話があるか！」

まことにそのとおりであると襲撃者に同意。異方者と革命者の同盟の内容など知らないが、フィカソトリアが間違っていることは僕が保証する。僕がどれだけ間違っていたって、彼女より間違っていることはありえない。

「いい加減、いい加減……」

山びこのように徐々に小さく反復するフィカソトリア。ぎりつと歯軋りをしたような気がした。気のせいだろう。病は気から。僕の防御も気から。

「初恋がいい加減であるものか！」

世の中にあるもので恋はそれなりにいい加減な部類だよ、フィカ。僕は力なくつぶやいた。

五人だけしかない

フィカソトリアは異方者と悪魔から敵対することになって、戦闘は再開された。あれーと彼女は首をひねっているが、恋の説得力からすれば当然の結果だ。弱いものが密集するように、恋に説得されるのは、恋しかない。盲目性に定評があるものだから、信頼度の低さは折り紙つきだ。

つらい思い出のように弾の集中豪雨が降ってくる。僕は為す術もなくじっとしていた。なにかできることはあったのかもしれないが、やりたくはなかった。陽射しに引きこもって、針が動くのをひたすらに観察する仕事がしたいと思った。

地下鉄二駅分くらいそうしていると、徐々に銃声が少なくなっていることがわかった。もしや、と覗き込んでみると、フィカソトリアが並んだ連中をばったばったとなぎ倒していた。黒服は離れたところで所在なさに佇んでいる。

紫色をしたゲル状の気持ちの悪い悪魔が、戦車みたいな足を滑らしてスライディングを仕掛けた。フィカソトリアは丁度よくタイミングを合わせてそれをズダンと踏み抜き、悲鳴を上げる悪魔のミミズがのったくったような顔を拳でぶち破った。

銃弾は悪魔を巻き込みそうなほど絶え間なく彼女を狙い続ける。感謝に変換すればどんな親子関係も修復できそうだ。しかし風を起こすようにぶんつと腕を振るうだけで弾かれる。目を凝らすと、力場が形成されていて、触れるものすべてを傷つける仕様になっていた。革命者というのはそんなこともできるのか？

一匹、悪魔らしい悪魔がいた。ボディビルダー的筋肉、大型羊の角、もかもかとした体毛。ゴージャスな金の刺しゅう入りマント。吾輩は貴族であるとしても名乗りそうだ。

爆裂な突進。猪でももう少し曲線を描くぜと説教したい真っ直ぐっぷり。

「お、れい」

歌うようにフィカソトリアはひらりとかわした。華麗でもなかったが、最低限の動作だけなので隙がない。悪魔も負けじと、慣性の法則をはぶる方向転換をする。レーザーだったら素晴らしいかもしれない。だけど相手が悪かった。

手刀ですぱりと首が落ちるのを見て、僕はあらどうしようとお悩み主婦を演じた。

その悪魔の残骸がずっと重力に従うのを待たず、ターゲットは変更される。

やがて沈黙は訪れた。可哀そうな全滅。

焼けた家と死骸。かろうじて生きているタンパク質。僕、黒服、フリーム、ミミハウ、フィカソトリア。なんだろう、すごく当たり前に広げられている風呂敷が、包む物を見つけるのに苦労している。単純に、強い。

まったくもって、認めざるを得ない事実だった。座布団を積み上げて殿堂入りさせるべきだ。

「はあ、終わった」

肩の可動域を確かめるように回しながら、フィカソトリアはこちらに近づいてきた。僕は後ずさりする。一步ごとに一步。途中でそれに気づいた彼女は飛んでやってきた。跳んでない。飛んだ。本当に飛んだと思った。

「名前、教えて」

現実逃避を忙しくしようと、空を仰いだ。空には僕がないのに、僕は楽しい気分になる。それはなぜだろう。どこに感情移入ができるニッチがあるのか。投影しなくても、人は面白がれるならば、要因はなんだろう。あるいはいるのか。もしくはこれっぽっちもないことが快いのか。

「おーい」

宇宙とつながっている。否定はできない。しかしすべてはすべてとつながっているなどと信じると、僕はうすら寒くなってくる。何

万もの人々が柔毛のように表面積を広げる役割を果たして動くと、火刑に処される魔女に憐憫を抱く。群衆の愚かさ、そのうちの一人ではない自分に失望する。

「もし、もし」

ちっ。なんだよ。とうとう弱虫の僕は会話を開始してしまった。

「名前、な、ま、え」

言葉がわからないわけじゃない。共通言語でしゃべってる。僕は、アガイだ。ぶるぶる震えそうになる太ももに、我慢辛抱ど根性と言いつけた。

「あがい？ 足掻い、亜害、アガイ。意味のわからない名前、だね」
意味の分かる名前なんて、どうするんだ？ 思わず本気で質問してしまった。

「フィカソトリアは、祝福の名前。フィカは愛、ソトリアは恵み。ジエクピアートは道から現れし女。新言語ではそう言われている」
きちんとした説明をされて、僕は困ってしまった。迷子の子猫ちゃんを案内するより困った。だって、だからどうしたとしか言えない。

「きみの目的を尋ねてもいいかな」

黒服がようやくと助けにきてくれた。彼にその意図はないだろうが、フィカソトリアと交流するのが苦痛なため、僕にとってはお助け戦艦ブラックスーツだった。

「アガイに会う。名前を聞く。もうやったから、じゃあ、アガイと一緒にいること」

なんでだよ！

ややキレ気味に僕は嘆いた。放っておいてくれよ。真夜中にコーヒーを飲みながら恐怖映画を見てトイレまでの明かりを使用不能にけして家から出ないように命じられてお留守番ピンポンを連打の音聞こえどちらさまですかと尋ねたらおっさんの声でお母さんはいますかとひたすらに言われる、グラタニウス巨山の山頂で一人ぼっち遭難山小屋で暖炉の火がなくなるのを見つめる、無人の旅する列車

に無賃乗車車掌から切符を拝見しますとの宣告、どんな罰でもいいから放っておいてくれよ！

ぶつけてやったのだが、風鈴がちりんと鳴るより涼やかにハテナ顔をされた。

「彼にこだわる理由はなんだ？」

「好き、だから」

「……まあいい。我々としては彼の安全さえ確保し、将来における魔力の行使に支障がなければ、かまいはしない」

おい！

「別にあたしは、魔力とか、どうでもいい」

「とにかく移動しよう。ここが嗅ぎつけられるとしたら相手は軍だと思っていたが、異方者と悪魔とはな。やつらの情報網を甘く見積もっていたか」

黒服は落ちていたフリームとミミハウを足先で突いた。

「おい、出かけるぞ」

すわつと目を開ける二人。僕はあちゃあと額に手を添えた。死んでなかったのか。

「驚いてくれると思ったんだけどな」

「ちよつと溜め過ぎたかしら」

けろりと胸に刺さった剣を抜くフリームと、ハンカチで喉を拭くミミハウ。せつかく黙ったと安心したのに、これだ。

盗んだ車は穴だらけぐしゃぐしゃレモンになっていたので、移動手段がなかった。家の裏手にはもう一台あったらしいが、そちらもかち割られスイカになっていた。

ぶつぷーとクラクションが鳴らされる。一斉にそちらを向くと、やや離れた位置、大型バンの運転席側窓から博士が顔を出している。「こつちだ、こつち」

近づくともバンの席半分ほどは黒服が詰めていた。お互いを温め合うペンギンを連想する。ただ暑苦しかった。

「こりゃ派手にやられたものだ。うむ？ そちらの御嬢さんは誰か

な」

「アガイの、これ」

フィカソトリアが立てそうになった小指を全力でへし折ろうとするが、新手の超素材のように硬くて柔らかくてけして折れなかった。つい触ってしまったことに鳥肌が立つ。

「きみは……革命者か。ほう、革命者を虜にしてみうとは、魔力が復活して神話性を発揮でもしたかね」

ああ、さっき魔力爆弾が落ちて復活したな、魔力。僕は思い出す。すぐに使っちゃったけど。

「なんと運がいい。いや、必然としてなんらかの作用があつたのかもしれない。きみには謎があるからね」

謎？

「謎だ。楽しいなぞなぞだ。解明したいような、そのままにしておきたいような、くすぐったい存在。その名は謎。まあ、人は解いてしまふのだからね。解いたことにしてみうと言つべきか。これはわたしの持論だが、真理はわからない、という一点にある。だから本当に明かされる謎なんてないのだよ」

はあ、どうでもいいけど、僕の謎はなんなんだよ。

「移動しながら話すでしょう。皆、車に乗りたまえ」

フィカソトリアがついてくるので、僕は助手席に乘ろうとした。

しかし黒服に先を越される。ぐぐぐ。仕方なく二列目、隣同士。慣れてきた自分が怖い。なぜか黒服に運転を代わった博士も隣にきた。フリームとミミハウは後ろで黒服になにが嬉しいのかにこにこ血だらけ姿を自慢している。黒服やつぱり多いな。

なめらか発進とともに、博士がしゃべり出す。眠くならないかが心配だった。

「洗脳子が完成した。予見より幾分か早い。タケミチめ、どうやら偽っておったようだ」

僕の話はどうした。

「おお、そうだそうだ。きみが殺したクラスメイトな、教師を含め

てもあの場にいたのは全部で一六人らしいのだが、報告を読むとどうも数が合わないのだ。多くても一五人分の死体しかない。一人生きている可能性があるのだが、心当たりはあるかな」

なんだって？ 僕は虚を突かれた。

「ないかな？ 錯乱していたかもしれないし、聞いても仕方ないことか。しかし殺されたうちの一人は革命者だったことを考えると、重要にも思える」

なんだって……。茫然とした。そんなはずはない。なぜなら僕の記憶にある僕が殺した人は、あの場にいたのは、サラスナ、ヒラタ、フクベ、クラマサ、あとは先生……。

五人だけしかない。

うはんおいしい

あのカエルの医者が学校に革命者がいたと言ったとき、僕は気づくべきだった。

……いや、違う。僕は気づいていた。気づかないふりをしていただけだ。忘れたつもりでふたをした。コップについて手の甲を当ててしまい、テーブルから落としそうになる。反射的に掴むが、水がわずかにこぼれた。水は記憶だった。びくりと身がすくむ。おぼえていない、おぼえていない。僕はなにもおぼえていない。

「わたしが追いつめているような気分になるね。ようするに連鎖性を察するのだな。直接精神に攻撃として言葉をぶつけたわけではないが、自らが対象に対して与えた影響のドミノ的広がりを表情や仕草から判断する。この場合、つまり今のきみだが、影響は固有性に左右されているので責任はきみにあるはずだ。しかしわたしは己に責任があるように感じる」

僕の様子を見た博士が言った。冷静な分析なのか謝る前段階なのか。

僕の中の複数の僕が、あーだこーだと喚きたてている。思い出せ、思い出せと机をばんばん叩く立派な僕。なにを言っているのか。忘却にもそれなりに理由がある。わざわざ忘れたものを取り戻してどうする、と煙草をふかしながら気取る僕。それよりごはんが食べたいよ。いつ食事をしたのか、そっちを思い出したほうがいい。お腹が減った僕。ここは牢屋だ。息苦しくて、自由がない。いつそ死刑を望むよ。囚人の僕。翼はなくても、精神は飛べるのさ。少しおかしくなった僕。

一番強いのは、空腹だった。なにか食えるものはないか？

「コンビニで買ったおにぎりがある」

黒服にビニール袋を差し出された僕は喝采を上げた。ペットボトルのお茶まである。昨日はなにも食べていなかったんじゃないか？

朝は摂取したような気もする。どうだったかな。

具材は鮭と梅干。ツナマヨがあればストライクだったが、最高の調味料がたっぷり準備されている現状なら十分だ。若干変形しているおにぎりに付属の海苔を巻き付け、ぱりぱりとした触感からのもちつとをいただく。うまい。今なら大嫌いなピーマンでもおいしいかもしれないのに、米を食せる喜び。

こほん、と博士が咳をした。風邪かな。移さないでほしいものだ。「わたしの話を聞いていたかね？」

聞いてた聞いてた。僕はすらりとおにぎりを平らげ、お茶をぐきぐきゆ飲んだ。ぷはっと口を離すと、フィカソトリアが凝視していたのでびっくりする。ペットボトルがぶんどられ、飲まれた。一口で返され、唇の端がにゅいっと曲がる。

「間接、キス」

喜びが虚偽のようにしほみ、ぐったりする。礫にされた善人を救えない傍観者の気持ちだ。

「詳細なレスポンスがほしい……」

博士がエアルービックキューブをしていじけていたので、本題に戻ってあげることにした。

僕がおぼえているのは、五人だけだ。一六人だか一五人だか、そんなにたくさんはいなかったはずだよ。

「だが、クラスメイトはあそこに全員いたのだろう？ なにせ授業中だ。休んだ人間はいなかったと報告書には書いていたが」

クラスメイト。クラスメイト……。

ぴり。電流が通ったような軽いショック。僕はクラスメイトが四人しか思い浮かばなかった。ようやく自分が変なことに気がつく。だまし絵でずっと坂を登る輪に組まれたシルクハットの人物になったかのようにだった。

妙だ。

「妙だね」

「博士、妙です」

黒服が言った瞬間、衝撃が車を襲った。

横転しなかったのは、幸運か不運か。天使の采配か悪魔の悪戯か。とにかく自動車は走るのをやめなかった。暴虐な王に負けず、親友の信頼に報いようとしているのかもしれない。

「誰だ、移動中に仕掛けてくるとは。親の顔が見てみたいな」

親より先に本人の面を拝もうよ。

「違う。しかし困ったな。遠距離から狙われていたら対抗手段がないぞ」

博士は全然困っていないさそうだったが、とりあえず考え中とばかりに腕を組んだ。

「というか、ヘリコプターですね」

黒服が窓から手を出し、人差し指を上へ向けた。天国への階段を示すジェスチャー。上空には音もなくヘリコプターが飛んでいた。人が乗り出して、おそらく銃器を構えているであろう姿がかるうじて見える。

「無音ということは軍の新型か。厄介な発明ばかりしおってからに交通事故を起こしたらどうするんだ」

「どうします。やれないこともないですが」

黒服が幾人か臨戦態勢に入る。といっても、窓から身乗り出す程度だが。ところでんみたい。

「いくらおまえたちでも、あれほど離れていては難しいだろう」

車とヘリコプターの間は、りんご五〇〇〇個分はありそうだった。血も涙も届きそうにはない。

「革命者よ、おまえさんはどうだ？」

「無理」

塩ひとつまみを鍋いっぱい溶かしたスーパの返事。役立たずが！「アゲイクン、魔力が回復したと言っていたな」

でも、使ってしまったよ。アガイだしな。

「ものは試しだ。呪的発声を試みてくれたまえ」

窓から顔をのぞかせ、消えろ、と言ってみる。しーん。風にまみれてドップラー。なにも現実化しない。夏休みの宿題、一行日記を最後の日に蝉の歌を聞きながらカリカリ鉛筆を躍らせる。あの寂しさよ。

「まあ、魔力が残っていてもここからではな」

じゃあ、やらすなよ。

「ものは試しだと言ったろう。さて、どうするか」

と、第二撃。今度はクリティカルヒットした。ぼうんと嫌な音。

「回避！」

フィカソトリア以外のメンバーを抱えて、黒服が時速八〇キロメートルくらいからの急減速より、道路に着地しようとした。咄嗟には血液悪魔も間に合わず、黒服の肉体がクッションになる。がつ、どつ、ごろごろごろごろ。黒服のカバーは広がったが、痛みが臀部にくる。コントロールを失った車が脇へ突っ込んだ。

よろよろ起きると、複数のアナクロ軍用ジープがやかましく僕らを取り囲んだ。ヘリのハイテクさに比べて、なんと無骨なのだろう。同じくらい無骨な装備をした兵士たちがぞろぞろ現れる。量産型の印象を受けた。

「ここは俺にまかせろ！」

威勢よくフリームが拳を握った。ああ、いたんだ。

「いたたた……。おお、いたのかねフリーム。きみも魔力患者だったな」

黒服を下敷きに寝転がったまま、博士。

「私も私も」

ミニハウが跳ねる。うさぎ、いやバネだ。階段から落としてみた。

「いくぞ、ミニ」

「オーケー、フリー」

なにも期待できないが、とりあえず眺める。無為に時間を過ごすことを認めるわけだが、今までずっとそんなようなものだったから、

これくらいで後悔もないだろう。諦めですらない。はつと顔を上げると時計の針が思っていたより三〇倍のスピードで進んでいる。その連続なのだから。

「俺たちは概的感情、心の動きが現実化する！ さあ喰らえ、俺たちの楽しい気持ちっ」

「あんまりひどいめには合わないから大丈夫よ！」

相手が大丈夫だったらこっちが大丈夫じゃないんだが。

僕の霧雨は彼らの肌を濡らさない。きらりと兵士と僕らの間が光った。

ことり。鉢植えの花が置かれる。

「あれ、派手さに欠けるなあ」

「死体のフリをするのに魔力を使っただけからかしらねえ」

軍の代表が近づいてきた。なぜわかったか。偉そうな雰囲気をしてたからさ。周りが道を空けて、大腿で、肩幅がでかい。装備は軽めだが装甲は分厚い。

「投降しろ。軍はおまえたちを殲滅、拘束する権利がある」

そんな権利は誰にもないよ。それらしい権威を振りかざしているだけだ。と言ったら撃たれるだろうか。

僕はいち早く降参の合図を出した。お手上げだ。黒服は応戦体制。フィカソトリアの姿がない。この際いなくなってくれたほうが……と思っっているうちに爆発音がした。見ると、ヘリコプターが墜落している。さすがにそうした音は消せないのか。

炎を背景にしたフィカソトリアは、指でバイサインを作りながら戻ってきた。

「勝利」

ほっぺにぎゅうぎゅうブイの字を押しつけられ、僕はデブのモノマネのようにやめるよう、ともごもご言った。

「と……」

代表が口を開いて止まる。ヘリの残骸を、かっぱじらないまでもまぶたばつんぱつんで確かめる。

と？　フィカソトリアにも投降しろと宣言するつもりだったのだ
ろつか。できるなら僕がしたいよ。

虫使いのカエル

「革命者だと？ デリロ博士、貴様、軍に反旗を翻すのか！」

「がしがし襲つといて今更なに言っているのかねきみは。そのつもりでやっていたのだろう」

「革命者と手を組むのは話が別だ」

「ようするに思い通りにいかないのが気に食わないだけだろうに」
呆れた博士はため息をつく。赤子のダダに付き合っている暇はないとも言つように。赤子ならまだいいが、大人のダダは最低だ。可愛げがないうえに乱暴すぎる。ほっぺもぶにぶにしていない。

結局やれたじゃないか。

フィカソトリアに不平を漏らす。出し惜しみか。わさびチューブを最後までぐりぐりせずにゴミ箱へお嬢にやってしまうようなものか。

「近くなって、だから」

簡潔な釈明。それで済むなら警察はいらない。結果、警察はいらない。済んだから。

まだ事態は決着したわけではないが、どう考えても革命者以上の戦力が軍にあるとは思えなかった。彼女の存在は想定外、軍だけじゃなくて僕も。

「革命者よ、その魔力患者はおまえの仲間も殺しているのだぞ！」

代表の訴えに、フィカソトリアは首を傾げるだけだ。

「どうやらやつらの狙いはアオイくんのようなだ」

間違えるのも面倒でしょうから、もう呼ばなくてもけっこうですよ。僕は感情が斜め四五度になるのを自覚した。

「鈍重な軍がきみの特別性に気づくとは、少々意外だが」

特別性？ 謎がうんぬんの？

「いや、それとはまた別だ。わたしが言っている特別性は、あの事件の外観だけで判断した。しかしその外観は、軍にとっては一魔力

患者のちよつとした出来事に過ぎないはずだ。連中が保護という名目で集めている魔力患者にしても、理由は曖昧。なんとなく気にしている奴がいるようだから俺たちも手を出しておくか、くらいのものだろうか。とにかく軍はアドバンテージの確保をしたいだけだ。理由はどうでもいいのだ。いずれきみのもとへもきたかもしれないが、後手に回ることにはなかっただろう。一応早めに絶対共同体を送らせてはもらったがね」

眠くはなかったが、博士の話が妨げられないことを不思議に思った。軍を見やると、全滅させられている。フィカソトリアは代表を転がし欠伸をしていた。一応黒服も手伝ったのか血液悪魔がいる。

「注目すべき外観は、きみが革命者を殺したこと、その一点に尽きる。わたしは革命者が学校に潜んでいることを知っていた。偶然にもね。因子の活性化がなかなかに素晴らしい若者だった。彼を死んだ、と話を聞いただけでも、きみに接触するきっかけになった。報告を読んだとき、生きているのは彼かとも思ったが……やはりどうも違うようだ」

あのさ。

「ふむ？」

一人足りないと言っていたけど、その一人って僕のことだったりはしないよね。

「あ」

おい。

「いやいや冗談だよ。もちろんきみを除外しての一六人だ。計算に間違いはない。うん？ 間違いは……うん、ない」

ボケてるんじゃないか？

「このくらいの不安定さは若い時からあったよ。それにボケてもかまわない。新しい扉を開くことだからね。さて、ようやく本題なのだが、そこに転がっている男は、きみが革命者を殺していることを知っていた。なぜだろう。彼があそこにいることを知っているのはわたし以外にいたということだ。そして遅ればせながらきみを確保

しにきた。重要性を認識してね。このタイムラグとつながり、理解するには材料がないね」

博士以外に知っていた人……材料。

あ、カエルだ。

「カエル？ カエルなんていないが」

違う、カエルによく似た医者だ。僕がみんなを殺してしまったあと連れて行かれた病院で会った。

「その人がなにか言っていたのか？」

忘れてしまったよ。でも、革命者がいたことは知っていたな。

「軍にリークしたということか。いくら魔力患者を扱うといっても、一介の医師が隠れていた革命者の存在を知っていたのは……興味深い」

「拷問、する？」

フィカソトリアが転がすのに飽きたのか行動不能になっている代表に小石をぽつぽつ当てていた。物騒かつナイス提案に、僕は顔をしかめる。

「そいつはおそらく聞かされてないだろう。軍上層部が現場レベルに根本から教えるとも思えない」

じゃあどうする？

「車をいただいて、その医者に会いに行くとしよう」

二台のジープをもらい受ける。まあ、強奪。どうやってもフィカソトリアとは一緒になるようだ。フリームとミミハウが離れたのが不幸中の幸いか。財布を落として小銭だけ戻ってくる程度でしかないが。

代表がうめく声がエンジン音にかき消された。僕たちよく車に乗るね。

昨日の今日で移動しているわけもなく、病院は無事にそこにあつた。そことはどこなのかを考えるとときもあるが、どこでもいいときは素直に思考停止した。

「どうされました？」

受付のブอนด์女性が大所帯に困惑していた。家族でもなんでもないが、テレビのスペシャルで放送したらそれなりの視聴率は記録できるのでないか。聞かれるまでもなくどうかはしている。

珍しく女性のむつちりとした太ももに目を奪われた。スカート丈が短い。だからといって許可されているわけでもないだろうが、この際凝視してやった。すると横から腕が伸びてきて、無理やり首の向きを変えられる。ぐき。いてえ。

フィカソトリアに視線を合わされる。なんとか逃れようとしてきよるきよる動かす眼球に、ことごとく彼女は反応した。視線もぐら叩き。勘弁してください。

「あー、ここにカエルに似た医師がいると思うのだが」

変化球ながら、取りやすい球を投げる博士。僕もあの医者の名前を知らないので仕方ない。

「あ、ムロツキさんのことですね」

わかってしまうのか。そうだろうな。

女性が呼びに行き、カエルを引き連れてすぐに戻ってきた。

「ああ、待っていましたよ。こちらへきてください」

待っていました？

「待っていたとは」

僕の聞きたいことを博士が聞いてくれる。実は博士は僕が腹話術でしゃべらせている人形なのだった。なんてね。こんなに人間人間した人形がいたら、人間は混乱するだろうな。映画で限りなく人間に近づいたロボットを見たことがあるが、あいつらは自主的に動いて反乱を起こしたりするからまだいい。真の混乱は人形だ。身動きをせず呼吸の起伏もなく傍から見ても死体。突然カタカタと糸で吊り操られ、生の感情を裏方が表現する。人間が操る人間もどき。人力の道化。問われるのはこれからも自分はロボットなのではないか、ではなく、自分は人形なのではないか、だ。

ろくでもないことを考えているうちに、外に出ていた。カエルは

博士の質問に答えたのだろうか。

病院の裏手、駐車場スペースの端に案内された。くるときに自動車を置いて、帰るときに自動車を発進させる、そういう空間の端っこだ。端っこの中の端っこだある気もするし、端っこの中では比較的恵まれた端っこだある気もする。端っこに対しての考察に僕は満足した。

「さて、あなたがたがなにを求めているのかは知っています」

「ほう、どうということだね」

医者と博士の会話が始まった。観客は主に僕と黒服で、フリームとミミハウはそのへんの車のサイドミラーに細工をしているし、フィカソトリアは僕のそばにいるものの、上の空でぼんやりしている。僕のぼんやりを奪われたようで憎らしかった。おい、それは僕のぼんやりだぞ。

「軍に情報を教えたのは私です」

「ずばり核心を言われる。もう少しもったいぶっても恨みはしなかったのだが、もしかして悪役ではないのかもしれない。」

「そもそもきみがなぜあの場に革命者がいたことを知っていたのかね」

「こいつらを使うんですよ」

耳障りな羽音が通り過ぎる。蠅だ。僕の嫌いな虫。カエルの足元には蟻が集まっていた。まあ嫌いなほうではない虫。うじゃうじゃというほどでもないが、下唇を突き出してしまいくらいに数がいた。「虫使い？　なるほど、話には聞いていたが、きみがそうなのか」「そうなんです。私が虫使いです」

「さも了承済みのようなやりとりに苛立ちがある。ほら、私って、辛い苦手じゃないですかあ。しらねーよそんなの。」

「目的はなにかな」

「あまり明確な目的はありません。しいて言うなら、あなたがたと同じように戦争の終結を望んでいます」

「ならば邪魔はしないでもらいたいものだが」

「現状、最も強力な立場にいるのは軍だと思います。ならば彼を軍に預け、しかるべき方法を取ったほうがいいのではないかと考えました」

「軍にまかせれば、確かに戦争自体は早く終わるかもしれん。だがそのあとが大変だ。私が考えているのは、パワーバランスの整った形での終結なのでな」

「個人的に、革命者が嫌いなんですよ」

最初からそう言ってくれば、理解が簡単なのに。やはり悪役か。腹が立つんですね。ああいう存在は。でたらめで、唐突で。タケミチさんが対革命者用の研究するのもわかります」

そうだな。同意だよ。肯定する。フィカソトリアはふーんとなぜか感心している様子だった。おまえ、含まれてるよ。

どばし、っとフリームとミミハウが吹っ飛んできた。きゅうとばかりに気絶している。よくしゃべるやつらがしゃべれない状態になっていると、心がほんわかした。

飛んできた方向には、どこかで見た子供たちがいた。

「洗脳子……」

博士が借金を踏み倒すような表情を浮かべた。自転車操業に限界がきて、取り立てがドアを蹴破ろうとしている。十日で十割はきつい。

洗脳子再び

「タケミチさんが遺してくれた彼らは、とても優秀です。きみらを倒せてしまいかもしれません」

カエルは淡々と言った。ゲコゲコというよりはケロケロか。僕はカエルが周りの蠅に舌をしゅばりと伸ばして食事をするのではないかとひそかに期待していたが、そぶりも見せない。

「ムロツキさん、かもしれないじゃなくて、完成した私たちに倒せないものはありませんよ」

自信をみなぎらせた赤い長髪。すでに少し懐かしさを感じる少年だった。似合っていないよ、長い髪。切ったほうがいいんじゃないかな。

「博士、アガキ、下がって」

黒服が壁になるかのように僕らの前に出た。人数は五人いるのかいないのかわからないが、ちよつと戦隊もののつぽい。全員ブラックだけど。

「フィカソトリアだったか。今回は意識的に、おまえにも連携してもらおうぞ」

「あたし、あなたに、名乗ったっけ」

「耳は悪くない。彼に名乗ったのを聞いていた」

僕を親指で差す黒服。人を指差すなよ、と言つてやってもよかつたが、まあ親指だから許そうか。一番許せるのは薬指だと思う。

「完成した洗脳子は革命者に匹敵、いや凌駕する。おまえは並みの革命者でないようだが、油断するな」

戦闘態勢に入る二人。

赤長髪が、余裕のある様子で口を開く。口の減らないガキ、という言葉が頭に浮かんた。

「博士、あなたには恩がある。その革命者と魔力患者だけ置いてい

つてくれれば見逃しまぶろう！」

話している最中に黒服は彼の顔に蹴りを放っていた。左頬から右頬にかけて衝撃が伝わっているさまが見て取れる。回転が加えられつつ地面に叩きつけられる姿はなにかの生地のようにだった。

「卑怯な！」

他の洗脳子たちが色めき立ち、遅れた対応に移る。卑怯かなあ。赤長髪のカバーと黒服への積極的打撃。速い。音速の何十分の何か何百分の何か。黒服が黒服の後ろから血液悪魔でガード、足払いを仕掛けられすつ転ぶが馬跳びで乗り越えるように黒服、手首から剣のごとく悪魔を尖らせ、洗脳子に切りつける。もうなんか黒服ばかりで疲れた。

不意に洗脳子がこちらに向かっていることに気づく。え、まじかよ。なんとなく危害は加えられないだろうと高をくくっていたのだが、まさかの標的にされ、ああそうか人質とかあるもんなと、苦々しく唇を曲げる。口笛を吹いて無関係を装うも間に合わず無意味で子供の表情に宿る幼さに舌打ちした。

メキ、ときしむ音がする。フィカソトリアが右手で洗脳子の頭を掴み、握力を発揮していた。とても大きさが釣り合っているとは見えないのだが、吸盤でもついているのか洗脳子の体が浮き上がる。そのときの僕の顔は相当うわあという感じだった。うわあ。

浮かんでいた洗脳子が、フィカソトリアの腕にしがみつき、体を持ち上げてきゅつと縮め、解き放つように両足をフィカソトリアへ喰らわせた。

吹き飛、ばない。

直撃を受けた腹を中心にのけぞったが、大樹のようにフィカソトリアはそこに居続けた。なんだこれは、と思った。新しいダンスを見ている心地。

ぱつと手のひらを広げ、なおもしがみついている洗脳子の首を自由な左手で締める。派手さは欠片もない。ただ不能にするためだけの行動。静かに、たおやかに、若い花をへし折ろうとしている。

まっ。

待て、と言いかける。なぜだ？ 僕は己の声帯に疑問を抱く。あるいは脳か。いや、すべて？ 細胞細胞の一片一片、ミトコンドリアにいたるまで疑問を浸透させれば、答えは見つかるのか。どこかの哲学者ならそうだと言いそうだ。それは否定だが、肯定に至るまでの過程でしかない。ていていうるさい。

フィカソトリアは動きを止めていた。握力の判定ができるはずもないが、殺さず生かさずで寸止めしているようだった。洗脳子は気絶しそうなのかした後なのか、うめいてびくりびくりと軽い痙攣を起こしていた。

目が合う。彼女と。祝福の名前と。

どうするの、と問いかけている。僕に決定権があるというのか。違うな。どうでもいいから、余裕があるから、委ねてもいいよ、なのか。どうして伝えてこない。言葉で。

殺すな。

絞り出してみると、意外に薄いジュースだった。果汁三〇パーセント。

フィカソトリアは洗脳子を開放する。しおれるように横たわる子供。

「殺さないほうが、いいの？」

…… ああ。

説得力があるのかないのか、人殺しが人殺しをやめると言う。いい加減にしてくれよな、まったく、勝手ばかりだ。

僕は僕自身に僕の不在を感じ、僕が嫌いになった。

黒服と洗脳子の戦いは、黒服の劣勢だった。血の使い魔と黒服の肉体のコンビネーションは正常に機能していたが、やはり速さが違う。技術と地力の勝負か。老人と若者の勝負か。黒服はいくつなんだ？

フィカソトリアはそこに参入する。

寡占が独占になるかと思っただが、意外や混戦になった。洗脳子の

力はちくわ、ガラハロンドル・ナックトイテを上回っているように感じた。フィカソトリアといい、あいつら名前長いよね。でも僕は間違えないんだ。

洗脳子は敗れたやつを参考にしたのか、フィカソトリアに対して間合いを保ち、無理をせず牽制を続けた。黒服の負担が減った分優勢にはなったが、決定的ではない。ミスをなくしてやや膠着状態になったようにも見える。

ごしんっ、と洗脳子が車にぶつかる。ここは端っことはいえ駐車場だから、当然自動車が近くに並んでいる。そのことを初めて意識した。けっこう狭く戦っていたのかと、なんだか不思議だった。演劇で観客をかばちゃだと思ってしまうものだろうか。パンプキン・バトル。お父さんとお母さん、来るって言ってたのに、いなかったね。カエルと博士はどうしているのか目をやると、どうもしていなかった。博士はもっと逃げたほうがいいし、カエルはその虫でなにかできないのだろうか。

そしてなぜ僕はここに留まって、棒立ちで観戦しているのか。正義の前口上を全部聞いてやる悪の幹部に転職しようかな。チアリーディングもできないしね。

黒服が血の悪魔をびしゃりと大量にぶっかけて肺に入り込ませる例のやつをやった。ガラハロンドルは降参したが、洗脳子はおかまもなく前進してくる。血の悪魔の操作で隙ができた黒服は、挟り込むような拳を受けて崩れ落ちた。本当にえぐられて、拳が貫通しているのを確認し、僕はこみ上げるものを感じる。

「むっ」

博士が反応らしい反応をした。黒服が死ぬなんて想像はできなかったが、明らかに致命的だった。

やばいんじゃないか。

「洗脳子の力を甘く見ていたわけではないが、どうもタケミチの目標は達成したと認めざるを得ないな。革命者の平均は上回っているようだ。あのお嬢さんにかないはしないだろうが、ともに戦って

は絶対共同体に勝ち目はない。そもそも戦闘行為が彼らの得意分野ではないからな」

やられるってことか。

「絶対共同体に敗北はない。ガラハロンドルはわかっていたから退いた。あの子供らはわかっていないから退かない。あの傷はその差に過ぎないよ。ただ、このままだとまずいことは確かだ」

敗北はないのにまずいのか。青汁みたいなの？

「違う。事態を打開する術がない、ということだよ」

冷静にご指摘ありがとう。

戦いは続いている。線路のように。フィカソトリアが相手を圧倒できないのが、短い付き合いながら妙だった。付き合いって、まあ、あれだけ。

僕のせいで手加減しているのか、彼女は一步踏み込みが浅かった。砂浜で波が来る前に引くように。遊んでいるようですらあったが、表情にはわずかに焦りが浮かんでいた。僕がびっくりした。

焦り？ フィカソトリアに一番似合わない感情だ。

「彼女が焦っている？ そうなのか」

博士が僕に聞いてきた。うーん、勘違いかもしれない。

「めん、どう」

つぶやきが風に乗ってきた。剣道？ フィカソトリアの手刀が洗脳子の首を捉える。えー、殺しちゃうのかよ。吐くぞ、僕は。悪魔のときは大丈夫だったから、もう大丈夫になったと考えるのは早い。僕は差別するから。

洗脳子は何んとかそうとしたが、喉をざっくりと切り裂かれた。血がどぼどぼと溢れる、と僕は覚悟し、目を閉じた。視覚情報を隠してしまえば、なんとかなるはずだ。現実逃避の常套手段。ややあつて目を開けると、やっぱり喉から血を流す洗脳子がいたが、わりと平然としていたので拍子抜けする。特殊メイクかな。

「おかしいな」

はい？ そりゃおかしい。うん、おかしい。で、なにが？

「傷がふさがっている」

うなる博士。洗脳子は汗を拭うかのように血を手で除けた。傷は見えない。しかし新しい血液が溢れてくることはなかった。目を閉じていた数秒のうちに治ってしまったというのか。

フィカソトリアが、さきほど焦りだと思っていた表情を進化させ、手についた血を払った。ああ、これは焦りじゃない。これは。昂揚だ。

悪魔、言うこと

ガラハロンドル・ナックトイテを含めた革命者たちが現れたのは、嵐らしい嵐はおさまった後で、僕にとってとてもタイミングがよかった。

なにせ洗脳子を倒してから、フィカソトリアに灯った炎の勢いは衰えることがなく、矛先が僕に向いたからだ。獣にしては理性的で生物にしては秩序的な凌辱の腕が伸びようとしていた。博士は考へごとに夢中になって助けてはくれない。黒服は倒れた洗脳子を拘束するのに、労力と時給の対比を都合よくしようとしているのか、やたらと時間をかけていた。

誰にしたって彼女を止められるわけもないが、今まさに傷つきそうになっているときに他人が無関心を表明していると、螺旋状の無限穴で光を目撃しながらも遠く落ちていきそうな気分になる。

フィカソトリアの唇が首に当てられた。噛むように吸われる。地面に倒され、あちこちをまさぐられる。

真空でもがく労働者がつるはしを片手に虹を見る。このまま一生働いて、年老いていくのかな。汗が頭皮、額、眉間、鼻、頬、顎、と流れる。雲が描く終わりのサイン。意地汚いうさぎの幻影にたられて、薄い月が拡散する。

僕は柱のように動かずにいた。一種の耐震構造として精神はぐらぐら揺れていたが、張り巡らされた糸の一本一本に至るまで硬直し、勤めて死んでいるように生きようとした。死んだフリ。あるいはフリのまま死んでしまうのかもしれないが、諦めてはいなかった。出会いがしらのフィカソトリアに感じたものと今回は違う。今回は、理解できそうなものだった。性的であったり感情的であったりだ。しかしこの延長線上にあればあるとるように思うことはできた。程度の問題か。考えるのをやめた。考えるだけで死にそうだったから。

精一杯人形化はしないで、己の自由を限定的に勝ち取るうとして
いると、ジャケットが脱がされる前に空気の流れがあった。

「因子の活性化を強く感じたが、きみだったか。……なにを興奮し
ているんだ？」

助けてくれ。

ガラハロンドルならばいけるかと懇願する。義理はないが、この
事態のおかしさを解消するのは義務ではないだろうか。

「おふざけよりも説明をしてくれないか。あー、フィカソトリアだ
ったか。洗脳子はきみがやったのか？」

ガラハロンドルはねずみに食い散らかされたちくわのようだった。
ねずみがちくわを食べるかどつかは知らない。衣服ぼろぼろ。もう
僕とは趣味が合わない。そっちのほうがおふざけてないか。

「そうだ、彼女がやった」

答えたのは博士だった。ようやく思考回路を通常運転に戻したら
しい。

ガラハロンドル以外の革命者も、彼と似たようなものだった。怪
我だらけぼろだらけ。

「完成した洗脳子を、一人で？　ぼくたちは逃げ帰るしかなかった
のに。……因子の活性化を皮膚で捉えられたはそのせいか。革命の
因子について、ぼくはまだなにもわかっていなかった、ということ
かな。」

落ち着いて会話をしている場合じゃない。

ズボンをずり下げられそうになって、僕はレスキューを願った。

やれやれとばかりに革命者がフィカソトリアを引きはがす。わりあ
いに簡単に拍子抜けした。

「ムロツキがいないな。さすがにあの光景を見せられては退かざる
をえないか」

気づいた博士が言った。

不死性を発揮した洗脳子に対し、すがすがしいほどの暴力を振る
ったフィカソトリア。洗脳子の全滅に、カエルのなす術はなかった。

「予想通り、イージー・マスカットのタケミチからすれば予見通りに、洗脳子は完成し、戦争加担人になった。僕らには完成してから抑えられる自負があったが、正しくもあり間違ってもいたわけだ」ガラハロンドルが明瞭な顔を渋くした。

「タケミチは戦争加担人を作ろうとしていたのではなく、革命者を超える存在を創ろうとしていた。細かいことだが、訂正しておく。そして彼の見積もりは甘かった。結果が出ると、なんだか寒くて、寂しいものだな」

しわくちやの博士とガラハロンドルが並ぶと、おみやげの置物みたいで面白かった。

「洗脳子をどうする」

「どうしたものかね。このままにしておく、また革命者に明確な敵意を持って行動するだろう。わたし個人としては、できる限ることを荒立てるのは異方者と、それに組みする悪魔に留めておきたいところだ。あと、軍か。扱えない洗脳子を管轄におけないし、きみたちが見逃してくれるとも思えない」

「そうだな。ぼくらがすぐに戦闘を開始しないのは、状態と状況を踏まえているからだ。洗脳子にはやられるし、異方者と悪魔との同盟は破棄されたし、化け物じみた同志、フィカソトリアを発見するしで、革命者は混乱中だ。正確には整理中かな。軍に仕掛ける力を準備しておく必要もある」

「またオフェンスか。少しばかり待ちをおぼえてはどうか」

「因子を持ち、革命を遂行するから革命者なんだよ」

僕は話の半分ほどで、太陽の光に目を細めた。昼と夕方の間だろうか。身に染みる陽光だった。処分、拘束、軟禁、といった物騒な言葉が飛び交っているようだが、眠気に誘われてそれどころではない。フィカソトリアはとりあえず離れた。落ち着きはないが、僕に用事がある人もいない。昼寝を決め込んでもかまわないだろう。そこでここが駐車場であることを思い出し、ベッドを探そうとよろよろ起き上がった。なんでみんな病院の駐車場にいるんだ。おかしい

ぞ。

「……フィカソトリアはいったん預かるが、またそちらに行くだろうから頼む」

ガラハロンドルが言った。どうやら僕に向けられたようだ。

なんで頼むんだよ。

僕は泣きそうになった。いや、泣いた。泣くだけで済んだのだから、褒められても罰は当たらないよ。間違いなく体をぺしゃんこにする重りを投げるぞと言われたんだからな。

「彼女ほど因子を活性化できれば……無理だな。しかし少々試したい」

嘆きに耳を貸さず、自分とのコミュニケーションを始めたちくわに、僕はぐったりした。

拾ってもらった消しゴムを受け取る僕の手のひらはどこか曖昧で、そのままだとまた消しゴムが地面に落ちてしまいそうだった。

クラマサの微笑みも、ゆるやかなイメージの中で崩壊していた。

つなぎとめていたサラスナの一言一言が、ヒラタの情けなさが、フクベの雑さが、こぼれていく。

「……多重に行使される神話性現実化病はどういった形で現れるのか、僕らの能力にかかっている。つまり人間についてどうやって定義できるのか、想像できるのか、線引きを不明瞭にするのも手段ではある」

「前例がないだけだ。現実化は現実化だろう」

「神話性に期待するしかないんじゃない？」

「あるいは考えるべきなのは、生まれてしまった後、ではないでしょうか」

「それ自体が危険である？」

「肉体と魔力の境目がない以上、魔力爆弾の影響を十分考慮しなく

てはなりません」

誰だ。おまえたちは誰だ。僕か。僕だというのか。すべては用意されているはずなのに、パズルのピースは欠けて、海に飲まれた塩が尽きるのを待ち続けた。

起きたのはベッドではなくてソファだった。

壁にかけられた油絵に目がいく。だだっ広い、砂漠のようなにもなさを草に置き換えた原っぱで、鎧を着て剣を振りかざした人々が羊に乗って狼を追いかけていた。羊の顔は怒りに燃えて残虐なほど凄み、毛をまとった肉体は筋肉を皮膚よりも早く外側へ放出させる躍動を持っていた。

追いかけられる狼は、大きな体格に鋭い牙を備えていたが、どうも気迫が負けている。マスメディア的操作が宿っているのを感じて、眺めるのをやめた。

部屋は間接照明のみで薄暗く、夕方を小さくしたようだった。暖炉があつたが火はついていない。そのわりになんとか暖かった。僕のいるソファは部屋の隅のほうにあるようで、真ん中には足の長い丸テーブルがある。囲むように皮張り椅子が並んでいた。壁際にはいくつか本棚がある。書斎と居間を足して二で割ったようなところだった。

「お目覚めですか」

僕が気づくより早く、部屋の主は声をかけてきた。そいつの姿は起きたときから見えていたのだが、なぜか気づけなかった。まるで、そいつが許可したから気づけたような。

どこだここは。

眠っていたようではあつたが、いつ眠ったのか思い出せない。ベッドを探していたはずだ。探したまま眠ったような感覚。

「お呼び立てして申し訳ありません。緊急の用件ができてしまったもので」

誰だ、あんた。

「わたくし、悪魔でございます。我々は自分で悪魔とは名乗りませんので、ま、あなたがたによれば、というわけではありませんが」

悪魔？

そいつは悪魔には見えなかった。どちらかといえばサンタクロースだ。ナイトキャップのような帽子をかぶって、ひげは生えていないが真つ白な髪が胸まである。造形は全体的に希薄で、小麦粉みたいだった。

悪魔っぽくない。ぶーぶー。とヤジを飛ばした。

「悪魔らしさ、などというものはないので、まあそうかもしれませんが。あなたの言っているのは見た目だと思いますが、それはどうしようありません。しかしその他、悪魔の現世界への意思伝達については、最近負け続けで、わたくしも我々らしくないとは思っています」

僕はこうやって急に話を進められることに慣れているのかもしれない。突然知らないところに連れてこられるのも。帰りたいとか、話を聞きたくないとかではなく、終わらねえかな、が僕の最優先になっていた。

「妥協をする必要があります。我々は目標を低く設定しなおすすめにしました」

はあ。鼻でもほじっちゃおうかしら。

「あなたに関係のある部分から説明しますと、まずあの革命者、フィカソトリア・ジエクピアートとあなたがともにいられるよう、我々は便宜を図ることにしました」

僕は鼻の穴に入れかけたひとさし指を向け、死ね、とはつきり言った。

軍の挨拶

悪魔がばったりと倒れて動かなくなったので、僕は驚いた。顔が接触している地面から、血がどくどくと流れてくる。

神話性呪的発声現実化病のことはすっかり忘れていたのだが、思い出してみても魔力が尽きている僕には現実化はできないはずだった。

とつさに相手を否定する言葉として、死ねという選択はいかにも幼稚以前に薄っぺらい。でも僕は使ってしまう。なんだか僕は人に死んでほしいのかもしれない。

みんな死んじまえ。

あの妄想が実際に起こってしまったときから、言葉が現実と並んでしまったときから、狂った。終わった。

最も危惧すべきは、狂い終わることかもしれない。

「ダメですよ。迂闊に呪的発声したら」

声は底から響いてきた。悪魔が腕立て伏せの態勢を起こすようにして立ち上がる。穴という穴から血が若干の怠惰を混ぜていたらだしていたが、悪魔がこほんと咳払いすると消え去った。

僕は呆氣にとられる。ぽかんと開いた口から空気が出入りした。

「この空間は魔力に満ちていますから、あなたのちよつとした現実化の方向性に従ってしまいます。わたくし、一応肉体を持っていますので、いちいち死ななくてはならないのですよ」

今、あなたは死んだのか。

「ええ、あなたの言うとおりだね。不死身じゃないのですから、死にます。そのたびに蘇らなくてはならない。意外と大変な仕事ですこれは。さて、説明に戻りましょう。それとも、なぜ説明するかという説明をすべきなのでしょうか」

別に説明しなくていいけど、理解させてくれ。僕とフィカが一緒にいるように悪魔が仕向けるなんて、どうやっても理解したくなり

そうにはないが。

「仕方ありません。あなたは最も強力な神話性現実化病に感染したのです。あの教室で起きたことのすべては把握していませんが、その結果は変わらない。さらに、フィカソトリアは革命の因子を覚醒させ、あなたとの出会いで絶頂を迎えようとしている。ここまでできてしまうと、もう我々は止められません。ならばせめて我々にとつてできるだけ都合のよい方向へ誘導します。ひたすらに比較的有益帰着を求めるほかには、ないのです。あの洗脳子をかませ犬ぐらいに甘く見ていたのが問題でした。心臓求めて尾を忘れる、ですか。ムロツキの余計さには、少々腹が立ちます」

僕の目は冴えていて、眠るどころではなかった。言っていることの二分の一もわからないが、とにかく耳ぶたがない以上、手でふさいでも完全防音でない以上、僕は音を通す。ザルと水よりはマシのはずだ。

「あなたとフィカソトリアによって、形はどうあれ戦争は終わるでしょう。それ自体は問題がありません。問題は去勢的に終わることなのです。不安定要素が排除されることなのです。もっとこの戦争は長引かせるつもりでしたが、軍も滅ぼされかねなくなった現状では難しい」

飽きてきたので、脱出する方法を考えた。魔力が満ちているのなら、呪的発声で逃げられるのではないだろうか。久々の閃きだ。

ここから出、

「おっと」

言い切る前に口をふさがれた。瞬間移動したとは思えない。悪魔の手は唇よりも速く動いた。

「せっかく説明していたのに、ひどい」
むぐむぐ。

「わかりました。伝えなくてはならないことだけ伝えましょう。この先、あなたは魔力を使わなければならぬときがきます。そのときに魔力を用意するのは我々です。疑いなきようお願いします。」

いいですか、重要なのはフィカソトリアの行動は我々には制御できませんが、あなたにはできるということです。我々が最終的に協力するのはその点についてです。そのためにあなたには彼女とともにいてもらわなければなりません。これが表面的な協力です。この二つについて理解してもらえればよろしい」

うむぐ。なんなんだ。僕になにをさせたいんだ、と言いたかった。すると悪魔が心を読む。

「本音としては、なにもさせたくはないのです。しかし力は動いています。スカラーではなくベクトルとして。しょうがないのです。戦争は終わってもかまわない。世界が終わるならば」

悪魔の瞳が比喻なく光った。闇を奪う光。宙より踊りいでし善を封じ、谷より登る賢きを罰し、夜を白く塗りつぶす。

「さあ、これ以上話すべきことはありません。まだ話題はありますが、望まれていないようですので」

手がどけられる。あつたはずの感触がまったく残らなかった。

……どうしてもフィカと一緒にいなければならぬのか。

「別に危害を加えられるわけでもないでしょう。彼女は自ら望んで生まれた者ですから、あなたが嫌悪するのもわかりますが、諦めてください。人間の得意技でしょう」

諦めがあるのは、諦めたくない、があるからなんだけだな。

僕は捨て台詞を残して、くるときより唐突にいなくなつてやろうと脱出の呪文を口にした。ここがどこだかわからなくても、行くところがあれば現実化できるはずだ。ここから出る。

がくんと、もとの世界に戻った。

病院の駐車場は特段変わった様子を見せていない。しいてあげるなら博士とガラハロンドルの話が終わり、洗脳子が黒服から革命者に受け渡されているくらいだ。フィカソトリアがそばにいない安心感や、消えた眠気も。フリームとミミハウが起きてどんちゃんやっているのも。あれ、けっこう変わっているな。

じんじんと、「わかったようなつもり」のやつが僕に説教をしている。

白昼夢か世界移動か知らないが、僕は飛ばされていた。そんなことはどうでもいい。あの悪魔の話が真実だとして、僕が戦争を終わらせるとか、フィカソトリアと一緒にいなければならぬとか、そういう反逆の動機が与えられる、いい加減で勝手なものに対して、どう考えるのか。

黒服や博士に会ったときから、いや神話性現実化病にかかったときからだろうが、降って湧いたことに追いつめられている。ベルトコンベアーが異常な速さで流れ、周囲の情景は目まぐるしい。行きつく先、一寸先どころかずっと暗闇だ。逆方向に走ってみようものならこけてしまいそうな予測も立つ。

なんなんだろうな。

不理解こそこの世の真理だ。

どこかの有名な人が、一番わからないのは私たちがなぜわかるかということですよ、などと言っていた。有名なのに名前が思い浮かばない。有名だということしか浮かばない。むしろそれこそが有名だということだろうか。

この場からこっそり抜け出して、博士や黒服やフィカソトリアに見つからないよう、隠れてしまうのはどうだろう。ダメか。フィカソトリアはおいで僕を見つけた。真偽はともかく、隠れ切れそうにはない。

事態は動いているのに、僕は手足がくもの糸で固められてしまったような感覚が拭えなかった。助けてくれ！ 僕の叫びはみんなに聞こえるだろう。でも、彼らの助けは僕を縛るばかりだ。善意で自由を殺される。関心がナイフになって、僕を傷つける。

ふと、体が魔力を知覚した。今まではどうか不明瞭だった魔力が、僕に満ちていることがわかる。あの悪魔の部屋にいたせいだろうか。第七感が冷氣に似た波を伝える。

狂気は数瞬間、僕を解放するだろう。祭りは僕を躍らせるだろう。

飲まれて楽になればいいとは思えない。だが、フィカソトリアをも殺せてしまつかもしれない己の病に魅力を感じた。

ピクリと心臓がうずく。ずっとドクドクしているこいつが、そんな急かつ微細な反応をしたらそれも病だ。心臓の近くがうずいたただけだろう。うん、そうだ。心臓はうずかない。

ふっふっ、と短く息を吐いた。吐くという動作ににやける。死体はない。腹は減っている。もう昼食を食べてもいい時間だ。時間が昼食を許可する。朝に食べれば朝食。晩に食べれば晩食。そうか、決めているのは僕じゃなかったんだ。

呪的発声。神話性現実化。食べ物すらも現実化できるのか試した。親子丼が食べたい。

なにも起こらなかった。あまりに間接的すぎるのか空気の振動が霧散するばかりだ。

この病を治そうと現実化させることを考えたが、叶ってしまっても今は困るな、とやめた。病によって病を治すとは、血で血を洗うのにも似て不思議だった。

僕はあまりにこの力について、思考をめぐらせようとしていなかったことに気づく。昨日の今日だから仕方ないか。仕方ありません。悪魔の言葉が蘇る。あいつのほうが諦めていたようだけだな。

「おい、食事を取ろうではないか」

博士が僕を呼んだ。すぐく当たり前のことが、なんだか初めてみたいだった。もちろん博士が僕を食事に呼ぶのは初めてだ。もっと根本的に、経験の最下層あたりから初めてな気がした。

初めてじゃなく感じるものは全部デジャビュなんじゃないだろうか、と引っかかった僕は、思考の全自動洗濯機に巻き込まれた。

回転、回転、大回転。

ぶるつと背筋をなでる、己の中にある未知に恐れを抱いた。

軍用ジープには博士と黒服と僕が乗った。フリームとミミハウはうるさいから置いてきた。くさいものにはふたをする。うるさいものは置いていく。

病院から五分ほど離れた食堂で、チャーハンと中華スープを飲む。チャーハンは米がぱりとして玉子がぐつときて塩コショウが効いていてほふつときた。スープはふつうだった。ふつうでよかったよ。通常の三倍の遅さで食べる博士を待っていたら、軍の兵士が入ってきて、僕らに銃を突きつけた。

「投降しろ」

なるほど、これがこいつらの挨拶なんだな。

魔力患者閉鎖中

黒服の血液悪魔がその兵士を昏倒させ、博士がラーメンを名残惜しそうにしているのを引つ張って店の外に出ると、バームクーヘンの中心にいるように取り囲まれていた。用意がいいなあ。

「軍に対する反抗は鎮圧されねばならない。そうだろう、デリロ博士」

ざっと前に現れそう言ったのは、高級感を若干鼻につかせる白い軍服を着た男だ。軍つてやつは男ばかりだ。たまには妖艶な女性に登場願いたい、と思った。

「きみがきたということとは、わたしたちが相当重要な立ち位置にいると理解されたわけかな？」

博士が口をとがらせる。頬には苦さが走っていた。

「ムロツキからなにか吹き込まれたか。それほどうまい男だとは考えられなかったが……」

「ムロツキ？ ああ、あの力エル男かね。あんな奴一人の言動で軍が、ましてや俺が直々に動くものかね」

わりと気軽に軍が動いているイメージのあった僕は、そうなの？と黒服に尋ねた。あいつらのことをいちいち気にしないほうがいいぞ、と忠告される。なるほど。

「その青年が魔力患者であることはわかっていて。すべての魔力患者は軍の管轄におかれなければならない」

どうして？ 率直な疑問。

「人が人であるように、そう決められたからだよ。一足すーが二であるように、皆がそういう共同幻想を抱いたからだ。軍の権威も幻想だ。しかしどうやっても従わねばならない幻想だ」

彼の答えは意外にも僕の満足に届いた。本当に意外だった。第一印象からして唐突に軽挙妄動を発し、迂闊さの中で死んでいくタイ

プであると錯覚したが、どうやら多少は生き残るのかもしれない。
「さて、その魔力患者を渡すならば、デリ口博士と絶対共同体には手を出さないと保証しよう」

男の誰に語っているのか判然としない口ぶりに、黒服は臨戦態勢で答えた。

「その自信はどこからくるのかな。わたしが作った絶対共同体は、きみらに負けるほどヤワではないよ」

そう言う博士ではあったが、なぜか自信はなさげだった。なにかを疑っているふうでもある。僕は、人はいつでも疑心暗鬼になつてよいと思うが、博士には似合っていないかった。

男が腕をざつと振った。大雑把で軍的なきびきびさはなかったが、周りの洗練された軍人たちは一斉に反応する。梅干によって刺激され、唾液がじゅわつと広がるようだった。

彼は重火器を持っていたが、使われなかった。後方に待機している連中は静かに構えている。実際に仕掛けてきたのは大型のナイフを持ったやつらだった。暗殺者もかくやといった滑り出しで黒服を狙う。

黒服が負ける要素はなかった。僕の思いというより、習慣としての常識がその判断を下す。軍人の働きは悪くなかったが、蜜を集められても巨人は倒せそうにない。

血の使い魔が正確に頭を打つ。ばったばったと昆虫のようにぐつたりする数が増える。

ところが途中で、まだ相手の半分も倒れていないのに、血液悪魔が一時停止ボタンを押された。黒服の動きも鈍くなる。

「なんだと？」

「くっ……」

博士も戸惑っているが、黒服自身も異変に理解が及んでいない。急に衰えた老人となり、蹴りが間抜けなシャドーになる。あつという間に抑えられてしまった。

「おやおや、どうしたかね」

愉快そうに男が言った。誰かが愉快だと、どうして不愉快になるんだろう。

「なにを、した」

びりびりと静電気に支配されたように、黒服の体が細かく震える。「俺はなにもししていない。己の胸に聞いてみたらどうだ」

「まさか、悪魔が？」

博士はぶつぶつと熟考のモードを披露した。こんな状況で大したものだ。皮肉でもあり素直でもあったが、つまりこれは窮地なのではないかと僕は頭をかく。

「軍と手を結ぶなどありえん。軍を利用する算段をつけた？ いやしかし異方者の不利はいかんともしがたい。そもそも時間の問題だったとはいえ、革命者が独立した以上、悪魔も人間に合わせたというのか？ やつらにとつて論理的ではないが……。むしろこれからが悪魔の計画の内側に寄せられる、とでも」

お悩みもいんだけどさ、どうやら連行というやつらしいよ。

僕と博士は身柄を拘束された。手を後ろに回され、錠をかけられる。博士は気づいていないのか、ぶつぶつぶやきながらされるがままになっていた。あれだと知らないうちに溺れたりできそうだ。

黒服は直接拘束具はつけられず、檻に入れられた。動物園にでも連れて行かれるのだろうか。確かにたくさんいる姿は見ものではある。

手を出さないって、言ってなかったっけ？

「ふむ、確かにおまえを渡す結果にはなったな。なるほど、約束は守ろう」

本当に男が部下に指示するのを聞いて、なんなんだこいつ、と僕は困った。

「だが、いったん自由を封じておかないと物事がスムーズに行きかねるのでな。まあ、しばらくは我慢してもらおうとしよう。そのうちに解放する。アマイくんだったかな。俺はゼルバ。軍の現場総指揮官だ。短い道中だがよろしく頼むよ」

僕の呪的発声によって事態を開きできなくなると予想はしたが、黒服が動かなくなったのが気にかかる。僕は僕的能力、病を最終手段にすることに決め、成り行き通りに進むことにした。死にそうになつたら、使うとしよう。魔力は体に満ちているが無限ではないよ。うだし、消費がどういったものになるのかわからない。珍しく僕はそういう計算をしたわけだった。僕がおぼえている範囲では、精々最大で五人ばかり殺したに過ぎないのだから。

乗せられたのは軍用ジープではなく、メーカーのわからないセダントタイプだった。僕は車のメーカーなんてガダビエリしか知らないからどうでもいいけどさ。

わざわざシートベルトを着用され、背中と背もたれで手が圧迫される状況になった。本気で苦痛だったが、どうしてかそのままにされた。ある種の軽い拷問だろうか。

やがてたどり着いた軍の施設は、イージー・マスカットに似ていた。デザインも違ったし柵はなかったが、構造は同じようだった。中に入られると、内装もやはり似ていたが、全体的にグレイがかっていて、くもり空を思い出す。ああ、僕は空が好きなんだ、と気づいた。

受付の女性が美人だったので、ここがイージー・マスカットでないことは確かだった。もしかしてあのパイぶつけ顔の存在こそが、イージー・マスカットを決定するのかもしれない。定義というやつは、簡単に決められるものだ。僕を僕とすれば僕になるように。

軍人以外にも人がいたが、明るい者はいなかった。気分がよくなつて、これから連れて行かれるところはどうだろう、と想像を膨らませる。ベーキングパウダーの分量と焼き加減を間違えて、まったくおいしそうにはならなかったが、硬そうなパンにはなった。クッキーを作ったかっただけなのに、おかしいな。

「ここに入れ」

ゼルバが大きな扉の前で立ち止まる。拘束を解かれた僕は血流をよくしようとマッサージュする。

扉は象向けなのか、横幅も縦幅も人類が使うには不釣り合いだった。ドアノブに手をかけて力を込めて引っ張るが、びくともしない。

「押すんだよ」

…… ああ、知ってたよ。

それでも重かったが、なんとか扉は動いた。ごっこ、という効果音すら聞こえる。隙間から見えた様子に反射的に締めてしまいそうになったが、覚悟して完全に侵入した。

とてつもなく大きな広間だった。コンサートホールとして差し支えない。柱があるほかは空間を占める人間以外の物体はない。人間の量が直視できないほどであるが、とりあえずはそう思った。

ずらりと並んだ人々。それだけで人間性を排除したかのようだった。個を読み取れず、集団にすべてが埋没している。顔、顔、顔。ホラー的な光景に僕は目を閉じてしまった。

「彼らは魔力患者だ。おまえと同じな。ここで一日過ごしてもらおう。一日で済まないかもしれないが、それはおまえ次第だ」

なんだって？　僕は悲鳴じみた声をあげた。ここにいろん言うのか。

「ここには多少の魔力が供給されている。それだけでおまえらは大した不自由はしないはずだ。言っておくが、魔力の安定供給なんぞ、贅沢中の贅沢なんだからな。ここは牢獄ではない。まあ、ここにいないてはならないという制約は、牢獄的だがな」

咄嗟に僕は自由衝動に基づいて、呪的発声を行使しようとした。その前にゼルバの腕が部屋の奈落へと僕を落とす。ちくしょう！　叫んだ。閉じかけた扉でゼルバの無表情が見える。悪魔のささやきのようだった。妙な直感が僕に霊を乗り移らせる。悪魔が僕をここに入れたのだ。魔力を用意すると言ったのはこれなのか。僕には十分な魔力があるぞ。あの食堂に戻る！　現実化しない。なぜだ。疑問を浮かべる。魔力が足りないのか。違う。振り返った。ここにはあらゆる神話性現実化が交差していた。僕はそのノイズに対抗できていないのだ。

ふざけるな！

周りの魔力患者は不思議そうに僕を見ている。その不思議さが僕には不気味だった。

どうもしない

僕は埋没する顔の一人になって、途方に暮れていた。

病人だらけの部屋では、誰もが祈っているような眠っているような、それとただただ生きているだけのような姿で過ごしていた。営みという風は感じず、そこに「ある」置物として存在している。人形と人間の狭間で、ぼんやり糸を眺めている。

胸くそが悪くなって、僕はスペースを探した。魔力患者で占められた部屋にはどこにも居場所なんてなかった。必死でパーソナルを確保しようとする。個人を維持しようとする。息苦しさでまいってしまふ前に。

意識はあるのか、縫って動く僕に視線を当てる者はたくさんいた。だけど誰も話してはこない。席を譲るわけもないだろうが、動きやすいように詰めてくれる気配もない。

広間の限界は近く、扉とは正反対の壁にたどり着く。だからどうしたこともなく、僕はずるずると座り込んだ。

とにかく数が憂鬱なのだ、と考える。人は許容以上に集まったときからごみになる。ごみは捨てられなければならない。

消えろ、きえろ、キエロ。

呪いを吐いてみても、人々の数はいつこうに減らなかった。

こいつらは、常に神話性現実化をしているのか……？

確かに魔力は供給されているようだった。悪魔に招待された部屋ほどではないが、それを感じる。この最近身につけた魔力感知は僕にとって便利だったが、もしかして元々あったもので、魔力爆弾による取り込みが雀の涙だったのではないか、と思った。なぜなら、今の状態のほうが、自然であると確信が持てたからだ。体がおぼえている僕のありのままに従うとするならば。

じつと、眼球に力を入れる。可視化できないだろうか。ようやつ

とこの病に向き合う機会ができた、強引にこの事態に対する僕の心持ちを片付けて、前向きに捉えられよう。そう、ここにはフィカソトリアもないし、命も狙われていない。別の不快さが横たわっているが、それだけだ。問題は小さくなっているじゃないか。いくら目を凝らしても、なにも見えてこない。魔力の欠片すら。ちっ、と舌打ち。

ゼルバは一日ここにいろと言った。あるいは僕次第で伸びる可能性も。なにか解決するべきものがあるということだ。あるいは、自力で抜け出してみるとの挑戦状か。一日で解けるパズルだが、きみはどうか？ とでも投げかけられているのか。

ヒントがあるとすれば、魔力がここに供給されていること。神話性現実化病患者でこの部屋が埋め尽くされていること。僕自身に備わった諸々。

どれだ？ すべてか？

魔力が流れてくる穴がある可能性。神話性現実化の方向性を揃える可能性。僕が八〇〇〇倍強くなる可能性。

ありえそうで、ありえない。ありえなさそうで、ありえる。これは選択なのかもしれない。武器を取れと言われているのかもしれない。なんだか億劫な話だった。

僕になにができるっていうんだ。

今更のつぶやきを漏らし、周囲のやつらを蹴っ飛ばして、僕はごろんと横になった。

眠りは訪れない。魔力がカフェインの代わりでもしているらしい。

「こんばんは」

まさかの声で僕は眉を跳ね上げた。僧侶のような白い衣服をまとった女性が、顔の前にしゃがみ込んでいる。

軍の人が、と勘で尋ねる。すると彼女は素直にうなずいた。

「ええ、そしてわたしも魔力患者です。あなたのお手伝いをするように言われました」

手伝い？ 軍のやつがここに入れたんだぞ。

「必要だからですよ。あなたはここでしなければならぬことがある」

なんとなくはわかる。でも、なんとなくしわからない。

これが悪魔の用意した魔力を得る方法だとしたら、「使わなければならぬとき」が迫っているとしたら、面倒なときが迫っている。しかし、この程度の魔力でいいのか？

わずかずつ満ちてはいるようだが、締りの悪い蛇口でしかなかった。ぼちゃん、ぼちゃん。

「ここで普通の神話性現実化はできません。あなたは、普通でなくてはならぬ」

普通ってなんだよ。もうとても普通とは呼べない。ここにいるやつらも、僕も。

「いいえ、数が生まれ、平均が生まれ、感覚が育ち、差別が育ち、自分が自分であると固執したら、もう普通はそこにあります。牢獄はあつけなく、瞬きする間に作られるのですよ」

魔力患者が動き、彼女の背中を押す形になった。しかし彼女は揺らがない。ここの連中は空間を占めているくせに、まるでいないかのように、ただ占めているだけのよう、気味が悪かった。

それが物質の本質？

僕は首を振った。本質を巡る戦いは、いつだって間違っているんだ。

僕に試せと言うのか。超越的にでもなれと。

「さあ？ わたしは手伝うだけです。神から人になって失われたものを取り戻す病に、祈りを捧げるだけです」

病は病だ。なにも取り返しはしない。

「違いますよ。手に入れたから、失ったのです。病は不健康を手に入れます。我々は健康を手に入っていた。健康を否定して、病にかかれば、不健康を取り戻せる」

神は不健康？ そうかもしれない。

僕には神様の話なんてうんざりするもの以外の何物でもなかった

が、それはちよつと面白かった。

「神話性、つまり超越的想像は、本来現実化してはならない。できないではなく、してはならない。禁止です。大変ですからね。世界より大きい巨人が出現でもしたら、対処は不可能です。ところが、分散によって可能になった。神話性の分散、役割の細分化、分類。矮小にすることで、現実化してもよいと許可が出るほどに、神話性は薄まりました。分子になるほどに。その最小単位が魔力です」

一番理解できたのが、「禁止です。大変ですからね」だ。博士の説明はまだましだった。だけど、わかるような気もした。僕の身体、精神にしっかりと染み入る部分がある。彼女の話術による錯覚だろうか。うまいとも思えないが、催眠術かなにかにかけられているかもしれない。

「……まだ、わたしのことがわかりませんか？」

ふいに女はそう言った。会ったばかりで、わかるわけがない。

「確かに会ったばかりです。でもあなたはわたしのことを知っているはずでしょう」

僕は彼女の顔を見た。初めて、いや、前にどこかで、見たな。見たよ。

ああ、ここまで出ている。鼻の奥あたりで止まっている。上あごがかゆい。もどかしい。

んっ！ ほんと、膝を打つ。

クラマサか。

え、クラマサか？

殺したはずのクラスメイト。記憶を掘り起こして、もはや重機を使わなければ届かない領域まで進み、ようやく掴む。それでもあやふやな思い出ししか浮かばない。消しゴムを拾ってくれたのは、きみだったかい？

「いいえ、わたしではありません。そもそも、あなたは消しゴムを落としていない」

落としたよ。肘がぶつかってさ、机からころころと。

「あなたの記憶じゃない。おそらくサラスナかヒラタかフクベか、他の人の可能性もあるけど、とにかくあなたの記憶ではない。誰かの記憶です」

なにを、言っているのか、わからないな。

「あなたは教室で生まれました。一二人の魔力患者によって生まれた、あそこで。」

待ってくれ。あ、待たなくてもいい。ん、やっぱり待とう。

「革命者だったサラスナがあなたを始末しようとした。いえ、違いますね。サラスナは革命者の因子に過剰に動かされてしまったのでしょう。このあたりはわたしの想像です。サラスナがすべてを予測してあの場にいたとは思えない」

サラスナは僕の友人だった。

「それはヒラタの記憶？ 彼はサラスナの正体に気づかなかったけれど、仲はよかった」

ヒラタはお調子者で……。先が続かない。ヒラタについて、僕はそれ以上知らない。明るいやつだった。だから？

「フクベは気づいていたかもしれない。彼は見て見ぬフリばかりでした。最後まで」

フクベは嫌いで、僕は。すぐ殴るんだ。殴られたおぼえはない。性質だけスクラップして持っている。

「あなたのおぼえていない一人は、サラスナとヒラタとフクベの記憶を材料の一つにした。混線して、わたしを含めた二人自身の記憶も含まれたでしょうね」

きみは、誰だ。

「クラマサです。そこは正しい」

正しいだって？ 意味のない言葉だ。

なによりおかしいのは、彼女の言うことを僕が納得していることだ。ぷつん、ぷつんと古い糸は断たれ、より古い糸がつながれる。そっちのほうが丈夫で、懐かしくて、真実をまもっていた。

僕は、誰だ。

「魔力患者一二人のうちの一人、アマガイと置き換わる形で誕生した、神話性の結晶。意思感染による多重魔力患者。その存在を高めないようへりくんだり、わたしたちはあくまで紛い物であるとして、そしてアマガイを残す者として、マガイと名付けました」

僕は、アガイだよ。

「そうですね」

あっさり答える彼女に、僕は。

どうもしなかった。

やればできる子

やがて、ふう、とため息を一つ吐く。それがようやくの反応だ。

たぶん、きみは僕に語りたいただけなんだ。今の話で決まった僕のすべきことは、あの教室から病院へ担ぎ込まれたときより前の記憶を、役に立たないものとして切り捨てようってことだ。

「真実から目を背けるのですか？ あなたのものではなくても、偽りではありませんよ」

真実を直視すると、今度は現実から目を背けることになる。真実は僕らを構成する一要素に過ぎないんだ。真実は一つしかないかもしれないが、現実はいくさんあるのさ。きみの現実、僕の現実。たくさんあつて、それが困るのだけど、でもきつと向き合つべきなのは現実のほうなんだ。

僕は自分が饒舌になっていると感じた。やはり多少の衝撃は受けているのだろうか。彼女の言っていた大半は耳を通り過ぎて行っただけだし、断片的だったが、僕の根幹たる部分に触れて、理解をもたらししていた。

おそらくだが、僕は複数の神話性現実化病患者によって創られたいわば人造人間なのだろう。ふーん。まあ魔力と人手があればそこまで現実化できるのか、くらいに思う。戦争を終わらせる云々言えるのなら、可能は可能だろう。

「現状で最も現実を左右できるあなたに言わせると、説得力がありますね。あなたなら、真実を捻じ曲げることもできるかもしれませんし」

捻じ曲げられたら真実じゃないだろうに。僕はなんだか疲れた。言葉を自由に使われると、混乱してしまうよ。自分のことは棚に上げてホコリだらけにした。

話に付き合っている間、物事はこれっぽっちも進んでいない。ミ

ジンコー匹も。粒子ほども。こんな閉じられた空間で密集の憂き目に合わせて、恐怖症だったらどうしてくれる。

不自由だなあ。

考えてみれば、僕は一度も自由を感じたことがなかった。相対的に不自由を感じるばかりだ。さっきの不自由よりもさらに不自由に不自由スパイラルだ。螺旋をわずかに戻ったところで、大して変わっていない。

ここから脱出するべきだ、と思った。僕は別にきたくもないところへきては、脱出ばかりしている。

どうしたものか。どうする？　いつだって突きつけられるのは、その問いだ。

周りの魔力患者に動きらしい動きはない。こいつらは本当に生きているのだろうか。協力が取り付けられれば、あるいは。

まったく話しかける気は起きなかったが、なんとか振り絞って一人の肩を叩いた。叩けた。うん、叩けるのが奇妙に思える。

ややあってから、緩慢にそいつは、はいと返事をした。

なにを話せばいいんだ？　ええと、なにをしているのかな。

「なにも」

きみはどういった形で現実化させるの。

「さあ」

……ばーか。

反応は返ってこない。無機物のほうが面白い粘りを見せてくれるというものだ。何人かに試してみたが、まったく同じだった。第一印象通りの没個性集団だ。泥沼に沈んでいくように気持ちが悪かった。

クラマサを見る。彼女は他とは違う。手伝うとも言っていた。なるほど、瞳に宿る光からしても個性はあったし、殴れば響きそうではあった。

手伝う、か。

「どうしました」

僕は彼女の手を取り、そのへんの適当なやつに接触させてみた。
僕に伝わってくる抵抗。ぐいぐいと押しつけてもみる。彼女は平気な様子だった。

きみは、見えているのか？

「なにをでしよう」

こいつらがさ。

「見えていますよ、もちろん」

何人？

「何人……」

彼女の目線が左右揺れて、ところどころ止まった。

「……わかりません」

そうか、僕はわかったよ。真実かどうかは知らないが、現実は。これは幻覚みたいなものだ。博士が言っていたのは、暗示だった。つけ。とにかく僕が見ているこいつらは、本当はいない。クラマサの様子からして何人か幻覚じゃないやつが含まれているかもしれないが、面倒だから確かめるつもりはない。ここから出られれば、それでいいのだ。

試しに両手を広げ、ぱちんと手のひらを打ち鳴らしてみた。変化なし。素人が五円玉を揺らしたところで、という話か。

ここに飛び交っている神話性現実化の妨害は、万能だろうか。ここから直接出ることはできなかったが、魔力が供給されている以上、まったく使えないはずはない。

うつとらしい幻覚なんて、破れる。

一瞬、視界がぶんと明滅した。驚いた顔の魔力患者がちらほらいる。だが数は圧倒的に少ない。すぐに陰鬱な世界へ戻った。惜しいな。

「もうからくりはわかったようですね」

あとは力の入れ具合か。

ここに神話性現実化の影響が及んでいることは間違いない。さきほど垣間見た魔力患者たちが、僕を妨害しているようだ。律儀に幻

覚を維持し続けている。いい加減この連中から離れたかった。

僕が強力な神話性現実化病の持ち主と言うのなら、このくらいあつさり打ち破る力があってもよさそうなものだ。それとも口だけか。おまえはやればできる子なんだよ。いいえ、僕はできない子です。

できない子のだいたいは、やらないだけだ。

とすると、やれるのかもしれない。記憶を探る。確信を持てるパスルのピースを手に取る。呪的発声、静的思考、概的感情。多重魔力患者。僕は誰だ。

わからないが、やってみよう。要素は揃ってるんだろ？

魔力の流れを感じる。霧雨の一滴。僕の容量はがばがばに空いている。構成は単純で、願えば望みが叶う。高ぶる。天使が降ろす。呪う。知識にあるあらゆる願い方してみる。神話性へのアプローチ。神へ近づく一手段。不健康になる。失う。進化を逆行する。退化する。

神へ退化する？

僕はいつの間にか閉じてしまっていた目を開き、幻覚を打ち破るべく魔力を行使した。

世界が歪む。いや、正しくなる。偽りの魔力患者はどろどろ溶けて、幾人か本物の人間が姿を現す。

「こんなに簡単に？」

簡単じゃないさ。やったらできただけだ。

クラマサに答える僕の声は、みなぎっていた。全能感と無力感の間で、針がぴんと一二時を指している。僕にはなんでもできるし、なにもできない。デジタル。レイカイチ。結局はそこそこなんだろ。アナログ。ある程度をふらふら。

部屋は軽く走ればすぐ壁にぶち当たるほどになり、疲労を見せる魔力患者と立ち尽くしているクラマサと現実感に溢れた僕だけになった。

さて、帰らせてもらおうかな。

「どこに？」

ふむ。僕に帰るところなんてない。どこに行くか聞かれる前に、僕は自問自答すべきだった。帰るとか、迂闊に言うものじゃないね。どん、どん、と扉が重いノックをされた。と思うと、すぐにこなごなに碎ける。扉の扉たる優雅さと役割を踏みにじったのは、ここにきてほしくない筆頭だった。

「帰ろう、アガイ」

フィカソトリアが僕に手を差し出す。無視して元扉を中心にぽっかり空いた穴から部屋を抜けた。

道がわからないがらとりあえず歩く。どこかに案内板でもないだろうか。

悪魔に動かされているような気がしてならないが、だからといって僕の待遇がよくなると思えなかった。違うか。これ以上悪くなるのは当然で、悪魔に反抗したところでよくはならない。これだ。

「せっかくきたのに、一言もなし、なの？」

フィカソトリアが後ろから圧力をかけてくる。悪魔よりこっちのほうが問題だ。

おまえと話すと減るんだ、色々。

そろそろと軍人が僕の前に立ちふさがった。連鎖で倒れるとかなり爽快感を得られるのではないかという並びっぷり。

「まだ用は済んでいないのだよ」

ゼルバがぬつと現れた。

これは脅しなんだけど、僕はここにいる全員を葬る方法を見つけたんだ。もう大人しく帰してくれないかな。

「なるほど、多重魔力患者としての力を発揮できるようになったか。しかし魔力がもつかな？」

フィカソトリアをちらりとうかがう。

「都合、よすぎ」

ふん、とそっぽを向かれる。僕にも制御できないじゃないか、悪

魔さん。

「おまえにはもつと必要なものがある。なに、そう長い時間は取らせんよ」

こつちへこいと手招きするゼルバを、僕は怪訝に思う。あんたはいつたい、どういうやつなんだ。

「おまえが片付けてくれると助かる課題がいくつかあつてな。どうやればいいのか教えてくれる存在が俺のもとへきた」

警備か留守番か、直立不動の兵士にご苦労と告げ、嚴重にセキユリテイがかかっている場所にゼルバが僕をいざなった。やや豪華で清潔な牢屋といった部屋がいくつもある。そのうちの一つが開かれた。

今度こそ本物の魔力患者が、五人ほどいた。皆不安げにこちらを向く。あきらかな人間臭さで、僕はほつとした。

「一部だが、ここらには軍の保護している魔力患者がいる。おまえに全部を処理してもらおう」

シヨリ？

野菜でも剥くような響きに、僕は首を傾げた。

不健康に慣れそう

ここにいる魔力患者たちは僕とそう変わらない、迷いがあれば悩みもあるし、戸惑いや怒りや哀しみや空腹を感じている連中に思えた。処理という単語が相応しいとは思えない。思えるか思えないか。僕が生きるうえでかなり大切な要素だ。

「魔力患者は実に厄介なのだよ。神話性だが現実化だが知らないが、簡単に我々の生活を乱せてしまう。はつきり言って革命者よりも邪魔なんだ。形だけでも保護しているのは、野放しにできないからだ。上層部は利用価値があると考えているかもしれないが、俺はこいつらを消してしまいたくて仕方ない」

まくし立ててから、ゼルバはにやりと唇を吊り上げた。金持ちや権力者、まあ権力者はだいたい金持ちだが、そうしたやつらに特有の、一種の余裕があった。

「これは俺の個人的な感情だ。組織なんざどうだっていいが、軍人としては市民を守ったほうがいいんだろうな。くそくらえだ。迷惑なやつは全員死ねばいい。俺は現場を預かる指揮官で終わるつもりはないから、まだおおっぴろげには言わないがな。戦争中でも、言動に気をつけんと偉くなれない」

結局のところなにが言いたいのかわからないな。僕になにをさせようっていうんだ。

「俺は悪魔と契約した」

ぶつ、と僕は吹き出してしまった。冗談だろ？ 悪魔と契約した？ あら奥さん聞きました。悪魔ですって。契約ですって。陳腐で笑っちゃまうよ。

「俺も自分を笑いたいよ。ようするに、実力で成り上がるのをやめたわけだ。軍の上層は詰まりっぱなしでね。空きがなかなかできない。できないならば、作ればいいというのが俺の考えだ。そして目的のためには、最も確実な手段を選ぶ。悪魔は俺たちとは別な倫理

や価値観で動いているから、うまくやれるはずだ。とはいっても、さきに持ちかけてきたのは悪魔側だが」

さつきからあんたは自分の話ばかりしているよ。僕が聞きたいのは、僕についてのことなんだ。

「背景から始めてわかりやすくしようとしていたのに、語りがいいいやつだ」

ゼルバが肩をすくめる。フィカソトリアが静かだな、と思ったら、ちよろちよろと部屋をのぞきまわっている。放っておくのが最善なのだけど、放っておかざるを得ないというのが最悪だ。

「悪魔はおまえを使えと言ってきた。おまえが戦争を終わらせる。そういう役割を持つとな。まったく気に入らん言い草だが、なるほど、俺は戦争などどうでもよくて、早く終わるに越したことはない問題は終わらせかたで、軍の上のほうが適度にやられてくれればいいわけだ。悪魔はそれを約束してくれた。少なくとも助力してくれるとな。悪魔が求めたのは、軍の保護下にある魔力患者四六七三人だ」

なんか増えていないか。僕が聞いたときはもっと少なかった。

「魔力患者は増え続けている。魔力爆弾の投下量を多くしたしな。市民の半数は予備群だというから、もっともっと増えるだろう。おまえにはそれを全部処理してもらう」

その処理というのがわからない。具体的には？

「魔力を取り込むのさ。神話性ごとな。悪魔は病を喰うと言っていた」

不健康になる。神に退化する。

僕の頭がうずいて、しきり訴えてきた。存在を問う根本理由。おまえはそのためにいるんだろう？ と僕を創ったやつらがうるさい。こんなときばかり、人の記憶に出てくるんじゃないやねえよ。

「俺に方法はわからない。わかるのはおまえだけだ。ク라마サとかいうやつもわからないはずだ。ま、こんなものかな。俺のお知らせは。とりあえずここにいる魔力患者どもは好きにしてい」

ゼルバは去っていった。この世界のどこにでもいる好き勝手な一人だ。野心に振れ幅は寄っているようだが、僕とそう変わりはない。つまりはあいつがさも物のように扱っている魔力患者とも。馬鹿らしいところで僕らは平等なのだ。あるいは、それこそが平等の使い道だ。

幻覚を破る過程において、僕は複数の神話性現実化病を行使できるようになっている。僕が生まれる際、あえておこった言い方をすれば僕が創造主たちが僕に意思感染させた神話性現実化病だ。おそらく呪的発声は、アマガイのものだったんだろう。憶測は憶測でしかないが、僕の憶測は当たる。自分のことだしね。腹のあたりが痛いなら、腹のあたりに異常があるのは確実だ。昨日食べた酸っぱいおにぎりのせいかな。そのくらいの憶測。

基本は現在の僕として、応用すれば病を食べることができるのかもしれない。口を開けて粥が入るのを待っていた赤子から、スプーンでプリンを掬う子供へ。

さて、試してみるのが早い。僕は怯えを見せる魔力患者たちに近づき、考えつくかぎりの方法でやってみた。神話性現実化病や、祈り、シンクロ、会話。現実化が最も効果があったが、どうも根こそぎ病をはぎとっているという感じではない。たんに魔力を奪ったり、病を抑えつけたりすることしかできなかった。

「なに、やってるの。楽しそう」

興味深げにフィカソトリアが僕のところにきた。おまえのものをいただくだとか奪うだとか呪的発声でぶつぶつ言う僕のどこが楽しそうなのかわからない。

いや、そうか。まだ僕は呪的発声でしかうまくやれていないのだ。幻覚を破ったときのように複数の神話現実化病なら、やれるのではないか。

やってみたら、できなかった。

あれ。ぶつんぶつんと、雑音が入るように僕の病気は病気足りない。うまく健康を損ねられない。

魔力がないのか。第七感に集中して、原因を特定する。

まいったな。さっきの部屋に戻るべきか。しかしうまく言えないのだが、それでも足りない気がした。僕は魔力に飢えをおぼえている。塩水を飲み続けても喉が渇くように。まさか麻薬的な効果があるのか。どんどんどんどん、ほしくなる。

ふと、足元に奇妙な生物がいるのに気がついた。植物のようでもあったが、半裸のおっさんのようでもあった。合わせて考えると、草花で装飾された半裸のおっさんだ。しかも小さい。高さはくるぶしにも満たなかった。左足に一人、右足に一人いる。

ぱらりと、天井から砂粒が落ちてくる。今度はそちらを見やると、なんだか天井の一部が崩れてきていた。やがてぱつくりと、左右に割れて、青い空が見えた。うん？　ここは何階建てだろう。ここは一階建て部分しかないのか。

がしり。足が掴まれる。おっさんが僕の靴の下に指を入れ、持ち上げた。いともあっさり僕は浮く。最近、というか生まれてからこっちあまり食べていないから、体重軽くなったかな。

ぶつうんと重く空気が振動した。外から聞こえてくる。ああ、飛行機が上空を通過しているのだろう、と思っていると、僕は飛んだ。天井の穴から空へ。

ええ？

驚きによる支配はやってこなかった。ただぼかんと漂う。飛行機が見える。なにか落ちてくる。くすだまのような物体。ぶつかる。

ぶつかる。ぶつかったら死ぬんじゃないだろうか。くすだまの質量。重力加速。僕の脆さ。

僕とくすだまが接触しそうになる。直前、くすだまが割れた。おめでとうという垂れ幕でも出てくれば冗談で済むだろうか。割れても僕は死ぬ、などと考えている時間もない。

光と闇と煙を混合した空気のなわからないうつが、僕を直撃した。僕は溺れる。ぶろろ、ぼるむぶ。そして落ちている。死なずに落ちている。落ちたら死ぬ。

また元の魔力患者たちの部屋へ重力は僕を戻す。

地面への激突を防いだのは、フィカソトリアだった。

「お姫様、だっこ」

両腕にかかった負荷はとても人が支えられるものではないが、まあこいつは人じゃないからな。納得しかけて、納得するのがおしくなった。フィカソトリアに理解を示すように。

「ねえ今のお姫様だっこ、だよ」

ちよつと興奮した様子を見せる彼女にやりきれないものを感じつつ、腕から逃れる。お姫様、お姫様、とはしゃいでいた。王制反対。僕は魔力が体に十分宿っているのにびっくりした。これまでになり充実。あれは魔力爆弾だったのか？ 悪魔が魔力を用意すると言っていたのは、さっきの部屋のことではなくて、これのことだったのか？

考えるのが億劫になってやめた。だいたい考えるなんて、そうそういつもやってられないんだ。

神話性は薬指を曲げるより簡単に現実化された。下手をすると、僕の一つの言葉が現実化しそうな勢いだった。

魔力患者の病が僕に吸収され、彼らは普通の人になっていく。元魔力患者、なんてレッテルを貼ろうと思えば可能だが、意味があるわけでもない。前世があるとして、元虫なんて名乗らない。名乗らせない。

米の一粒一粒を茶碗から箸でつまむ。ここにいるのは百人といったところか。まだ四十倍以上いるのか。面倒だ。こう、しゃもじで、がつといけないものか。しゃもがつと。

終わってもゼルバは現れなかった。てつきり監視していると思ったが、あいつに残りの魔力患者の場所を教えてもらわなくてはならない。

自然、僕は戦争を終わらせようとしている。なんとも奇妙だった。いつからそんなにやる気のある男になったのだろう。

組み込まれている？

魔力を手に入れたことで、スイッチがオンになった可能性があるのは確かだった。遺伝子のように。もしや僕を創った目的がそれだとすれば、本能かもしれない。

気に食わないな。

僕は自分に逆らう方法を模索し始めた。

間とねじれ

一枚の地図が空から舞い降りてきた。啓示のようで腹立たしかったが、受け取る。乱暴に掴んだので、ぐしゃぐしゃになって読みづらかった。

僕は地図を把握する能力に欠けていた。そうした性質をあらかじめくんでいたのか、地図には目的地のところにぐりぐりと濃い赤丸がしてあった。童話じみた地図だな、と思った。

不思議な市役所に出かけるように、僕は地図の場所へ向かおうとする。どうやってかわからないが、向かおうとする意思はあった。はたと、テレポウテイションが魔力によってできるのではないかと気づく。赤丸の場所そのものはわからないが、近くのファーストフード店はどうやら知っているところだ。それは僕を構成する魔力患者の記憶で、他人の口蓋を利用しているみたいな感じが気色悪くなってきたが、仕方ない。

フィカソトリアを連れて行くべきなのだろうか。どうせ置いていても、またこいつはくるんだろうな。諦めと割り切りの果てで、僕は彼女を手招きした。

なけなしの勇気で肩を引き寄せる。フィカソトリアが僕を、虚無の反対の瞳で見た。虚無の反対はなんだ。みっちり有かな。

もはや意識の第二層に足跡をつけようとするだけで、僕はファーストフード店へ飛んだ。走馬灯のごとき景色と隣あっている絶望的象徴に、このまま死を迎えるのも悪くない気分になってくる。考えてみれば、僕は生きて数日なのだから、二日なのだから、死を覚悟するのはおこがましいのだけど、むしろ一番覚悟のできる年齢だとしてもおかしくない。覚悟なんて、できないほうがいいんだ。ぼくはまだできないそこないだ。

僕らが出現したファーストフード店は、ずいぶん閑散としていた。

店員すらいない。だとしたら営業していないということになるが、「やっている感じ」はする。ライブ感だ。整列された椅子ですら、空気がよっこいしょと座っている。オーディエンスとバンドメンバーを引き抜いていても、空間に漂う匂いは消されていない。

熱気と束ねられた短い杖が、ここにはあつた。ひっそりとした静けさと、どっさりとした騒がしさが同居している。矛盾を体现したような場所だった。

フィカソトリアがとことこ歩いていき、白い柱を拳でとんと叩いた。すると、ごふ、と吹き出す音がして、柱からなにかがはがれた。

忍者かな、と確かめると、忍者っぽいなにかだった。迷彩が解けて人のかたちになっているが、期待するほど忍者でもない。

一斉に壁からやらなからやら、忍者っぽいやつが出てきた。パチモン戦隊だ。本物に許可をとっているのならいいけどな。

いちいち相手をするのも面倒で、外へ逃げる。僕の頭の中は、望めば入ってくる情報で忙しくなっていた。いささか退屈になるほど、僕は退化しつつある。

忍者もどきの異方者たちは、フィカソトリアに順調に撃破されていった。頑張つて望まないようにしているのか、彼女についての情報は全然入ってこない。プライバシーが保たれているようであるにやうだ。

僕は目的地である刑務所に向かった。好んで行きたくもないところだが、赤丸で示されているので、まあ、行くべきだろう。そこに魔力患者たちがたくさんいることがわかっていし、やらなくてはならないことが山積みだ。遺伝子に従つて。飯を食べて排泄をして睡眠をとる以外に従う行動なんて、まったくうつとらしい。

守衛らしき人物がいる。眠らせるか気絶させるか、ああ、気づかれなればいいんだ、と僕は姿を消して、そのまま通り過ぎた。想像が現実になる。思いのほか想像というのは不自由だと思った。もつとうまいやり方があるだろうに。

刑務所はどこか病院に似ていた。病院よりは生活の匂いがした。健康的で、不健全な。

そこにいた人々は、みんな魔力患者だった。保護じゃないんだ。罪人扱いか。余っていた施設なんだな、ここは。そう、戦争中で、捕まえるより撃つほうが早いんだ。だから空いている。吐き気がするなあ。

会っ端から奪っていく。喰っていく。僕は魔を用いて神に近づく。単純で退屈な存在へと。

いったいぜんたい、どこから神様なんて持ち出されてきたのだろう。いつの間にかいたそいつは、僕や世界に住み着いて、勝手気ままに運命を振り回して暴れまわっている。警察は逮捕すべきだ。法のすべてで。市民は対抗すべきだ。営みのすべてで。経済は対処すべきだ。幻想のすべてで。

厄介な話だよ、まったく。

おっぱいを離さない赤子のように、僕は現実を作り続けた。魔力患者の患者たるゆえんは僕に吸収されていく。星を数えて、途中でやめた。三より先の数は、手に負えないんだ。ちゃんと右手に五本、左手に五本、指はあるんだけどさ。指と脳は、必ずしも連動しないようだね。

どんどんどんどん、どんどんどんどん、太鼓のリズムで僕は侵されていくし、侵していく。犯していく。これはレイプなんじゃないか？　ここにいる誰が、「私からこの病を取りさつてくさい」と言った？　勝手に奪っていく。もしかしたら自由だったかもしれないものを、出そうな杭を打っているんじゃないか？

僕は自分がシステムになっているのを感じた。高まっていく、全能になっていく恍惚と、果てしない連続性に抗う蔑み、普通と特別をがちがち戦わせる歯車に、混乱する。

ああ、僕は人でありたいとも思わないが、神になりたいわけでもない。でも、僕はどちらか極端なほうしか選べないと宣告されている。言葉がそう決めている。いやだ、いやだ。僕は間にいたいんだ。

ねじれにいたいんだ。アイダ・ネジレ主義だ。

軍の管轄下にあるすべての神話性現実化病が僕のもとへ収束する。しつつある。した。

だから、なんなんだ？

嵐のように刑務所内を抜けて、僕は止まった。外にいた。外のはずだ。ここが内で、刑務所が外だったとしても、なんらおかしくはなかったが、ここが外だと信じずに生きるのは億劫すぎた。

力がみなぎっている。しかしその力が、僕が僕に逆らうための助けになってくれる余地はなさそうだった。

タン、と銃声がした。足元のコンクリートが削れる。タタタタタ、と連射。狙われていた。

一発目で殺せなかったら、ダメだろ。

僕の意識は防御態勢になって、ことごとく攻撃を弾いた。殻に閉じこもるイメージ。人間の可能性では、僕を殺せない。僕を超える想像力を、ここでは持っているやつがない。

接近戦を挑もうとしているのか、何人かが僕へ駆けつけてくる。失せろ、と念じると、存在を消失させた。そのあっけなさに、胃袋がきしむ。

脆すぎるじゃないか。

可哀そうな異方者たち。悪魔の協力を失って、半端な抵抗を続けるしかなくなっている。僕までたどり着いただけでも、褒めてやらなくてはならない。

帰れよ、帰れ。

しっし、と全員それぞれのつながりある場所へと移動させる。いとも容易く、誰もいなくなった。

……つまらないな。

「アガイ、大丈夫？」

フィカソトリアが、珍しく憂いを帯びた表情で近づいてきた。

珍しく？ 僕は彼女の表情なんて、注視したことがあったっけ。

今なら彼女を、いとも簡単に、長い爪を噛むように殺せるだろう。

死、

ぐぐぐ、と思考にブレーキをかける。

いいのかよ。そこまでこいつにいらなくなってほしかったか？

思っちゃだめだ、思っちゃだめだ、と思うほど、禁止の内容を思いたくなる。ずぶずぶ沼に沈む。呼吸困難になる。頭を打ちつける手ごろな硬さを探した。地面まで頭を移動するのが面倒だ。くそつ。
「危ないよ」

倒れそうになった僕をフィカソトリアが支えた。いつそ倒れたほうがいい。邪魔しないでくれ。

はあ、もうさ、もう、全部反射でいきたいんだよ。

フィカ。

「ん？」

死ね。

一番得意な呪いを僕は口にした。

平然としているフィカソトリア。

「死ね？ 死ねって言われて死ぬ人は、あんまり、いないよ」

こともなげに言う。そりゃそうだ。そうだけどさ。

僕は泣いた。どうして嬉しくも悲しくもないのに、涙が出てくるのだろう。

「どうしたの。つらいの？」

ああ、つらいのかもしれない。

アマガイが、神になれ、と叫んでいる。こいつの望みはわかった。二人、いやクラマサはちょっと違ったようだから、一人か。三より上の数なんて、たくさんで済むけど、まあ数えてやろう。そいつらの希望は、たぶん、すげえことをやりたい、って話だったんだろうな。

僕の望みは違う。とりあえず、ご飯を食べて、眠りたいよ。いずれ死んで、もうこの世には生まれたくない。

なあ、フィカ。おまえはなんで、僕と一緒にいるんだ？

「好き、だから」

謎だな、それ。

「理由って、ないんだよ」

ははは、と僕は乾いた笑いを漏らした。僕はおまえを嫌いではないよ。理由なく、果てしなく。

三度目の洗脳子

さて、僕はすでにこの戦争を終わらせる力を手にしているのかとも思ったが、そうは問屋が卸さないらしい。だからといって、生産者から直接消費者に物が売られるわけでもない。流通がうまくいかないねえ。

確かにどんなことでもできそうではある。同時に不可能はあくまで不可能とも思う。フィカソトリアは死ななかったし、世界の現実の耐久度は、僕があつさりぶち壊せるほどやわじゃないようだ。

フィカソトリアが死ななかったのは、僕の呪いより彼女のほうが強かったからだろう。全力で願ってみたらどうなるのか、試せないこともないが、どう想像しても彼女は死にそうになかった。僕の想像力なんて、貧困なのだ。限界の底がすぐ見える。僕ごときの想像で消えてしまった諸々には申し訳ないが、それはそれだ。

「おーい」

聞いたことのある声がする。遠くで博士が手を振っていた。

くるのを待つてから、挨拶する。久しぶり。

「別れてからそれほど経っておらんよ。四時間といったところか。いやいや、まさか悪魔が軍に協力するとは思ってもよらなかった。正確には、予測の筋がないこともなかったが、優先順位が低かったので失念していた。絶対共同体は悪魔の技術でできているのでね。そりゃ動けなくなるはずだ」

黒服の姿はなかった。あいつらがいてくれると、けっこう安心するんだけだな。しかし、どうしてこの場所がわかったんだ？

「ゼルバが教えてくれたよ。ふむ、現場レベルでは軍まで戦争終結に動いている。まさに時間の問題だ。異方者については、バランスを考える必要はあるまい。革命者の力があれば、軍に好き勝手させることもない。フィカソトリアがいれば、確実に。なるほどなるほ

ど、都合がよくなってきた。では、我々も終わらせるために行こうか」

終わらせる？

言葉を反芻させた。口から胃へ。胃から口へ。あっち行ってこっち行ってよいよいよい。それでもうまく消化できなかった。風が頬をなでる。今まで風なんて意識していなかった。なんて清々しいんだろう。晴れている空から、水が一滴ぽちゃんと肌に当たった。天気雨かな。これっぽっちじゃ、シャンプーもできないよ。

「どうしたのかね」

博士が顔を覗き込んでくる。僕を虫眼鏡かなにかのように。集まった太陽光が僕を通して色んなものを焼けばいいのに。

どうやって終わらせる。僕の力が、あと倍くらいにならないと、どうにもできない。

「倍でいいのかね」

四〇〇〇倍くらいにはなったよ、今の僕の力は。いちいち説明するのはいやだったので、とてつもなく端折って現状理解させてみる。悪魔と軍に魔力患者を押しつけられてどうこう。

「はあ、多少は聞いていた話だが、なかなかひどいな。やつらが増やしたのになんというずさんさだろう。魔力爆弾が革命因子の活性化を抑えているのだとしても、釣り合わない結果だ」

僕がやったのは残飯処理みたいなもんかな。

「しかし君が力を手に入れたことも確かだ。収束は好ましくないが、この際目をつぶろう」

だといって、力はまだ必要なわけだろう。これ以上どうしたらいいんだ。

「しらみつぶしに魔力患者を探索してもいいが、一つアイデアを思いついた。ようするに、君の力を効率的に扱えばいいわけだ。戦争を続けている要素をピンポイントで排除できれば、きみの神話性現実化を無理なく使えれば、一気に片付けられるかもしれない」

そういうことができるなら、八〇〇〇倍っていう計算を発表しな

いでもらいたいんだけど。

「思いついたのは、ムロツキと出会ったからだ」

ムロツキ？ あの力エルか。

「そう、あの力エルの虫、情報収集能力を活かせば、可能だ」

いかにも無理っぽそうだが、ぐだぐだしているとまたどこかへ連れ去られそうなので、僕たちはとりあえず移動することにした。

先にムロツキを探していた黒服から連絡が入る。どうやら力エルは軍と一緒にいたようだが、黒服が交渉するとあっさり引き渡されたいらしい。手のひら返すなあ。いや、もともと軍がムロツキに好意的だった保証はないか。

半壊したイージー・マスカットで黒服と合流すると、ムロツキは大人しくしていた。ケロケロ鳴いてもいないし、肌を粘膜でてらてらさせてもいない。せつかく力エルなのに。

「今なにか失礼なことを考えませんでした？」

心を読むとはちょこざいな。

「ムロツキくん、きみは戦争を終わらせるのには賛成なのだろう？
我々に協力してくれんか。軍も同じ方向だ。別に革命者の勢力が衰えるわけではないが、強力になるわけでもない。それほどきみの誇りを傷つけることになるまい」

「誇りなぞありません。あるのは納得と選択です」

惘然としてムロツキは言った。こりゃ説得はできなさそうだ。

ここつて洗脳施設なんだろう。なんかこつ、虚ろな瞳にできたりしないの。

「わたしは専門外だね。どうしてもというなら、できなくはないが、
廃人になるかもしれない」

俳人になれるならよかったのにね。

「平然と危ういことを離さないでくれますか。本人の目の前で」

じゃあ、僕がやろうつと。

「あつ」

フィカソトリアが声をあげたが、無視をした。

言うことを聞いてもらえればいいんだ。やりすぎないように意識を研ぎ澄ます。自覚的に非道になるのは、つらいが、気軽さを適度に含めて料理すればいける。

「なにを……」

ふ、とムロツキの意識を奪い、次に起きたら、もう彼は僕に従うようになっていた。だらしない表情と、期待通りのうつろな目。

はい、って言うて。

「はい」

とても素直です。従順です。

これは、思ったよりひどいな。

誰かの自由を踏みじり、不自由にする。束縛する。家畜にする。これほど恐ろしいことがあるだろうか。でも、人間はやってきた。僕もやった。やらなければよかったかな。後悔した。後悔、罪悪感。なんで先に立って僕を止めてくれないのか。やはり完全じゃない。人間は。システムは。間違うようにできている。

ムロツキに指示をして、虫を飛ばす。博士が細かく探る場所を決めた。

そこへガラハロンドルが現れたのは、どうやら約束通りだったらしい。しかし約束が守られても、予定通りにはいかないようだ。

「洗脳子が逃げ出した」

息を切らしたガラハロンドルはそう言った。笛を吹いているみたいだった。

「抑えられなかった、ということかな」

「管理は徹底していた。しかし……ぼくは間に合わなかったからな」とも説明しにくいが、やられた仲間を見るに、奴らはまた強くなっていた。拘束を尋常ではない力で引きちぎったようだ」

尋常なやつがどんどん少なくなっているよな、と僕は思う。

「洗脳子か。ここにきて問題がまた増えたな」

「気をつける。あいつらの狙いが我々の他にいるとしたら、きみらだろう」

待て、そもそも洗脳子の目的は、革命者を超えることなんだろう？　もう達成しているじゃないか。

「いや、ただ一人、彼らが超えていない存在がいる」

みんなが一斉にフィカソトリアを見た。

「なにか顔に、ついてる？」

とぼけている彼女に僕はため息をついた。彼女が負ける姿なんて思い浮かべられないが、僕らにとぼちりがくる可能性は否めない。

ダン、と銃声がした。人の声より銃の声のほう聞いてるんじゃないか。

弾丸は的確に僕の心臓を捉えていたが、フィカソトリアが叩き落とした。どうやってかは僕も知りたい。石をぶつけてだってさ。もうなにも言及する気にならないよ。僕が精神的な力の極致にいるとしたら、彼女は肉体的だ。どっちがすごいかわいたら、あつちのほうですごくそうだ。

イージー・マスカットは一二〇度くらいウェルカムな状態だったが、洗脳子は元玄関のあたりからゆらりと歩いてきた。無言だった。名乗りや宣戦布告はない。ゾンビよりも静かに迫ってくる。

「様子がおかしいな」

博士が眉をひそめる。

僕らも傍から見たらおかしいのかもしれないよ。

「言っても仕方ない。戦意はあるようだから、逃げるのでなければここでやるしかないぞ」

ガラハロンドルは僕たちと距離を取った。分散するつもりだろう。しかし洗脳子たちはまっすぐ僕の、いやフィカソトリアのほうへ向かってくる。

「眼中にないか。このっ」

銃を抜き、ガラハロンドルは発砲した。一人の右腕に当たる。歩みは止まらない。続いて右脚に。一瞬、歩みが止まる。しかしすぐに再開。

「なんだと……？」

「あの再生能力か。どうにも速くなってないかね、治るのが。非常に厄介だぞ」

博士の言葉が耳に入る前に、僕は止まれと発声した。鈍くなった気がする、が、止まりはしない。複数の神話性現実化病を重ね、さらに行使する。ほとんどが歩みをやめたが、二人ほどまだ進んでいた。

おいおい、これはきついぞ。

完全に止めることすらできないなら、殺すこともできないだろう。僕、全然強くなつてないんじゃないか？

動く二人に対し、フィカソトリアが深い踏込み。一方にはえぐるようなアッパーカット。ぐらららんと頭が安つばいおもちゃのように揺れる。もう一方にはハイキック。めきつといやな音がして、たぶん、頭がい骨が壊れた。

ところが、二人はビデオを逆再生したように態勢を整え、フィカソトリアを捕まえた。彼女の腕が引つ張られる。その間にローキックをあっけなく決め、脚の骨が折れるが、腕は引つ張られたままで脚もすぐに治った。

おいおいおいおい、もう別な生物になつてゐるぞ。

僕が動揺すると、他の連中が金縛りを解いてフィカソトリアに襲いかかった。嘘だろ。継続的に現実化させないといけないっていうのかよ。しんどすぎる。

それで僕は気づいた。こいつら、魔力を使ってやがる。僕の現実化に、抵抗している。

宣言

フィカソトリアが洗脳子を勢いよく振り払うと、洗濯機のように回転して離れた。洗脳子は俊敏さをいささか失っていたが、どこまでも食らいつくようにしつこい。躊躇どころか動作と動作の間のタメがなく、大量の泥が迫ってくるような脅威を持っていた。

神話性現実化病に感染してるっていうのか、こいつら。

僕は動きを止めつつ、病を取り込もうとする。一体ずつであれば、対処できるはずだ。血の使い魔が、何人かの足に絡みつく。ガラハロンドルも援護はしてくれていた。博士もなんかやってくれよ。

僕が取り込むスピードは軍の施設のと看より圧倒的に遅く、綱引きでわずかに勝っているにすぎないもどかしさだった。無抵抗の彼らと戦いを仕掛けてきたやつらの差は確かにあると思うが、なにが決定的な起因なのかはわからない。

苦戦しているフィカソトリアは、以前に見せたぎらつきを放ち始めていた。エンジンがかかってきたとでも言うのか。

結局のところ互角になりつつある戦局を左右したのは、僕が支配下に置いたはずのムロツキだった。

「よくも私の自由を踏みにじってくれたな」

怒りの気配を背後に感じ、振り向くとムロツキが虫をまとわりつかせて立っていた。ぞっとする表情。カエルじゃない、人間だ。当たり前前だけどさ。

僕の現実化が破られた？ 破られっぱなしだよ、もう。

「私自身で抵抗できたわけではありません。どんな魔力患者でも、虫の一匹一匹にいちいち力行使できないと考えましてね。あらかじめ対応策を練っておいたというわけです」

ムロツキは象が歩くように言った。よほど腹に据えかねているらしい。そりゃ、そうだよな。僕だったら半狂乱になる。

「あなたがたを利用できると思っていたのが間違いだったようです。

抹殺しなければならなかった。最初から」

ぶうんと音がする。とつさに体を横へ飛ばし、見やると、数匹の蜂が僕へ針を向けていた。あわてて消失を願う。が、いくら消しても次から次へと現れた。

ここにいる全部を消す。

多少の浪費を覚悟して、僕は魔力を行使する範囲を広げようとした。想像の限り、僕は僕の都合のよい現実を作り変えようとする。

じゅばり、と不必要な効果音とともに、虫が溶けた。ムロヅキの周囲もぽかりと空間が空く。

これで、どうだ。

「無駄ですね。あなたと私なら、私が勝つ。虫を甘く見ているようですから」

地面が盛り上がり、拳の大きさの穴がぼこりと開いた。やばい。僕はそこをふさぐ。と、またぶうんと音がした。ぶうん、ぶうん、蜂が飛ぶ。

くそつ。闇雲に僕は逃げた。魔力を湯水のように使うが、冷静さを失い、とてもじゃないがうまいやり方はできていなかった。

「アガイ！」

フィカ？

声が聞こえて、僕はいつの間にか閉じていた目を開けた。また現実逃避をしようとしていたらしい。

虫を叩き落としたフィカソトリアが僕の前にいたが、新しく出現した蜂も同時に視界に入っている。フィカソトリアの首に、針を向かわせている。僕は、あ、と思った。それ以上思うことができなかった。思考の速度より、蜂の針が刺さるほうが速かった。

皮膚に針がめり込む様が、ゆっくり見えた。

僕は蜂を素手で殺した。精神より肉体のほうが動いた。危険にについては考えなかった。醤油さしを取るときに、いちいち醤油さしを取る、なんて考えないだろう？

フィカソトリアはなんら変わるところがないように見え、すぐに

洗脳の相手に戻ったが、あっけなく蹴っ飛ばされた。どしゃり、僕のところへとんば返り。

びくん、びくん、と体を痙攣させているフィカソトリアに、僕は声をかけようとした。なにを？　がんばれ、とか、負けるな、だろうか。馬鹿馬鹿しい。言葉はない。そのとき、僕は赤ん坊になっていたんだ。だからお腹をすかせたから泣き叫ぶように、発声しようとしただけだ。これも退化って呼ぶのかな。人は、自身を神にしている無垢から逃れるために、大人になるのだろうか。だけど人は信仰する。逃れたものを信じ奉る。馬鹿なのか？　愚かなのか？　僕は信仰したくないから、赤子になったのか。僕が一番愚かなのか。なのか、なのか。

フィカソトリアがだんだん動かなくなってくる。指先がかくかく忙しなかったのが、かくん、かくん、と余裕のある指揮者になっている。僕を吸った唇が、息よりも浅く濡れている。太ももが眠気を表すように擦られる。まさか、本当に蜂ごときに？　ようやく疑問を抱いた。

でも、確かに、死にかけているじゃないか。

僕らが生きている証明はどこで為される。心臓を、呼吸を、細胞の動きを止めれば、死ねるというなら、死んでもいい。もうなんだか疲れたし、死んでもいい。違うと言っている僕がいる。彼にとつて、彼女は死ぬべきでないらしい。昔、死ぬべきだと言っていたやつは、今は沈黙している。恐れていたやつは、動かないなら、大したことないな、と嗤っている。

僕は、僕は、どこまでいっても僕のことしか考えていない。自分本位で、保己的で、他人を自分のパーツとしか受け止められない。だからでもあるのか、彼女を失いそうになっていると、僕も臓器の一つが口から吐き出されるようだった。

飛び回っている蜂が、くしゃりと丸まって崩れる。僕がそう思っただけ。ムロツキはカエルになって、ゲロゲロ鳴いている。どうしてもっと早くにそうしなかったのだろう。ずっとあいつはカエルだ

ったのに、どうして本当の姿にしてやらなかったのだろう。ちゃんと呪いをかけてやらなくっちゃ、いけなかったのに。洗脳子は全員機能を停止させて、やさしく地面に置いてやった。僕が振り絞った大人のふりだった。

魔が僕を取り込むのがわかる。僕が魔をおいしくいただくのもわかる。消費された分の魔力を空気中から呼ぶ。洗脳子から吸収する。今まで以上の量を手に入れる方法も、用意できるはずだ。なんだ、簡単だな。可能な限りの精神的工夫をやれば、いいわけだよ。

消えかけの灯火が見えるようなフィカソトリアを、僕はお姫様だつこした。非力な腕力を魔力で補助する。僕はなんでも魔力に頼る。戦争が銃に頼るように。機械が電気に頼るように。命が命に頼るように。

なんで僕はいいつが嫌いなんだっけ、と今更思った。理由なんて作るつもりはなかったが、礼儀として一回は思っておかなければならないような気がした。礼儀と眠りと飯と性と、それくらいあれば贅沢だ。

はあ。息を吐く。さあ、禁忌でも犯そうかな。倫理の下着をはぎ取ってさ、不可逆性の神秘を力でねじ伏せて、唾液を垂らしてやった善悪とディープキス、規律の皮ごと乳房にむしゃぶりついて、人間の絶対をレイプするんだ。

僕は言うだろう。そら、言うぞ。言わないと、神様はわかっちゃくれないんだ。

だから言う。

フィカ、生きてしまえ。

僕は現実を無視した現実で、神様に寄りかかって天上から落として地上にぶつかる寸前に糸で吊り上げてひとときしり劇を演じさせた。僕の言葉は現実化する。なんて気持ちが悪いんだろう。死ね、とか、馬鹿、とかと同じだ。言葉は現実と人間を傷つける。

目を開くフィカソトリア。あれ、閉じていたのかい。おまえも現実逃避するときがあるんだね。

「アガイ？」

そうとも、アガイだよ。

僕は笑ってみた。なかなかうまくやれたと思う。

「なに笑って、るの」

おまえが死んだからさ、楽しくって笑っちゃったんだ。

「ひどい」

彼女も笑った。不思議だった。人が死んで蘇っただけなのに、なんでこんなに晴れやかで、面白いんだろう。僕はひどいな。ひどくてひどくて、誰の言うことも聞きたくなかったよ。自分の言葉でさえも。

フィカソトリアを降ろそうとしたら、しがみつかれた。いやいやと首を振られる。おい、新婚ごっこをやっているんじゃないんだよ。頭突きを喰らわせて、無理やり立たせる。

「ふーむ、なにがどうなっているのかわからないな」

博士がようやく部外者の立ち位置から解放されて、言った。

僕にだってわからないさ。謎だよ、なぞなぞだよ、博士。

「そういう問題ではないが……まあ、いい。あの洗脳子を倒せたのだからな」

「死んではいないようですね」

黒服の報告に、殺してないもん、と僕が答える。

「きみがどうやら神話性現実化を使いこなしているらしいのは、なんとかわかった。もしや、すでに戦争を終結へ導けるのではないかね」

うーん、まあ、できるね。

「できるのか。わたしの計算はなんの役にも立たなかったな。なにせ、一人がすべてを解決してしまえるのだから。本当に八〇〇〇倍になるとは、予測していなかったよ。さて、ではさっそく取りかかってくれるかな。わたしはそろそろ死期が近いような気がしてきたよ。ここ最近は騒がしすぎてな」

空を見た。僕はなにかあると空を見たくなるようだ。なにもない

ようでなにかあるから。だから大切なものを見た気になるんだ。芸術と似てるかな。

僕は宣言することにした。

できるけど、やらないよ。

「なに？」

肩をすくませる。気取った動作だが、今ならやれた。

戦争は終わらせない。僕はなにもしない。それが選択だ。

悪魔がやってくる

「どういつつもりだね。戦争が続くことで喜ばしい事態が訪れるとも思えないがね」

博士は怪訝そうに言った。

喜びなんていらさないさ。ほしいのは、不自由じゃないって感覚だ。どうも、戦争を終わらせたいってやつが多いんだけど、付きやつてやる義理もないかなって。いや義理があってもいやだったらやらないけどね。うん、僕はいやになったんだ。そういうことだな。

「納得したいわけじゃないんだが、もっと説明を求めてもいいかね？」

納得したいわけじゃないのに？

「説明とは、必ずしも納得させるものじゃないのだよ。相手を黙らせる圧迫なのだ。わたしを押し黙らせてくれないか」

「ん、説明か。そうだね、まあ、大部分を創作することにはなる。なにせさつき思っただけだから。たとえば、海の波がざざ、と僕の足を濡らすとする。すると僕は、流されるわけにはいかない、と決意するんだ。いくら波が強くて、僕はここにいくちやならない。踏ん張って、どうにかこうにか耐えていると、いずれ波はひいていく。よっしゃ、とそこにいることをやめて、砂浜を歩く。そうしたら今度は、こっちから波にさらわれてやるうかな、って気になる。ひかれると、追いたくなる。押してダメなら引いてみる、という話は、そんな性質を利用してんだろうけど、問題は自主的かどうかってことなんだろう。泳ぐのはきついし、ぞぶぞぶ濡れるのはうまくないから、いかだを作る。でも作っている途中で、生きるためには水だの食料だのが必要だと思って、海に出るのはやめるんだ。海は人の母と言うけど、母とはもう一緒にいるのが苦痛なんだ

な。塩っ辛くてさ。切った木を放って、僕は僕の道を探す。平地も森も坂も家も壁もあるだろう。道はどこにでもできるからね。すると僕はどこにも僕の道なんてないと気づく。こっから先は、粘れるかどうかさ。悪あがきだ。悪あがき。ここだよここ、と喚きたてるか、静かに主張するか。お節介なやつらはいるもので、あそこがきみの道だよ、とか言ってくるんだけど、全部間違っている。僕は間違いがわからないものだから、いちいち確かめる。でも、やっぱり違う。なんだよ、違うじゃねえか。僕は思う。じゃあ好き勝手やらせてもらいますよ、ってね。つまりそれだ。

「どれだ？」

「言ってることの、半分も、わからない」

理解を示さない博士とフィカソトリアに、僕はうなずく。

その反応は、僕が生まれてからこのかた抱いてきたものだ。人の言動ってやつに対する素直さだ。

僕もわからない。口が動くままに言っているから。とにかく博士を押さないと、と思ってるね。

「せっかくの弁舌だが、どうも一難去ってまた一難らしいぞ」

ガラハロンドルが会話に参加した。存在感を消すのがうまいやつだ。この考え方って、いじめっこかな？

ザ、ザ、ザ。

ノイズのように周りを取り囲まれているのがわかる。えらく遠くから円を作って、僕らをうかがっている。隠れているつもりなのかもしれないが、ちらりちらりと姿が見えた。

「異方者か？」

目を細めた博士は。当てずっぱうか計算を図ってくる。

そうみたいだ。僕はあっさりと答えた。もちろん、なにかもわかるわけではないが、多少の距離や迷彩は僕にとって薄皮になっていた。

「彼らはこの戦争で最も弱い。そして最もこの戦争を望んでいる勢力だ。正直なんだよ。敵対的民衆とでも呼ぼうか、認められないも

のは認められない、認められるまでは我々は戦う、というスタンスなのだ」

「そういったところは革命者と似てるが、ぼくらは彼らからしたら異分子以外の何物でもないだろうな」

僕にはよくわからないけど、たぶん、そっぽを向いたたくさんの人々なんだって思うよ。あの人たちは。

「片付け、ちやう？」

さっそく物騒にフィカソトリアは態勢をとる。こいつは暴力に頼りつきりだ。

「洗脳子に比べれば楽だろうな。……ん、絶対共同体よ、どうした」

異常に気づいたガラハロンドルは、黒服に近づく。黒服は壊れかけたロボットのように関節を軋ませている。

「ま、ま、マテ。これは……」

口調までロボットじみて、とうとうがくんと膝をついた。僕と博士は原因の一端に心当たりを感じた。

「まずいぞ！」

注意を発する博士は間に合わず、ガラハロンドルは黒服から飛び出した血液悪魔に上半身を覆われる。

「むぐつ！」

僕は血液悪魔を蒸発させてガラハロンドルを助ける。続いて黒服を止めようとするが、黒服の本体とも呼べる体は、なにもしなくても止まっていた。ただ、普段過ごしているうちに彼らには感じなかった魔力の波動を肌に受ける。

博士、聞かなくてもわかるにはわかるんだけど、黒服は悪魔なのかい？

「うむ。悪魔の存在技術を使っている。悪魔は全として現れ、個とされるのは端末としての意味でしかない。絶対共同体は本体と端末が同じだが、根本的なところは悪魔と変わらない」

あいつ、今は悪魔に操られているな。

「まさか、まさかそんなことが可能だとはな。私のミスだ。驕りだ。」

技術だけであれば、悪魔の存在とは切り離して運用できると確信して生み出したのだが……」

後悔するのは、暇なときじゃないといけないらしい。

迫りつつある異方者と、悪魔に乗っ取られつつある黒服。黒服が敵対したとしても、全部を相手にするのは難しくなかった。

だけど、どうも怪しいな、と思う。僕が容易くこの事態を乗り越えられないような障害が発生する、に賭けてもいい。自分がうまくいかないことに賭けるってのも、妙な話だ。

黒服がびしり、と立ち上がった。

「いけません。どうして戦争を終わらせてくれないのでしょうか。いえ、それは別にいいのですが、あなたの考えが我々にとって危険になりつつあるのを感じしました。いけません。大人しくしていただいようですから、いけません」

悪魔の声を黒服は伝えていた。人型スピーカーだ。まぎれもなくあの、僕を勝手に呼びだした悪魔だった。

いけませんいけませんって、禁止されると余計やりたくなるのかわからないのか。悪魔の言うことに従うなんていやだし、僕がそうすることを信じるなんて、悪魔らしくないじゃないか。

黒服、いや悪魔はにこりと笑うと、完全にコントロールを得たとばかりに体をナイフで刻み、血の使い魔をあちこちから噴出させた。「我々らしいものなんてないのです。信じてもしません。ただ我々にも感情があるだけです。手を上げている者を指し、なにも答えなかった場合、答えないので、と問うてもかまわないでしょう。あなたがどうするのか、我々にはわからない。それほどの力を持ったのですから。わからないなら、こちらから出向く手間をかけなくては」

できの悪い生徒に指導するって？

「もはやあなたは我々と同等になりつつある。魔神です。神の病を人が御しようという。喰らおうという。人こそ魔になる。それ自体は、別段いい。しかし、世界の理に革命を持ち込まれるのは困りま

す」

言っている意味はわからないが、どうも僕は楽しくなってきたよ。あんたを困らせられてな。

ダン！ と異方者から火器による攻撃が始まった。僕は博士をシルドし、穴を掘って入れる。

「かたじけない、と言っておくよ」

後で飯をおごってくれ。

黒服が駆ける。洗脳子のようにはいかないだろう、と見積もるが、割りあいあつさり黒服は僕の現実化で封じ込めることができた。さすがに消滅させるのはなんなので、停止を維持する。

「その判断は間違いです」

なんだと？

黒服は停止した部分としていない部分に分かれた。というか、だんだんと黒服が黒服でなくなる。溶けるでもなく砂になるでもなく、一番近いのは靄で、単なる黒になった。こういった働きかけをしていいのか、判断しかねる。

うっ。

僕の足首を靄が掴んだ。掴んだ？ 靄がもやもやしているだけにしか見えないが、感触としては掴まれている。

ガラハロンドルが散らばった靄に銃を撃った。意味がない。悪魔が悪魔たる存在を示して、僕らに牙をむいていた。

死んでも恨むなよ。

僕は靄を消しにかかる。少しは残そうかとも思ったが、それでは無駄な気がした。気がするだけで殺そうとして、申し訳ないけど。

全てを消し、確認する。感覚を総動員。

「ダメです。殺せはしますが、いくらでも我々は現れる」

靄はなにもないところから現れた。まるで物質そのものみたいなやつだ。完全な無がない以上、存在できるとも言うような。

だがまあ、どうせ弱点があるだろう、と僕は高をくくった。抜け道が。穴が。それがこの世つてもんじゃないかい？

悪魔不明

だいたい、なんでやつは黒服を乗っ取って仕掛けてきているんだ？ あの部屋にいた悪魔を思い浮かべる。サンタクロースみたいなあいつが、直々にくればいいじゃないか。それに僕がやられたように、自由に移動させられるなら、一人ずつ相手にしたほうが楽だ。なんか、くさいな。

異方者からの攻撃は音を減らしつつある。フィカソトリアが暴れているのだろう。一度死んでも相変わらずだ。あるいは彼女なら元黒服現靄を簡単に倒せてしまうのかもしれない。まあ、頼るのはしやくだから呼ばないけど。

血の使い魔がガラハロンドルの背後から襲い掛かるのを助ける。

「すまん」

気をつける。僕の注意は散漫だから、いつでも便利にやれはしない。

ガラハロンドルは目をぎらつかせていた。自分から身を危険にさらしている？ 革命の因子が活性化するかどうか、ってことなんだろうが、難しそうだ。

靄はいつまでもあり続けたが、僕がいつまでも消し去れるかは怪しい。魔力はあまり心配いらないが、なにせ面倒でたまらない。こちらら一応人間だが、相手は悪魔だ。疲れ知らずなら持久戦で勝てるわけがない。

ま、あっちもなかなか勝てそうにないようだね。

靄はあちこちから現れて惑わしてくるが、だからといって傷を負わせてはこない。体内に侵入されると厄介であると予測は立つが、それだけだ。

膠着状態ってやなんだよなあ。どうしようもなくってさ。

「同感です。しかし、膠着はしてません。長引いています」

余裕あるなあ。手段を残してるってか。

僕は早急に片をつけないといけない焦りを抱いた。こうしている間にも、事態は厄介さを増している可能性がある。

穴は、抜け道はどこだ。黒服とサンタクロースの違いは。閃きというほどではないが、思い浮かぶものはある。今こうして相対している黒服は殺せない。サンタクロース悪魔は殺しても蘇った。結果としてやつは生きるが、殺せるか殺せないか、その違いだ。

死ねない理由がある？ 死にたくないのは、大抵のやつがそうだ。それとも、そもそも死んで蘇ったのは嘘で、悪魔だって死んだら終わりなのか。

形態の違い。靄と人型。これは違いが大きすぎて判断ができない。あーもう、わからん。

こういうときは、悪いほうにでもなんでも、転がればいいのだ。とにかく同じ状況が続くのはまずい。ただ痩せ衰えていくだけだから。

靄はやはり積極的に仕掛けてはこず、ふらりふらりと雪のように舞うばかりだ。

「魔力パターンは二〇万五七八です」

あ？ なんだい唐突に。

「なぜ、二〇万五七八も種類があるのに、あなたはこれまで都合よく魔力を得てこれたのでしょうか」

運がよかったんだろうな。

「いいえ、運が悪かったのです。我々に目をつけられたのですからそういう自覚、もっと有効に使ってくれ。」

とうとう異方者を一掃したフィカソトリアが戻ってきた。軽やかに、スキップでもするかのように跳ねている。走ったほうが速いだろうに、水切りみたいな感じだ。

「異方者は片付けましたか。おや、いけません。殺してはいないですよ。そこまで手間を省いてはくれませんか」

なに？

ぼこぼこ、と不快な響きがした。異方者がいるであろう範囲、そ

れなりに離れてはいたが、明らかな異常が見えた。がああ、と悲鳴。人が肉塊になつて膨れ上がっている。

「利用、された？」

察したフィカソトリアが若干の怒りを含ませて言った。

「どうやら、そのようだな。これは怒るべきだぞ、フィカ。僕は適当に煽つてから、次にやつてくる危機に備えた。」

肉塊から生まれるものがあつた。悪魔だ。十悪魔十色に、団子をひねり出すようにぼこぼこ生まれてくる。子だくさんだね、どうも「多重なのです。あなたは様々な意味において、多重なのです。二〇万五七八に匹敵するほどに」

「そんなにいっぱいかい。わざわざ話しかけてくる悪魔に、僕は意図を感じて、警戒する。」

「だからこそ利用したかったのですが、残念です」

なにがしたいのかよくわからないんだよ、おまえらは。

僕は呆れつつ、悪魔の対処にかかる。いつだがフィカソトリアが相手にした悪魔とは、質が異なっていた。インフレ起きてないか。生まれてくる悪魔に神話性現実化は十分に効くが、肉塊そのもののへの干渉は容易ではなかった。僕の意味が、壁に阻まれているような感じだ。

フィカソトリアが肉塊に蹴りを喰らわせたが、彼女の力をもつてしても、肉塊は破壊できなかった。

続々と現れる悪魔をパズルみたいにいちいち消していると、ふいに眠気が僕に訪れた。嘘だろ？　なんでこんなときに。ここはベッドじゃないぞ。消灯時間にもまだ早い。

「ようやくですか。神話性現実化は、意思をすり減らします。魔力で誤魔化していたようですが、回復させるために、眠りを必要とする段階にまできたようです」

く、そ。聞いてないぞ。誰も言わないから。

「がくん、と落ちそうになる意識を奮い立たせる。指を噛んだ。太ももを叩いた。髪をかきむしった。まだ眠い。」

「油断です」

靄が僕の目の前にあった。しまった、と思う前に、靄に口内への侵入を許す。

「あなたを殺すことは簡単にできる。しかし、貴重な人材を失いたくはありません」

僕の喉が勝手にフィカを呼んだ。

「なに、アガイ」

銃声が鳴った。胸に痛みをおぼえる。正体を探すと、胸から血がどくどくと染み出していた。おいおい、心臓があるあたりじゃないか。

「な……」

ガラハロンドルが呆然とつぶやいた。彼の腕は血の使い魔によって固定され、靄は指先を操っていた。瞬発力があつたのだらう。彼はわけがわからないといった様子だった。

痛みは熱さになり、熱さは冷たさになって、僕は倒れた。殺してんじゃねえかよ。

「死にません。あなたは死なない」

銃で心臓撃たれて死ななかつたら、そりやどつかおかしいよ。

死が僕を正常だとするのか、僕の正常が死を体験させてくれるのか。

そつだ、治れと念じれば、治るはずだ。まだ意識はある。意思はある。僕の病は、僕を生かす。

フィカソトリアが僕を仰向けにした。うつぶせになっていたこともわからなかった。うつすらと視界に彼女の姿が映る。僕は彼女に恐怖を抱いた自分を思い出す。死にたいと願った、あのとき。

唇に触れるもの。彼女の唇。なんだってこんな状態でキスをするんだ。僕はむかついた。お別れだとしても言つつもりか。ふざけるな。どすんと突き飛ばすつもりだったが、実際はこすつと擦れるくらいに腕を動かした。

口を開く。そつだ、はつきりと。

「僕は、生きる」

それは最後の希望だった。無根拠の果てから召喚した、命。なんだった銃に撃たれたくらいでこんな気持ちにならなくちゃいけないんだい。ロマンチックの欠片もありやしない。キスはむかつくし、フィカソトリアだし、胸はなかなか治らないし。

悪魔の望み通り死なないのがしやくなので、死んでやろうかとも思ったが、それはそれで問題だ。もっともつと迷惑をかけてやらないうと気が済まない。

ぎりつと奥歯を噛みしめ、僕はゆったり立ち上がる。

「大丈夫？」

フィカソトリアが心配そうに言った。

なにキスなんかしてんだよ。

「嫌悪も生命力になるかと思って」

……わかつてるな、おまえ。

ごぼ、ごぼ。体内にいる靄を、咳とともに浄化させる。

さらに肉塊と悪魔を消滅させるに努めた。ようするに僕は、追いつめられると集中力が出るのだ。壁のあった肉塊は、今は膜くらいに感じる。

あの悪魔め。なにがやりたかったんだ。

「一つは、これです」

声はフィカソトリアから聞こえた。ああ、キスのときに移ったのね。うんざりと首を振る。そいつは操れるような女じゃないぞ。

「操る必要などありません。一瞬借りられればそれでいい」

彼女は、いや悪魔は、恐るべき速度で僕の体からなにかを抜き取った。あるいは、僕に抜き取られたという感触を与えた。

なにを……。

「革命の因子は、我々の持つことができない発明です。なるほど素晴らしい。世界干渉もできるのか。まさしく革命」

ぶるつとフィカソトリアが震え、悪魔の気配は消えた。

「むかつくやつ」

彼女は地団駄を踏んだ。侵入を許したのが腹に据えかねるらしい。
おまえがキスなんかするからだよ。

悪魔感動

ぞくりと、悪寒が走った。

僕はなにかを奪われた。いや、押しつけられたのか？

毛穴が全部内側から解放されて、嫌悪に襲われた。

「本当に革命を起こされてはたまらない。偽りの更新のもとで騒がしくもむなしく終わっていけばよかったのです。我々の発明した魔力と同等の因子など、よくも作ってくれました」

悪魔の気配はない。にもかかわらず、声はした。

声は、僕が発していた。

愕然と、僕は僕を意識内で見つめる。

僕からフィカソトリア、フィカソトリアから僕へ、と移動したのか？

どうもおかしい。僕は誤りなく体内から靄を追い出したはずだ。

「なるほど、あなたは本当になにもしないつもりのような。いけません、ここであなたに魔力を存分に使ってもらわないと、他のあなたが暴れるのです」

他の僕、だと。

僕は何人か僕を持っているが、そいつらは魔力をどうしようが暴れるときは暴れる。

「あなたは多重なのです。世界において。二〇万五七八くらいに。それよりは少ないでしょうが」

いっぱいいるなあ。

「多くの世界であなたは共有され、多重になっている。いえ、多重になったから、共有されることになったのでしょうか。それは我々に近い性質です」

わかるようにしゃべれよ。

「説明させていただけるのであれば、します」

そういう隙があるかな。

気づけばフィカソトリアが僕のみぞおちに拳を埋め込んでいた。おそらく、手加減されている。でなければ僕は体を貫かれていただろう。

「ぐっ」

電撃がはらわたを喰い散らかすような痛み。悪魔と僕は一緒に仲良くうめいた。冗談じゃない。死ぬぞ。

「アガイ、出して」

喉を詰まらせたわけじゃないんだよ。

僕は文句を言えないことが非常に不満だった。おい悪魔、代わりに言えよ。

「フィカソトリア、あなたの力によってアガイとわたくしは一体化しております。そのような打撃は我々に平等な苦痛をもたらすだけなので、おやめください」

丁寧が悪魔は「やめて」と言った。

「あたしの、力？」

「革命者たる力。真なる意味での、世界を変える力です。法則を書き換えるほどに」

そういうの、教えちゃってもいいんだ？

「わたくしは我々の中でも、語る役割を主に担います。悪魔は沈黙しますが、秘密は持ちません」

信用できない台詞だ。

「人間は信用に依存しすぎです。疑わなければ済む話を」

そうかもな。でも、悪魔には関係のないことだ。

僕は自身のコントロールを取り戻そうとした。そこではたと気づく。僕は乗っ取られているわけではない。一体化しているのだ。僕は僕を操れたし、同時に悪魔は僕だった。

「我々は同調と呼んでいます。人間に対して使えるものではなかったのですが、革命の因子が可能にしました」

気持ちの悪いことを……。

別々であるのに、同じ。怒りと悲しみが両立するように、僕は悪魔とともにいた。

「あたしがやったのなら、じゃあ、元に戻るのも、できるね」

フィカソトリアは手首を回し、シュツとジャブを放った。どこまでいっても暴力だ。殴って分離を図るつもりか。胴体と首が分離しそうだ。

「できるものなら。その前にわたくしがあなたを制限します」

制限？

「革命者に存在消滅の現実化を押しつけるのは難しい。しかし、因子を抑え込むことはできます」

悪魔が神話性を自らのものにし、現実化を為そうとしているのを感じる。一体化している僕には、悪魔のことがよくわかった。わかり始めた。悪魔は戸惑っている。こいつに、こいつらにとって、神話性現実化病患者はちよつとばかり似ている兄弟のようなものだ。

特に僕は。源流を同じとし、オリジナリティで言えば悪魔のほうがより本元に近い。魔力という要素を僕はおいしくいただいている。必ずしも魔力患者が劣化コピーではないが、悪魔のほうが純度が高いと呼ぶに相応しかった。でも、末端のほうでは、現実らしい現実のほうでは、僕らのほうがうまく立ち回れる。僕らのほうが適応している。進化している。悪魔は不健康。神の位置。悪魔は歯がゆい。なぜ我々こそが選択し、活動し、謳歌していないのかと。なぜ我々は無知たれないのかと。

現実化をモノにし出した悪魔の昂揚が伝わってくる。新しい玩具を手に入れた子供、大人。どちらも持ち得ることへの感謝。悪魔からの逸脱。

ああ、僕らは僕らであろうとして、そして僕らであることから脱出しようとする。

「これが！」

悪魔が叫んだ。
それだ。

「これが、これが我々に味わえない、味わえなかった味なのか！」
甘くとろける美しき醜さ、現実。

悪魔は感動にむせび泣いていた。

「このちっぽけな、落書きみたいな力！ 我々と革命者の膝元にも及ばない、幼児！ 卑小かつ矮小。なんて、くだらないんだ……」

現実化は為される。フィカソトリアの革命者たる力を、抑え込む。彼女の身体性ではなく、革命性に絞れば、この現実化は成功する確率は高かった。

タン。

何度も聞いてきた銃声がやけにみみうちく響いて、僕は死んだ。

僕は体から離れて、空中から事態を見た。幽霊にでもなったようだ。

「というより、悪魔です」

と、悪魔が話しかけてくる。もうずっと悪魔悪魔して疲れたよ。お被いしてもらおうかな。

「我々と一体化していたのは幸いでした。いえ、一体化していたから殺されたので、不幸ですか」

銃を構えたガラハロンドルが、僕の死体に歩み寄っていた。あの野郎、なに殺してくれてるんだよ。あと、おまえ、僕は死なないって言ったのに。嘘つき。

「申し訳ありません。興奮していたもので、気づけませんでした。やはり一体化していたために、あなたも反応できなかったようですね。我々が殺したようなものです」

僕の死体は見事にまた心臓を撃ち抜かれていた。神話性現実化を行使している隙にやられて、治す前に死んでしまったようだ。訝えないな、どうも。

死体に歩み寄ってきた犯人ガラハロンドルは、真っ青な顔でフィカソトリアに声をかけていた。

「きみほどの革命の因子を、むざむざ失うわけにはいかない」

「もう、失った」

ぽつりとフィカソトリアはつぶやいた。

「なんだって？ 遅かったというのか……？ きみの想い人を殺してしまった！」

遅かるうが早かるうが、僕が死ぬのは変わらないね。

「死なない。アガイは死なない」

死んでます。死んでますよ。

蘇って頭を叩きたい気持ちでいっぱいだった。しかし、このまま死んでいれば、わずらわしくもないのだろうか。あの世まで追ってきそうだけどな、彼女は。

「人間の意味でも我々の意味でもあなたは死んでいます、生き返ることは可能です」

さらりと言ってくる悪魔に、僕は、どうしようかな、と本気で悩んだ。

フィカソトリアは悲しみも怒りも浮かべてはいなかった。淡々と死体を眺めていた。やがてどんどん冷たくなっているであろう僕の唇に自らの唇を重ねて、またじっと見た。お姫様のキスで蘇るのも思ったのかもしれない。もしかして、本当はさつきも。

おとぎ話はおとぎ話。うまくいくときもある。今回はうまくいかない。僕は王子様じゃない。メルヘンの魔法使いはいない。魔法はあってもいいし、実際僕も魔法使いのようなものだと考えられなくはないが、すべてを解決できはしない。したくもない。させたくもない。ない、ない、ない、ない。

「どうしますか。肉体を失ってから再構成するには手間がかかりますが」

あんたは僕が生き返ってもいいのか。

「ええ。彼女が別世界へ影響を及ぼさないようにしましたから。むしろあなたには神話性現実化病を進行させて、魔力を使ってもらいたいのです」

わからないな。わかるほうがおかしいのかな。

「この世はどうにも、バランスを取ろうとします。一つの世界だけではなく、たくさんの世界の中で。我々は愚かしく世界を終わらせたいのです。あなたは、多くの世界に存在し、つながっている。つながっていますが、別世界に直接個体で影響はできません。一を二に増やして介入はできない。一の意味が深くなることはできませんよ」

ようするに？

「要するのは難しい。省略してまとめると、こことは別にまた世界があつて、我々はそういった一つ一つの世界を終わらせようとしているのですが、あなたが活躍してくれると、それがやりやすくなるのです」

世界を終わらせる手伝いをしているってことか。

僕はどうでもいい気分です、死体をお姫様抱っこし始めたフィカソトリアにどういった嫌がらせができるかを考えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1536w/>

魔神患者の傷痕

2011年10月10日01時51分発行